
ドラゴンナイト・サーガ

マオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンナイト・サーガ

【Nコード】

N6585F

【作者名】

マオ

【あらすじ】

大国ファージの美しい姫君、リラ。世間知らずでワガママな彼女が、突然刺客に襲われる。危機に颯爽と駆けつけた凄腕の剣士は、なんと十歳の少年で！？ありがちなファンタジーです。

プロローグ・突然に、出逢い

竜の大陸、竜の国。

『テリリス竜聖母』の加護を受けし所。

ファージと呼ばれる国　そこから全ては始まる。

かつぽかつぽ。馬車はゆったり進んでいく。

彼女は深く深くため息をついた。

冗談じゃないと心の中で強く呟く。

彼女の名は、リラ・ファージ・フォルシア。

十六歳になったばかりの少女で、この聖王国ファージの重要人

物である。

たった一人の王女は近隣にも名高いほどの美少女だ。

亜麻色の髪に生氣輝く新緑の瞳。鼻筋はスツと通っていて、可愛らしく小さな唇。少し細身ではあるがプロポーションだっていい。彼女の姿を見た者は誰もがつつとりとしただろう。

だが、当の本人は不機嫌の骨頂にあるためにすねたような表情になっていた。それはそれで可愛らしく、どんな表情であろうとも美人は絵になる。

「……姫様。どうかご機嫌を直してくださいまし」

姫の身の回りの世話をしている侍女が、苦笑して言い聞かせるようにそう言ったが、リラは聞こえないフリをしてそっぽを向いた。視線の先には窓がある。

その外には美しい緑が広がっていた。

天気もよく、日光に照らされた緑は美しい。寝転がるには最適の日和である。

そんなに天気がいいのに、リラは反対に憂鬱ゆううつなため息をつく。外に出かけるのはいい。馬車に乗るのもかまわない。それが単なる旅行や散歩なら。

問題は行き先なのだ。

何が悲しくて大嫌いな婚約者のところに遊びに行かなくてはならないのか。

リラの意思で決まったことではないので、なおさら嫌だ。

親の決めた将来の伴侶は、ちび、でぶ、ぶ男の見事に三拍子揃った軟弱男で、認められるのは家柄のみという、女性から見たならば最悪の男であった。

この婚約が決まったとき、リラは本気で父王を恨んだものである。近隣国一の美女と名高い自分が、『無能・無知・ぶさいく』の三拍子男を婿にしなければならぬのか。

外交のためとはいえ、拷問だ。

確かに彼は結構大きな国の王子なのだが、せめてもう少しまし

な人と思うのはわがままなのだろうか？

「……白馬に乗った王子様……とはもう言わないから、せめてもうちょっと……」

不満が口をついた。『白馬に乗った王子』というならあの男でも当てはまってしまう。

身分は王子で、白馬も持っているのだ。言葉に合わないのは本人の容姿だけである。

「……命懸けて守ってくれる美形の騎士とか……勇者とか……身分なんていいわよこの際……アイツを見てたら身分なんてなくていいわ。どうしてあんなのが王子なのよ……王子って言ったらやっぱり白馬に乗ってもおかしくないくらい美形でないと」

ぶつぶつ。不満は止まらない。

向かいに座っている教育係のキツそうな印象の中年女性が、王女の言葉遣いにこぼんと咳払いをした。

聖王国ファージの姫が、庶民のような口の利き方をするなど言いたいのだろう。

リラとてそれはよく分かっている。公の場ではそれらしい口の利き方をするが、こんなお忍びの中で堅苦しい話し方をするのは息が詰まる。

はあーとため息をついて、リラは言葉を止めた。なんだかこのまま咳いているとお小言が来そうな気がしてきたからだ。

ただでさえ行き先が憂鬱なのに、このうえお小言なんて御免である。

気を紛らわせるためにお菓子の皿に手を伸ばした。

同時刻。

お忍びの姫の馬車をかなり先から目にした旅人がいた。彼の向かう先からこちらへと、森の緑にまぎれない護衛つきの物々しく立派な馬車が来るのを見て、彼はさりげなく道をそれた。一目で中に

いるのがややこしい立場の人間だと分かったので、面倒を避けたのである。あんなにゆっくり進む馬車なら、よほどの人物が乗っている。

森の中のために道をそれたら獣道くらいしかないが、それでもあの馬車と鉢合わせするよりはましだろう。

「お、いいもん見つけ」

嬉しそうに彼は呟く。それた先には小さな泉があった。ちょうどいいと彼は馬から下り、一休みしようと座り込んだ。

どうせ当てのない気ままな旅だ。目的も意味もない旅。

けれど彼はそれで満足だったのだ。何かに縛られて生きていくのは真つ平だったし、自分が何かを縛り付けることもまた、彼の好むことではなかったから。

風のように雲のように自由にのんびりと毎日を過ごしていた。

水を汲み、飲んでみる。泉の水はほどよく冷たかった。今日は陽気がいいので水浴びするのも気持ちがよさそうだ。

とりあえず靴を脱いで冷たい水に足を突っ込む。背負っていた愛剣は脇に置いた。

「きもちいいなあ」

のんびりとくつろぐ。

ごろりと寝転がると、隣に馬も座り込んできた。彼の大切な相棒である。

寄り添うように休んでいると、馬車の音が近付いてきた。

例の厄介な馬車だろう。あんなにゆっくり進んでいて、御者はいらいらしないのだろうかなんて他人事のように考えた。

音が進んでいく。そのうちすれ違っだろう。向こうからこちらは見えないだろうが。

だが。

「……………？　どーした？」

彼の相棒がそわそわしだした。立ち上がり、ある一点を見続ける。

その頃には彼も気がついていて、泉から足を出して素早く靴を履く。立ち上がり、剣を背負う。

馬車の音がうるさい。御者や護衛は気がついていているのだろうか。先ほどから馬車が近づくことに強くなる殺気に。

道をそれる前から人の気配は感じていたが、殺気にはなっていなかったため、旅業の集団でも休んでいるのだろうと思っていたが、どうやら違っていたようだ。

緑を透かしてうかがってみるといくつかの人影が見える。

特に隠そうともしておらず、動きも粗野だ。野盗の類たぐいに見えるが、普通野盗が狙うのなら個人で旅をしている者か、あるいは金を持っていそうな旅業を狙うのが一般的だろう。

あれだけごてごてと護衛がついている馬車など普通狙わない。返り討ちにあう確率のほうが高い相手をわざわざ狙うより、簡単に襲えて儲けが大きい旅業のほうが楽なはず。

それでもあの馬車を狙うという理由はなんだ？

まあ、自分には関係ないなと彼は思った。騎士の護衛がついているのなら野盗程度に手こずることなどないだろう。

貴族などの厄介な存在に自分から関わるつもりもない。

無視を決め込んだ瞬間、彼の視界の隅に気になる身のこなしをする男が映った。野盗とは動きそのものからして違う。修練した動き。それも正規に鍛えたものとは思えない。

暗殺者アサシンだ。彼の直感がそう告げている。

余計関わりたくなくなった。そんな存在が出て来るということは、ひたすら厄介な問題が絡んでいるに違いない。財産問題とか後継者問題とか、どろどろしたものだろう。

関係ない関係ない、心の中でそう呟いたとき、状況が動いた。

お菓子を一口かじったとき、がくと馬車が揺れて止まった。乱暴な操作に侍女が不満げに「何事ですか」と声をかけた。

何が起きたのだろう。そう思うリラの前で、教育係の女性がいぶかしげに窓から首を出して前方をうかがおうとした

銀しろがねの光が走る。

教育係の首が裂けた。馬車の外に向かつて鮮血が吹き上がる。

何が起きたのかも分からぬまま、リラは悲鳴を上げた。

「きゃああああっ！！」

殺気がそこかしこで吹き上げるのとほぼ同時に女の悲鳴が響いた。

声からして若い女性と思われる。彼は眉を寄せた。

女がいるらしい。貴族などには関わりたくないが、危機に陥っているのが女や子供、老人となると……それでも数瞬、彼は悩んだ。

相棒が鼻先でツンツンと彼の肩をつついてくる。そして、馬車を示した。

そこには文様が彫りこまれている。

よりにもよって、ファージサフニア国王家の紋章・『竜聖母』ドラゴンスターを表したものだ。中心の青玉エメラルド、左右の翠玉エメラルド、その根元の紅玉ルビー、それらに添うように真珠パールが配置されたもの。

がつくりと彼はうつむいた。アレを見てしまった以上、見捨てるわけにはいかない。

「ここで待っていてくれな」

相棒にそう言って、彼は剣を抜いた。

伝承サーガはここより始まった。

1・危機に、落ち・1

たったの一刀で教育係の命を奪った男は、馬車のドアを引きあげ、素早く侵入してきた。おびえる侍女を殴りつけ、リラに迫る。

「姫様に近寄るな無礼者！」

一緒に乗っていた警護の女性、セリアが剣を引き抜こうとするが、もともと武器を手にしている者と今武器を抜いた者が争うには不利すぎる。セリアはあっさりと武器を持つ手を斬られ、戦闘能力を奪われた。刺客はそれ以上セリアに構わない。

リラの胸元に鈍く光る刃を押し当ててきた。

「竜聖母ドラゴクワイの御印みしるしはどこだ」

低くそう訊いてきた。その問いはリラにやはりという確信を与えた。

『御印』はファージの王となる者が持つ、青い雫形の貴石がはまつた指輪だ。

リラはそれを父王から預かる身なのである。リラの夫に与える、いわば王の証。次代の王を選ぶ権利があるリラが身から離さず持ち歩くべきものだ。

もつとも、実際には彼女に選ぶ権利などなく、ただ持ち歩いていざずれ結婚式などの儀式のときに相手 三拍子男に渡すことになる。

刺客はそれを欲している。ということはこの刺客の雇い主は王位を狙うもの。

王位継承権を持つ者か、それとも更なる権力を求めるがゆえに、権威を求める貴族か。

心当たりはそれこそ山となる。

「……誰に雇われたの」

刃を押し当てられ、恐怖を感じつつもそれを押し返し、リラは気丈なところを見せた。刺客は応えず、刃をリラの胸元から首筋へ移

動させた。

言わねば殺してから探すという意味表示だろうか。冷たい殺意を悟る。

侍女たちが色濃いおびえの声を上げた。リラが殺されれば、彼女たちも殺されるだろう。刺客を目撃しているのだから、口封じされるのは間違いない。

それが分かっているのなら、もう少し抵抗したらどうなのとリラは青ざめながらも思う。

リラ自身は怯えもあって身動きが取れない。震えが止まらず、動けない。

誰かが助けに来てくれないかと思うが馬車の外では剣の打ち合う音や、うめき声がある。中にいた護衛のセリアは負傷し役に立たない。外の護衛は外の刺客を相手にするので手一杯らしい。ひよっとすると姫が窮地に立たされているのにも気がついていないかもしれない。

役立たずばかりだわ！ 内心恐怖に叫んだ。誰か一人くらいこつちを見に来る人はいないの！？

リラは今まさに彼女を救おうとしている存在を知らない。

彼女に分かるのは、目の前の刺客は『御印』を渡さないと彼女を殺すだろうということだけだ。

『御印』は金の鎖を通して彼女の首に下がっている。ドレスと羽織っているマントで刺客からは見えていないが 彼女が身に着けていることくらい知っているだろう。

渡してしまえば助かるだろうか。リラはすぐに答えを出した。

否。渡せばその場で首を斬られるだろう。この刺客に彼女を生かしておく気がない。向けられる殺気はそう思わせるほど強い。

武術の心得のないリラにはそうとしか思えない。『御印』を渡そうが拒否しようがいまや自分の命は風前の灯に思えた。

……せめて噛み付いてやろうかしら。リラがやけくそにそう考えたとき、馬車の外で変化が起きていた。

まず最初に騎士たちの驚きの声がし、ついで刺客らしい男たちの嘲あざけるような笑い声が聞こえ、すぐにそれは悲鳴に変わった。

目の前の刺客に動揺が走ったのをリラは見た。その隙をセリアが見逃すはずがない。落とした短剣を刺客の足に突き刺そうとした。「！」

刺客は間一髪でそれを避けるが、リラから離れてしまう。そこにほかの侍女が割って入った。王女にはもう手が届かない。

刺客は無言で馬車から飛び降りた。目的が果たせないのならばみやかに逃げるつもりなのだろう。

しかし、そこへ、
「逃のがすかつ！」

鋭い声が飛び、同時に斬光が走った。見事な斬撃は刺客の右腕に食い込み、それを切り落とす。

刺客はとつさに飛びのけ、恐るべき斬撃を放った相手と向き合う格好になった。

己の右腕を切り落とした相手を見て、刺客は驚愕した。

リラも自分を救ってくれた者を見て、少なからず驚いた。

そこにいたのはまだ年端もいかぬ少年だったのだ。

リラよりもかなり下だろう。

十歳を越えたか越えないかくらいかと思われる。

あと七、八年もすればと期待させるような容姿だ。

将来は有望だがあくまでも将来の話で、現在はどう見てもお子様である。

リラがまさかと思ったように、刺客もまさかと思っただろう。

こんな子供があの一撃を放ったとはにはわかには信じがたい。

だが、事實は揺らがない。少年は立て続けに刺客に斬りかかってきた。右腕を失った刺客に少年の疾風のような剣技に抗う術はすでになく、二、三撃左腕で耐えられたのは奇跡だった。次の一撃で自分は殺されると刺客は思い、観念するしかない。見ていた誰もが次で決まると思っていた。少年の剣は間違はなく刺客の命を奪い去

るだろう。

しかし、少年はその場の誰よりもずっと冷静だったのだ。

少年は最後の一撃を繰り出す。刺客の頭を狙ったそれが首を飛ばすだろうと誰もが思った。

よける間もない。刺客の頭に直撃する。

首は飛ばなかった。血も飛ばず、刺客は地面に倒れただけである。気がつくのと、馬車の周りには倒れた人間がたくさんいた。大半が知らない男だ。

「ええと……？」

小首をかしげるリラに構わず、少年はしゃがみこんで刺客の服を破り、右腕の止血にとりかかった。どうやら刺客は死を免れたようだ。少年の手当ての手際は良く、血はすぐに止まる。

「……殺せなかったのか？」

騎士の一人が少年の傍らに立ち、刺客を見下ろす。

「……完全に気を失っている。

「まさか。殺『さ』なかったんだ。死なせたら雇ったのが誰なのかわからない」

少年はこともなげにそう言った。最後の一撃、彼は剣の平で刺客の頭を叩いたのだ。のびている刺客はただの脳震盪で気絶しているだけ。切り落とされた右腕を放っておけば死んだだろうが、それはちゃんと手当てをした。

「あとは尋問するなり何なり好きなように」

そう言って少年は立ち上がった。一度振りぬいて血を落としてから剣を背中の鞘に戻し、ストームと木陰に呼びかけると一頭の馬が姿を現す。

少年の馬らしい。栗毛の綺麗な馬だった。

そのまま少年は馬とともに去ろうとする。名前も名乗らず、こちらの事情も聞かずに。

あっけにとられたまま見送りかけ、我に返ってあわてて騎士の一人、護衛隊長が少年に声をかける。

「ま、待つてくれ」

「なに。他に何か用あるのか？」

少年はちょっと眉をしかめて振り返った。なんだか嫌そうだ。リラのほうなど見向きもしない。王女とか騎士とかそういうことを気にもしていないような様子だ。

「礼を言わせてくれ、助かった。それと、もし急ぎでなければ同行を願えないだろうか。いろいろ報告せねばならないし、いまので大分負傷者も出た」

子供に向かつて何を言っているのだろうと思うが、実際この少年の腕前を見た後では文句もない。この子供は強い。常識を覆すほどに。

馬車を襲った連中に手こずっていた騎士たち。野盗だとばかり思っていたのだが、中に暗殺者が混じっていて野盗をおとりに狡猾に動かれ、気がついたときにはかなりの怪我人が出た。動揺しているうちにこの少年が現れて、ほとんどの刺客を一人で斬り捨ててしまった。この子供がいなかったら最悪全滅していたかもしれない。

姫の護衛のセリアも怪我を負っている。

お忍びで護衛の数が少なかったのもまずかった。

これでは万が一、魔物でも出たときに對抗できない。姫を護ることにすら出来ない恐れがある。ちゃんと礼金も用意しよう、と。

隊長がそう説明すると、少年はもつと嫌そうな顔になった。

あからさまに迷惑だと眉間に刻まれたたてジワが述べている。

「何もそこまで嫌な顔しなくてもいいじゃない。光栄でしょう。城にいけるのよ？名譽だと思いなさい」

庶民が城に入ることなど滅多に許されることではないのだ。少年はどうみても子供だし、城を見たら無邪気に喜ぶだろうと、それを想像してリラは親切のつもりでそう言ったのだが……予想と違って少年はますます嫌そうな顔をした。

かちんと来たのはリラである。王族で、なおかつ近隣国一の美女と謳うたわれる彼女をこの子供は思いつきり嫌うたそうな顔で見たのだ。プ

ライドを踏みつけられたと感じて無理はない。

「何？ 侮辱する気？」

じろりと睨んでやる。睨むといっても美しい顔で睨まれて、怖いと感じるものは少ないだろう。少年もそうだったらしく、怯えるというよりは困惑、困惑というよりは迷惑に感情は移行したようだ。

「……何も言っていないぞ、おれ」

眉をしかめて、あきれ半分にそういつてくる。

子供ゆえ、恐れを知らないのか、敬意を知らないのか。堂にいった態度ともいえるが、騎士や侍女たちには反感を買った。

「姫様のご好意に、なんと無礼な！」

「礼儀を知らん小僧が！」

姫や自分たちを救った者だという意識はあつという間に吹き飛んだらしい。エリアなど少年に向かって剣を抜きそうな勢いだ。

このままだと、無礼を働いた狼藉者ろうじやくものとして逆に斬られかねない。

少年はそれを察した。

だからと言ってこのまま相棒の背に乗ってとんずらこいても、待っているのはお尋ね者の賞金首。

一度目をつけられたら、どこまで逃げても無礼者扱いだろう。

畜生と思ったのか、少年はやけくそ気味に承諾した。

「わかりましたっ！！ お供すればよろしいんですねっ！！」

「始めからそう言えばいいのよ」

つんと顔を逸らしてリラは言っつてやった。正直にいい気味だと思っっている。

少年はリラを睨んでやりたかった。

子憎たらしいお姫様は興味が失せたのか、こっちを見ようともしない。見ていたら見ていたで、またぎゃあぎゃああつるさいのだろう。彼はあきらめた。姫を睨みつけたらまた無礼がどうこう言われるのは明らかである。

付き合わないのが一番だ。本当なら関わらないのが一番だろうが、やむをえない。

「これだから王族や貴族は嫌いなんだ……」
こっそり呟いた声を聞いたのは愛馬のストームだけだった。

1・危機に、落ち・1（後書き）

最初の印象、最悪ですね（笑）

1・危機に、落ち・2

げっそりしながら少年は相棒の腹によりかかる。小柄な子供のわりに乗っている馬は立派だ。

名馬だろう。護衛の騎士たちが乗る馬よりよっぽど美しい馬である。

「少年、名はなんと言つ？ 私は姫様の護衛隊長を勤めるレイトという」

そういえば名を聞いていなかったなどと、隊長・レイトが名乗り、少年の名を聞いた。

「おれはラディ。ラディ・スポット。こっちはストーム。おれの相棒だよ」

ぼんと馬の腹を叩いて言う。ストームと呼ばれた馬はヨロシクとでも言うようにぶるると呟いた。

主人と違って馬は素直だとリラは思った。

「同行者はいないのか？ 君一人か？ 親は？」

幼い少年が一人で歩いているのか。いくら腕の立つ剣士とは言っても、どう見ても子供だ。

保護者はいないのかと騎士が訊くと、少年は頷いた。

「まあ……一人旅の最中つていうか……や、ストームも一緒だから二人旅だ。うん」

屁理屈としか思えないようなことを言つて、少年は会話を終わらせようとした。

どうやらあまり訊かれたくないことらしい。

何かまずいこともあるのだろうか。どこかで犯罪でも起こして逃げているのかもしれない。やたらと世慣れしていて口達者のようだし、ありえないことではないだろう。

事情持ちのようなので、あまり深く訊かないほうがよさそうだと騎士たちは判断し、少年の素性を探るのはやめにした。落ち着いて

からゆつくりと考えればいい。

どうせ子供だ。たいしたことはしていないだろうと。

あれほどの剣技を見ていても、いかにも子供子供した外見なので、ついそう見てしまう。

「姫様、しばらくのご辛抱を」

侍女が言い、木陰に場所を作ってリラを座らせた。

馬車は切り殺された教育係の血で血まみれなのである。汚れたままの馬車に姫を乗せるわけにはいかないし、死体を積んで歩くなど冗談でもできない。

片づけを始める者をなんとなしに眺めてもつまらないので、リラは先ほど現れ、自分を救ったおチビさんを眺めた。

薄い栗色の髪に、珍しい金色の目をしている。緑色のバンダナを巻いているのは一応おしゃれのつもりなのだろうか。その他はいたって普通の旅装束だった。背中に背負っている剣だけが年不相応である。大人が使うような長剣だ。

この少年の背丈では使いづらだろうに、彼は軽々とその剣を使いこなしていた。なまじの戦士より遥かに強いかもしれない。

少なくとも、この場にいる騎士より強いのは確かだ。

「ねえセリア」

「はい、姫様」

傍らで傷の手当をしていたセリアに呼びかける。

「あの子、どこか高名な剣士の弟子か何かかしら？」

「そうかもしれません……ラディと言う名もスポットという家名も私は聞いたことがありません」

リラより物を知っている彼女が知らないと言う。ほかの者たちも同様だ。

「君は誰か高名な人の息子かい？　すごく才能があるようだが」

騎士の一人がそう訊くと、ラディは首を振った。

「いや、違う」

どこかの弟子でもないと言う。その割には剣も馬も立派なものだ。

ストームはかなりの名馬だし、ラディの背負っている剣は上質のものらしい。

リラにはサツパリよしあしは分からない。見た限りでは柄の部分は緑色の貴石でできているようにも見えた。剣と柄をつなぐ部分はまるで花のような貴石の配置になっていて、見ていて綺麗ではある。「業物わざものだな。どこで買ったんだ？」

振るっていたところを間近で見ていた騎士が、ラディに「冗談交じりに話しかけた。殺伐とした雰囲気や和らげようとしている。」

「もらいもんだよ」

彼はあっさりそう答える。

「そうか、そうだな。こんな良い剣そこらには売ってないよな。竜ドラゴン聖母メサールにでも与えられたかい坊主？」

まるで伝承の中にあるような『竜聖母』が勇者に与えるといわれている名剣、伝説の中の産物のような　ラディが持っている剣はそれほどの業物であった。

「そう、そのとおりさ。だっておれ竜騎士ドラゴンナイトだからラディは笑ってそう返す。」

変な子。リラはそう思った。騎士や侍女たちは笑っている。ラディのいったことを冗談と取ったのだ。少年も笑っていたし、誰も本気にはしなかった。当然である。こんな子供がこの国を守護する神『竜聖母』が選ぶ『竜騎士』のわけがない。聞くとラディは見たままの十歳であるという。

たった十歳の子供が伝説の中の存在である『竜騎士』になれるわけがないのだ。

それに少年は竜など連れていない。いるのは一頭の馬だけだ。どう考えても単なる冗談である。

相手にするのも馬鹿らしくなり、リラはラディから興味を外した。憂鬱ゆううつであった。命は狙われるし、命の恩人は腕は立つが子供で、その上礼儀知らず。

おまけにそんな子供が同行することになった。

リラの一言さえなければこの場でお別れだっただろうことは、すでに忘れてしまっている。

城についたらいくばくかの礼金を与えて、さっさと追い払ってしまおう。

リラはそのとき本気でそう考えていた。刺客から救ってもらえたのはありがたいが、お礼の気持ちにも限度がある。そう思ってくるぐるに縛られている刺客のほうへと目をやる。

大体コイツが襲ってくるのが悪いのだ。恨みがましく睨んでいると、

「うづうづ」

うめき声が上がリ、刺客がわずかに身動きした。意識が戻ったらしい。

「！ 猿ぐつわしてないのか！？」

ラデイが声を上げる。刺客を縛り上げたのは騎士の一人だ。両手足を縛っただけで猿ぐつわなどしていない。どうせ逃げられないとたかをくくっていたのだ。

「さて！」

ラデイは叫んで刺客に駆け寄った。少年の手が届く前に刺客の体から力が抜ける。

自害した。口の奥にでも毒を仕込んであったのだろう。物語の中でもよくある展開である。

よくある展開なのに、騎士は警戒していなかった。

リラの憂鬱はその度合いを増した。

馬車が再び走り出したのはかなり時間が経過してからだった。初めの予定では昼には婚約者がいる城に着くはずだったのだが、この分だとどうやら夕刻になりそうだ。

果物や菓子があるためにリラは空腹ではないが、不機嫌は回復しない。

三拍子男のところに行くのはいやだが、いつまでも馬車に乗るのもいや。

侍女たちが辛気臭い顔で黙っているのも気に障る。

さらに彼女を不機嫌にしているのは、馬車の横をついてくるラディの存在だった。

この子供がまた、いかにも不機嫌つてな顔をしているのだ。リラの護衛としてついてくる榮譽を全く理解していない。

わがままもいいところなリラの考え方だが、本人はわがままだと思っていないかった。

贅沢ぜいたくの中で甘やかされて育てられたのだ。これでおとなしく、しとやかだったら一種の奇跡だろう。

気が強くてわがまままで世間知らずなお姫様は、当然のように状況の改善を要求した。

「休みたいわ。馬車を止めなさい」
それを聞いて、困惑したのは護衛の騎士たちである。

ラディもあきれて姫を見た。能天気にもほどがある。刺客に襲われてまだいくらかも経っていない。襲われたことを忘れたかのように休憩したいなどと、この姫様は何を考えているのか。

今は一刻も早く安全な場所へ行くことが先なのにこの姫ときたら……また襲われるという可能性を少しも考えていないのだろう。

ある意味怖いもの知らずだ。

ラディの頭の中をさまざまな単語が回っていく。

わがまま。自分勝手。少し危機感というものを持つ。この世間知らず。大馬鹿。

……言いたいけど言えない。口にすればどうなるか、考えるのも面倒だ。

城とやらに着いて報告というものに付き合ったら、さっさと去ろう。今更ながらそう決めるラディ・スポット十歳である。

貴族や王族と関わるのは、彼の本意ではないのだ。

早く城に着いたほうがよいのではなどと、姫を説得しようとする

騎士レイトやセリアに、大変だなと同情すら覚える。

十歳にしてはやたらと世慣れている少年は無駄だらうなとも感じている。

このわがまま姫の要求に、御付きの者が逆らえるわけがない。

結局、ひと時の休息となった。

触らぬ神にたたりなし。ラディはなるべく姫から離れて木陰に座った。

ストームが甘えて顔を摺り寄せてくるのを、よしよしと撫でてやる。早くこの一行とは別れたい。心底からそう願う。気ままに相棒と旅をしていたのに、とんだ災難だ。

しばらくそうしてストームとくつろいでいると、退屈した『災難の発端』がラディのそばによってきた。

リラである。

露骨にラディは顔にこつち来んなと書いた 思い切り顔をしかめたのだ。

リラは器用に片眉を跳ね上げたが、とりあえずは何も言わなかった。

言葉でなく、行動で示す。

ぺちん。気の抜けた音がした。姫が無礼者を引つ叩いたのだ。

「……………」

黙ってラディは立ち上がった。立つてもリラの肩の辺りまでしかない少年は、そのまま背中中の剣に手をやる。

「な、なによ、そっちが悪いのよ」

怒ったのかと少しあわてるリラを無視して、ラディは周囲に視線を走らせた。

「はなれるなよ」

小声でリラにそう指図する。

「え」

何を言っているのかわからず、リラは不審な表情になったが、それも一瞬だった。

ラデイが剣を抜く。どう見ても姫に対して剣を抜いたようにしか見えず、騎士たちがざわめきたった。

「姫に剣を！ 無礼者が！」

などと叫びつつ少年に殺到しかけたとき、風を切る音がした。

思わぬ強い力でリラは引っ張られ、気がついたときには小さな背中にかばわれている。

目を瞬かせて、さらに気がついた。足元に矢が落ちている。

目の前の背中を見た。少年はすでに臨戦態勢を取っている。そこまで見てから、ようやく何者かがどこかに潜んでいて、矢を放ってきたのだと分かった。

それをラデイが切り落としたらしい。

ほかの誰も気がついていなかったが、どこかに刺客が潜んでいるのだ。その証拠にあちこちから矢が飛んできた。

そこに至って初めて騎士たちも気がつき、おのおの武器を抜く。

彼らが護るべき姫に射掛けられた矢は、全てラデイが切り落とした。

その間、リラは呆然としていただけである。動けもしなかった。

「囲まれてるぞ、固まるな！ 的になるだけだ！ 散れ！」

ラデイが声を張り上げた。飛来する矢をまた切り落とす。

リラには飛んでくるのさえ見えないものが、少年には余裕で見えているらしく簡単に切り落としていく。人がやっているのを見ると自分にもできるのではないかと思ってしまうが、他を見ると簡単なことではないのはすぐに分かった。

侍女が倒れている。八人付いてきた侍女が今は三人に減っていた。

騎士など半数に減っている。姫を護るべき騎士のくせに、刺客の気配にも気付かないのかとラデイは内心で舌打ちした。

あまりにも弱すぎる。

そのうち矢では埒が明かないと見たのか、茂みを突っ切って刺客が姿を現した。まっすぐに姫に向かうその男を、ラデイはあっさりと斬って捨てた。彼を単なる子供と侮ったのが致命的なミスである。かと思えばほかの刺客も姿を現し、襲い掛かってきた。数はそれ

ほど多くないが、問題はまだ矢を放つて来るものがあることだろう。その矢が、馬車を引いていた馬の背に突き立った。深くはない角度だが、驚いた馬が悲鳴のような鳴き声を上げて暴れた。馬は繊細な生き物である。一頭がパニックに陥ると、それはほかの馬にも伝染してしまう。

走り出した馬に騎士が一人はねられ、侍女が一人踏み潰された。「くそつ、馬が!!」

刺客だけでなく、馬に手勢を減らされてしまい、セリアが呻く。彼女も浅くない怪我を負っておりまともに戦えない。リラを護るところか自分の身を護るのが精一杯である。

「ストーム!」
ほかの馬と違って、不思議とストームは落ち着いていた。ラデイが呼び、茂みをちらりと視線で指すと、迷わずそちらに突っ込んでいく。

そこには弓を持った刺客の一人が隠れていた。突進してくるストームをあわてて避けて茂みから出てしまう。そこにラデイが剣を投げつけた。

最初の矢でやられた騎士の剣である。
体勢を崩したところに剣を投げつけられ、よけようもなくその刺客は絶命した。

その頃にはほかの刺客も騎士たちによって片付けられている。刺客の数があまり多くなかったのは幸いだった。もし最初と同じくらいの手勢で襲われていたら。

そう思うとぞつとする。
護衛隊長のレイトも先の矢で息絶えてしまっており、出発したときより人数は半数以下に減っていた。運悪く、首に矢が直撃したのである。

馬にはねられた騎士も、息がなかった。
重く息をついて、ラデイは剣を振り、血を落として鞘に収めた。戻ってきたストームにありがとう、助かったと礼を言って撫でてや

۵۲۵۸۰

1・危機に、落ち・2（後書き）

まだまだ危険は去っていないようです。

1・危機に、落ち・3

その少年を眺めて、リラは礼を言うべきだろうかと迷った。また助けられてしまったのだ。いくら何でも一度くらいは礼を述べるべきだと思う。

頬を張ったことも詫びるべきだろうか。

でもアレはこの子が無礼だったからだし、自分に落ち度はないはずだ。

それでも、命の恩人には違いないしと、悩んでしまう。

とんちんかんに悩んでいる世間知らずの姫が考えているより、状況は遥かに深刻だった。

馬車も馬も暴れ狂ってどこぞへ行ってしまったのだ。

残っている馬はラデイの愛馬、ストームだけである。まさか姫を歩かせるわけにはいかない。人数もいる。どう考えても馬車か馬は必要だった。

しかし、指示すべき護衛隊長は先ほどの戦いで息絶えている。他にこの場で一番指揮をするにふさわしいのは、姫の護衛をするセリアだ。仕方なく彼女はラデイに話しかけた。

「その馬を貸してくれ。近くの城か町で馬か馬車を調達してくる。無論、お礼は弾むわ」

急がねばならない。また刺客が襲ってくるかもしれないのだ。

ラデイはちよつと眉を寄せた。急ぎだということは彼にも充分に理解できるのだが、

「……それ、おれが行ってくるのはダメか」

あまりストームを貸したくないらしい。

「だめ」

止めたのはリラだ。

「あなた逃げるかもしれないし」

これだけ嫌ですという顔をされれば、腹も立つし逃げるのではと

疑いたくもなる。ここで置いて行かれればリラたちに待っているのは絶望の死だけだ。

馬や馬車を調達するには金がある。それをこの少年に預けるのは勇気がいる。

さつき逢ったばかりの子供を信じて全て預けるといっほづが難しい。

「べつに逃げたりしないよ、おれ」

心外だと言いたげにラディはむくれた。そういう表情は年相応に見える。

「セリアが行けばいいわ」

リラは取り合わなかった。生意気な子供より、普段からの護衛のほづがよっぽど信用できる。

「ケガ人はだめだろ。のんびり行くなるともかく、急いで馬を飛ばしたら死んじゃうぞ。このおねーさんのケガけっこっひどいから」

腕をかなり深く斬られている。出血は治まっているようだが、無理をするともた出血するだろう。

「そうなの？」

それすら分らないリラはセリアに向き直った。セリアは気丈に答える。

「いえ、大丈夫です」

「大丈夫って言ってるわよ、大丈夫でしょう」

だから馬を貸しなさい、と要求する姫にラディは強く息をついた。「あのなあ……ヒメサマ？ アンタに仕える人が、アンタに大丈夫かって訊かれて大丈夫じゃないって答えられると思ってるのか？」

言葉遣いや礼儀が云々と騎士たちが注意するよりも早くにラディは怒りを向けた。

「上に立つものとして、もう少し考える。護られるばかりじゃなくて、下のものを護ることも少し考えるよ。あんたがわがまま言わなかったらこんなところで襲われたりしなかったんだ」

「なっ……!」

「見てみる。何人死んだ」

ラデイが指す先。横たえられる騎士と侍女。失われた命。

「戻らないんだぞ、あの人たちは」

金色の瞳が怒りを湛^{たた}えてリラを射抜く。

「それが当然とか言ったら、おれは軽べつするからな」

ひとのいのち。それに重いも軽いも無いと。

リラは言い返せなかった。少年の言葉に言い返すことができなかった。

たった十歳の少年に反論することもできなかった。

「……君の言いたいことも分かるが……今はそれどころではない。

我々は姫様をお護りせねばなんのだ。そのために命を懸けるのならば光栄なこと」

騎士の一人が割って入った。

「……馬を貸してくれ。私が行こう」

セリアではなく、多少のケガで済んでいる自分が行くとその騎士は言った。そうまで言われてはラデイに拒む言葉はない。

「……乗れるなら、かまわないよ」

ため息混じりにそういった。

ほっとして、騎士がストームに近付くと、ストームはすつと身を引いた。嫌がっている。

「我慢してくれ、皆のためだ」

そう言いながら騎士はストームの背に飛び乗ろうとした。途端にストームは暴れだす。

あまりにも激しく暴れるため、騎士は耐え切れず振り落とされた。ラデイが乗っていたときはあんなにおとなしかった馬が、ほかの者には容赦がない。

「……ひよつとして、とても気難しい馬なのか？」

背中を打ち、呻いている同僚を助け起こしながら、ほかの騎士がラデイを見る。

少年は困ったような表情で、

「まあ……ね」

と言いずらそうに、もごもご答えた。

だから『乗れるなら構わない』などと奇妙な言い回しをしたのだ。ストームは明らかにラディ以外の者を背に乗せることを拒否している。

何度挑戦しても、誰が挑戦しても同じだった。

「知ってたなら先に言いなさいよ！」

リラに怒鳴られて、ラディは不満げに眉を寄せた。

「だから最初に言っただろ、おれが行っちゃダメかって」

「この馬が気難しいなんて言わなかったわ」

「ケガ人に行けって言うようなヒメサマに言われたくないな」

目を合わせもせず、姫と少年剣士はちくちくと口論する。もはやそれを礼儀がどうこう言って止めるものはいない。二度も命の危機にさらされて、それだけの精神力がもうないのだ。どちらの危機も、救ったのはこの少年剣士だということもある。

「仕方ない……この子に頼むしかないでしょう」

セリアは折れた。ストームに乗れるのがラディだけだと分かった以上、この少年に託すしかない。

「とりあえず、お金は渡すから、近くの城か町……村でもいい。できれば馬車を調達してきて。姫様を歩かせるわけには行かないの」「村なら最悪、農馬しかないかもしれないよ。それでもいいか?」「……できれば馬車をお願い」

金貨の入った袋を受け取って、ラディはストームの背に飛び乗った。騎士たちが乗ろうとしたときと違って、ストームは暴れるそぶりさえ見せない。

「あんまり期待するなよ。やせた馬しかいないかもしれないから」「言って小さな剣士は相棒とともに駆けていった。」

森の中の道を駆けながら、ラディは忌々しく舌打ちする。

これでもかといわんばかりの厄介事に首を突っ込んでしまった。命を狙われているという状況をわかつていないわがままなお姫様。それを護るといふにはあまりにも弱い騎士たち。

いくら平和な時代が長く続いているからといって、あの騎士たちのありようはどうだ？

「あんなんじや竜聖母ドラゴンセイマーがなげくよな」

この大陸を、この国を、見守り続けている神様。全ての命を愛し、慈しむ、優しい竜の神。

今は伝説の中でしたか人々は覚えていないその存在。

おとぎ話の中にしか、信じられていない神様。

「なあ、ストーム。おれって親孝行だよなあ」

呟きに答えるものではなく、その意味を問うものもない。

少年剣士と相棒は風のように駆けてゆく。

小さな背中に、いまや一国の行方がかかっている。

とにかく森を抜けなければならない。馬車か馬。それも上等のもの。は望めないだろう。

ただの農村に、一国の王女が乗るような馬車などあるわけがない。ラディはこの近辺の地図を思い浮かべた。森に入る前に地図には目を通して大体を覚えてある。確かあの姫様の婚約者が持っている城が近くにあったはずだ。この辺をのんきに通っていたということはその婚約者のところでも行こうとしていたのではないか。

だとしたら近辺の村に行くより、そっちの城に行っただほうが面倒は少ないだろう。

何せラディは子供なのだ。彼のどこをどう見たって子供である。

大金を持って馬車をくださいとそこの村で言ったら、かえって面倒なことにもなりかねない。

下手をすれば、身包みみくるはごうと考えるものもあるかもしれない。

その場合は返り討ちにするだけの実力があるが、今は時間との勝負だ。面倒は極力避けたい。

時間がかかればかかるだけ、三度目の襲撃の可能性が高くなる。

「よし、ストーム、城へ行こう。婚約者の危機って言ったらいくらなんでも協力してくれると思う」

何せファージの王女様は傾国の美女と言われている。そんな相手が危機に陥っていると知ったら、婚約者でなくても男なら助けようと思うだろう。

あいにくとラディはまだお子様で、美しい姫を助けてむにゃむにゃなんて打算よりは、さっさと厄介ことから開放されたいとの一心しかなかったが。

1・危機に、落ち・3（後書き）

わがままお姫様と苦勞性な十歳児。頑張れ男の子。

1・危機に、落ち・4

日が暮れてきた。少年剣士が出発してからもう大分経つ。

幸いアレから刺客の襲撃はないが、森の中はもうすぐ夕闇に閉ざされようとしていた。

日が落ちてしまえば森の中は危険になる。

もし、闇の中で刺客に襲われれば、次は耐え切れない。

刺客だけではない。夜は凶暴な獣や魔物が現れ、活発になる時間でもあるのだ。

自然が敵となる。

ラディはまだ戻ってきていない。とうに戻ってきていておかしくない時間が過ぎているというのに。

襲撃を受けた場所からは少し離れて少年剣士を待っている。姫を護って死んだ騎士たちの遺体があるところでは姫が休めないという、優しい判断からだ。

「……やはり、逃げたのか……」

疲れきった声で騎士の一人が呟いた。

「……そうかもしれない……所詮、子供だしな」

あれだけ強くても、臆病風に吹かれたのかもしれない。大量の金貨に目がくらんだのかもかもしれない。

最悪、森の中でこのまま野宿だ。火を起す術もない中で、獣や魔物に怯えながら。

馬車が逃げてしまったせいで、食べ物もない。

リラはさつきから文句ばかりを呟いている。

「やっぱりセリアが行っていればよかったのよ！ 私の言うようにしていれば、今頃は城についてお風呂に入っただけで済んだわ」

「申し訳ありません、姫様……」

血のにじむ包帯をおさえ、セリアは謝るのみ。彼女も判断を誤ったかと思い始めていた。

城からあまり出たことのない姫付の騎士や侍女に、野宿の心得があるわけがなかった。

ましてリラに野宿が耐えられるわけがない。体がふつくらと沈むようなベッドでしか眠ったことがない姫だ。なによりも騎士たちが、栄えあるファージ国王家の姫君に、こんなところで野宿などさせられないと思っっている。

彼らにとってリラは大事な大切な姫だ。敬愛する存在だ。護らなくてはならない。

「……あんな子供を信用するべきではなかったのですわ」
生き残った侍女が叫んだ。

「きつと金貨に目がくらんで、持ち逃げしたに違いありません！」
庶民には、金貨など滅多に目にするものではない。子供であればなおさらだ。お使いで手に入るようなものではないのだから、きつと持って逃げたのだろうと。

嫌な想像ばかりが胸を覆っていく。夜の闇がそうさせる。人が眠る時間が迫るたびに、不安も大きくなっていく。

「……私が走って助けを呼んでまいります」
とつとつセリアが言い出した。走っても、助けを呼んでくると。金は全てラディに預けてしまった。この上は自力で何とかするかしない。

「いいえ、わたくしが。セリアどのはお怪我をなさっておりますもの。騎士様方は重たい鎧を身にまわっていらっしやる。身が軽く、怪我もないわたくしが参ります」

侍女の一人が申し出た。

「しかし、あなたには身を守る心得がないでしょう。夜の道だ、魔物が出ないとは限らない。危険です、私が行きます」

「なにをおっしゃるか、セリアどの。あなたのお怪我では満足に戦えまい。私が行きます」

騎士の一人も言い出した。自分が、自分がと危険な役割を果たそうとする。

「……もう少し待ちなさい」
止めたのは、リラだった。

言い合う騎士たちを見て、ラディに言われたことが頭をよぎったのだ。

『……護られるばかりじゃなく、護ることも少し考えろ』
ちらりと、遺体が置かれている方向を見る。

確かに、あの少年が言ったことは間違いではない。リラが休憩を求めなければ、少なくとも遺体の数は減ったはず。何人かは、助かったかもしれない。

リラにも、護れた命かもしれない。

「ですが、姫様……」

「もう少し待ってみて、それでも戻ってこなかったら私ももう止めない。あなたたちの誰かに行ってもらいます。それでいい？」

「……はい」

本当は今すぐにも行つてほしかったが、リラは我慢した。とても不快だった。

日が暮れていく森になどいたことがない。こんなに長い間、椅子も何もない屋外で過ごしたこともない。

あの子供は何をしているのだろうと腹が立った。本当に逃げたのなら許さない。

安全な場所に着いたら真つ先にお尋ね者として訴えよう。
姫を見捨てて逃げた卑怯者として。

そうなつたらあわてて謝りに来るかもしれない。謝りに来たら即刻牢に入れて、絶対に許さないでおこうとリラは心に誓った。

その時である。

馬蹄のとどろく音が一行の耳に届いた。それもひとつではない。

「！ まさか……！」

思わずみな立ち上げる。音はだんだん近付いてくる。
ほどなくして。

「なんと！ 真まことであつたか……！」

先頭にストームを駆ってラデイが姿を現し、その後ろのひげを生やした騎士が驚きの声を上げた。さらに後ろには豪華な馬車が見える。

「だから言っただろー……ぜんぜん信じてくれねーんだもんなあ……
おかげですっかり遅くなった……」

げっそりと疲れた様子でラデイが呟く。目的を城に変更して、快調に飛ばしていったのは城に着くまでだった。着いたら着いたで子供のラデイのいうことを門番は全く信じてくれず、取り合ってもくれなかった。退くわけにもいかないの、しつこく説明し、とにかくついてきてくれれば分かるからと何度も言うつ、しつこいと怒られ、あげくに牢屋に放り込まれそうになったのだ。

預かった金貨を見せたらどこで盗んだとまで言われる始末。

『あー、もー！ 信じなくていいからとにかくついてきてくれ！
逃げたりしないから！！ おれがうそをついてたらその場で斬つてくれていいから！！ ほんとうにヒメサマが危ない目にあつてるのを見捨てることになるんだぞー！！』

少年がそこまで言うてようやく城のものは腰を上げた。それでも半分も信じておらず、森の中でラデイを斬り捨てるつもり満々だったのだ。

それが、着いてみると本当に姫がいた。お付のものは半分以下に減っている。それを目にしてようやく少年が言っていることが真実だと理解した。

「すまんな、少年」

「……もういい……」

重々しくラデイは首を振る。素直に謝罪を受ける気力もない。
「なんか一筆書いてもらつとけば良かった……」

そうすればすぐに信じてもらえただろう。頭を抱えて後悔しているようだった。

「ご苦労様でした」

「あー、うん」

セリアに笑いかけられて、ラディは苦笑を返し、金貨の入った小袋を彼女に返した。

「使わなかったよ」

馬車は城のものが用意したので、ラディに渡したときのまま、金貨は全く減っていない。

「少しも使わなかったの？」

「城の人が用意してくれたからね」

さっくりとそう返してくる。残って待っていた皆が、持ち逃げするのではと危惧していたことを、彼は考えてもいなかったようだ。

リラは少し自分の考えを恥じた。二度も救ってもらったのに、こんな風に疑うのは失礼だ。

「……ちよつと」

「ん」

声をかけると少年剣士は振り返った。金色の瞳はいぶかしげだ。

それを見ると、言おうと思っていた言葉は引っ込んだ。

「……なんでもないわ」

「は？」

「なんでもないの！ あつち向いて！」

「……はあ」

さらにいぶかしげな表情になるがラディは言うとおりにリラから視線を外した。姫のわがままにこれ以上付き合うのは、疲れているのでかんべんしてほしい。

「姫様、お待たせして申し訳ございません。ささ、馬車へ」

「ええ」

騎士にエスコートされ、リラは馬車に乗り込んだ。

窓から外を見ると、ラディはそのままストームと共にどこかへ行こうとしている。騎士たちに止められているのが分かった。

「どうしたの？」

「いえ、このまま立ち去るといふのです」

「もついいだろ。おれがついてなくてもさあ」

少年の声が聞こえてくる。ほとほと疲れたというような、とても嫌そうな声だった。

よほど同行するのは嫌らしい。

「いやいや、そういうわけには行かぬ。恩人を礼もせず放り出したとあっては私が王にしかられる。少年よ、待ってくれ」

ひげの騎士にそう言われても、

「別に礼なんかいい」

ラディはにべもない。しんそこ、嫌なのだろう。

「あー、ラディくん」

セリアが割って入った。

「一緒に来てもらいたいの。もう夜も遅いし。また刺客に襲われても困るわ、魔物が出るかもしれない」

「……………」

ラディはちらりと馬車を見た。見ていたリラと視線が合う。どきりとしてリラは目を逸らした。ラディの視線から隠れてから、何故自分が隠れなくてはならないのかと気がついた。

視線を戻す。ラディはリラを見ていたわけではないようだった。

馬車を見ている。

正確には、馬車に刻まれた文様を。

「……………城までなら」

送ってもいい。彼はそう妥協した。

かくして美しい姫君の復讐は想像で終わったのだった。この礼儀知らずの少年を牢屋に入れてやるのはちよつといい気味だと思っただが、助けてくれたのもう文句は言わないことにする。なににより、疲れたので考え事をしたくない。

リラは馬車のなかでようやく緊張を解いた。どうしてこんなことになったのか。

とても疲れた。そう思う。

「姫様、少しお休みください。お疲れでしょう」

セリアがそう言ってくれたので、リラは頷いて目を閉じた。城に

着くまでに少し眠ろうと思った。

もう、安心だと思っていた。

「……あのさ、ちょっと聞きたいんだけど」

そのころ、馬車の外ではラデイが騎士に話しかけていた。

「なにかな？」

「今回のこれ……ヒメサマのおでかけて、お忍び？ 最初に見たとき警護が少なかったような気がするんだけどさ」

極秘で移動していたのか、と少年は訊いている。

「ああ、そうだよ。公おおやけの訪問ではない。まあ、ご婚約者のところへの単なる顔見せと、ご旅行をかねている程度のものだからね」

まさかこんなことになるとは思わなかったよと、生き残った騎士もゲンナリしている。こんなに激しく襲われるとは予想もしていなかったようだ。

「君がいてくれて良かったよ。本当に助かった」

この少年がいなければ、そう考えるとぞっとする。誰も助からなかったかもしれない。

「……別にたいしたことはしてないよ」

言っただラデイは馬車を振り返った。その中の姫は今も静かにしているらしい。さすがに疲れたと見える。温室育ちのお姫様だ、こんなにハードな一日を過ごしたことなどないだろう。

「謙遜しなくてもいい。本当に君のおかげだよ」

なおも何か言っている騎士の言葉に心半ばに感じながら、ラデイは周りをうかがっている。

今のところ、襲撃があるような気配はない。一回目の襲撃から二回目の襲撃までの間隔より、かなり間が空いている。三回目はないのだろうか。

彼はそれを警戒していた。ラデイが離れていた間は全く何もなかったらしい。

かなり時間がかかったから、最悪のことを考えて戻ってくる間ハラハラしていたのだが。

……あきらめたのか？

何が目的なのか、大体の予想はつく。

王位継承権、その証を持つ唯一の姫。

これで予想できないというほうがおかしい。刺客はどれも姫の命を狙っていた。彼女がいなくてもいいという狙い方だ。

これで本当にあきらめるだろうか。

一回目。ラディの存在は予想外だったろう。まさか子供に邪魔されるとは考えもしなかったはず。

二回目。一回目で生き残り、逃げた連中は近寄るのは危険だと思っただか。

弓矢での襲撃、それもラディに阻まれた。生き残り、逃げたものがあるのは気配で知っている。姫を護らなければならなかったために、追うことができなかったのが悔しい。

これで裏から糸を引いているものはラディの存在を知っただろう。黒幕に少年剣士の存在が知れたことは予想できる。

あれほど執拗に姫の命を狙う輩が、あきらめるだろうか。

だとすると、三回目は？

いや、な予想がラディの頭をよぎる。思いつきたくなかったが、気付いてしまった。

夜討ち。

「……………うあ」

小声で呻いてしまう。もはや辺りは暮れかけているのだ。刺客にとつて、絶好のタイミングだろう。考え付いてしまった以上、警戒しなくてはならない。

早く城に着いてくれと、少年剣士はそれだけを願う。面倒は嫌なのに、このままではもういっぺん面倒に巻き込まれる可能性が高い。城仕えの騎士たちがついてきているため、助けを呼びに行く前よりは多少はマシだろうが、危険であることは変わらない。

城にさえ着いてしまえば開放される。

いくらなんでも城は警戒が厳重で、刺客も入り込めないはずだ。

安全なそこにさえ着いてしまえば……！

ラデイは願う。

何も起こりませんように。

少年剣士は馬車をうかがい、わががま姫がこのままおとなしくしていることを願った。

何も起こるな、疲れたんだおれは。

それでも警戒はゆるめない。

なにが起こっても対処できるように。願わくば、その何かが起こらないように。

もー、いやだぞ、おもりは。

彼は心底からそう思っていた。

「君も疲れただろう。すまないな、まだ小さいのに」

騎士がそう言っただけでラデイをねぎらった。幼い子供に護られた自分を恥じてもいるようだ。

「や、いいけどさ……仕方ないし」
いろいろと。

騎士はラデイの含みのある言葉に気がつかない。

「まあ、婦女子が危機に陥っているのなら男なら助けるものだしな。少年、君も立派な男だな。どうだ、騎士にならんか？ 腕前は

文句がないくらいだし、君がその気なら推挙してあげよう」

ラデイは乾いた笑みを浮かべた。

「やめとくよ」

1・危機に、落ち・4（後書き）

疲れきっている姫様と、さらに疲れている子供（笑）

2・共に、逃れ・1

「おお！ リラ姫！！ ご無事で何より！！ このエオス、知らせを聞いたときは飛んで行こうと思いましたがぞ！！」

実際は飛んでこなかったリラの婚約者は、うんざりする彼女に気がついていないようだった。

「どれほど心配したことか……太陽より遙かに大切なわが姫君よ、月よりなお美しいわが花嫁よ、私がどれだけ心痛めたかご存知か」芝居がかったセリフである。自分に酔ってもいるのだ。酔えるだけの外見でもないのに、本人はそれに気がついていない。回りも気がつかないように接している。

ようはリラと変わらなくらいの世間知らずというわけだ。

もつとも、リラは近隣国一の美女。三拍子男はそれこそ彼女とつりあうような容姿ではないが。

「リラ姫、お怪我はございませんか？ ああ、もしあなたのお体に傷がつこうものなら、私はあなたを傷つけたものを地の彼方までも追いかけて止めを刺すだろう。奈落の魔物アビスすら恐れるような怒れる戦士と化すだろう」

いい加減にして欲しい。リラは正直にそう思った。セリフは立派だが、実際に行動を起こせるような人間ではないことをリラは知っている。

この王子、エオスは知識がなく武力もない。良いところを探せと言われれば、リラは少なくとも数刻は悩み 結局本人の力や才能とはあまり関係ない家柄という結論しか出てこないだろう。

これ以上付き合うのははっきり言って苦痛だった。二度も襲われたのはこの王子ではなく、リラなのだ。疲れているのも彼女である。それなのに王子は過剰な心配の言葉と、有り余る恋慕の思いを長々と口にする。止まる様子はない。

「ありがとうございます。お気持ち嬉しく思いますわ、エオス様」

につこりと微笑みかけ、その美しさにエオスがぼくとした瞬間に、

「ああ、そうでしたわ。わたくしを助けてくださった方がいらつしやいますのよ。わたくしつたらその方にまだるくにお礼も述べておりませんの。なにせあのようなことがあつたでしょう？ とても怖くてそれどころではありませんでしたのよ。わたくし、お礼を言わねばなりません」

なるべく口を挟めないように言つてのける。

「それでは、失礼させていただきますわね」

そそくさとラディをだしにして、ダメ王子から逃げた。

口実とはいえ、口に出した以上、形式的にせよ礼を言うべきだろうと少年剣士を探すと、彼はとうに閉まつた門のところできにやら騎士たちに止められていた。

時刻はもうすでに夜の帳とばしが下りていて、辺りは月が静かに照らしている。危険だと止めている騎士たちに対して、ラディは無理にでも出発するつもりでいるようだ。

城に滞在するつもりは微塵もないらしい。

「一日の滞在くらい許すわ。夜は危ないでしょう」

何せ彼はまだ十歳。夜歩きをさせて安心という年齢では到底ない。彼がいくら強くても夜は危険だ。リラとてそのくらいの分別はある。

子供は護るべきものだ。昼間は逆に護られてしまったが。

「お心遣いありがとうございますですが結構」

その子供はにべもなく断つた。言葉遣いは一見丁寧だが、取り付くしまも無い。

ここに着いたときに騎士たちが、礼をしたいといくばくかの金貨を渡そうとしたのもラディは受け取らなかつた。その上、これだ。

かちいんときたリラである。一体この少年は何が気に食わなくてこれほどリラを拒むのか。

リラは他人にこんな態度を取られたことがない。これほど彼女の存在を意に介さない人間など今までいなかつた。

聖王国ファージの姫であり、美しい彼女を誰もが敬い、褒め称えるのに。

こんな態度を取った人物を初めてみたゆえに、余計に腹が立ち嫌がらせしたくなった。

「あらご遠慮なさらずに、小さな剣士様。命の恩人ですもの。丁重におもてなしして差し上げますわ」

ことさら強調してそういつてやった。これを断るのは相応の理由が必要だろう。

ちよつと用事を思い出して、ぐらゐの理由では退出は許さない。

案の定、ラディは絶句したようだった。彼にはこの姫が何故ここまで自分に執着するのかが分からない。

リラは多量の腹いせと、多少の好奇心をラディに対して持っているのだが、そんなことまでラディには分からない。

わずかな時間考えた。どうやってこのお誘いを、つつがなく、角も立たせずに断るか。

やがて彼は愛想笑いを浮かべて、こう言った、

「いえいえ、『命の恩人』とはおこがましく存じます。すぐに出発いたしますので皆様のお手をわずらわせることもありません。暖かいお気持ち『だけ』！ ありがとうとくうけとらせていただきます」
意識してわざとらしいまでに丁寧に言ってる。

これ以上ここに長居したくないんだよと言ってやりたかったが、そうするとまたいろいろ言われることになるのが分かるのでやらない。

とにかくもう、ここから去りたい。城に着いたのだ。充分役目は果たしたと思う。

いくらなんでも城内で刺客に襲われる可能性は低いだろうし、警備の人間もたくさんいる。

ラディが残る理由は無い。あるとすれば……子供の夜歩きを心配する大人の常識くらいだろう。

それも別に無くていい。ラディにはストームと言う相棒がついて

いる。

「そこの大人よりずっと頼れる相棒がいるのだ。

」では」

リラが反論を考えている隙に、ラディは去ろうとしたが、門を開けてくれと門番に言った瞬間、阻まれた。

「おお、そなたがわが最愛の姫を助けた勇氣ある童か。わい私からも礼を言うぞ。何せリラ姫は近隣の美女、ましてファージ国の姫君であり、私の大切な花嫁となられる方だからな」

リラの婚約者、エオスがリラを追ってやってきたのだ。

「それにしても本当に幼いな、それでいてものすごい腕前だと聞いたが、まあ私にはかなうまい。何せ子供だからな、私の剣の腕となかなかなのだぞ、夜が明けたら一度手合わせしてみるか。リラ姫に私の腕前をお見せするいい機会だ」

うんうんと一人勝手に頷いている。腕前がどの言っているが、どう考えてもこの王子がラディより強いということはないとリラは知っている。

リラは冷たい目線で王子を見、ラディは反応に困っている。一目で弱いと分かるこの王子と手合わせするつもりなど少年には毛頭ない。それ以前に、今まさに立ち去ろうとしていたところだということに。

「この剣を見よ、これはかの名匠レイギオンのものを真似て作らせた名剣だ。美しい輝きであろう。剣を持つものなら誰もが欲しいと思う名品だぞ。ふふふ、そうか、うらやましいか？」

腰の剣を指して、王子はラディにそう自慢した。剣の柄と鞘は寶石がごてごてついていて、かえって邪魔そうである。どう見ても実用よりは装飾品だ。

外側だけ見てもラディには欲しいとは思えない。刀身を見たわけではないからなんとも言えないが……おそらく中もたいした品ではないだろう。

多分、いいように言いくるめられて造ったものだろうという想像

はつく。この王子を騙すことほど簡単なことはないのではなからうか。

「リラ姫を護った褒美にこれと同じものとはいかぬが剣でも宝石でも持っていくがよい。なあと私は狭量きょうりょうではないのでな、小さなことは言わぬぞ。感謝するが良い。私は度量の大きい男だ」

自分で言うか……リラもラディもそう思った。

それにしてもよく口の回る男である。喋る内容がまた薄いの聞いていてさらに苦痛だ。周りにいたものはうんざりしている。

ラディなど早く立ち去りたくてあからさまに表情がゲンナリしているというのに、王子は全く気がつかない。ただひたすら喋り続ける。

自分の自慢と、リラの美しさと、自分がどれだけリラを愛しているか、彼女を大切に思っているか、どれだけ必要としているか、などなど。

……拷問かな、これ？ おれ、こんな拷問受けるくらいのことしたのかな……ラディは遠い目をして先ほどまで元気よく彼に噛み付いてきたお姫様を見る。

リラも似たような目をしていて。彼女が指示してやらせている嫌がらせではないらしい。

むしろ彼女もラディと同じような心境に陥っているのではなからうか。

周りに視線を走らせてみる。

騎士たちは死んだ魚のような目をしていた。

ああ、たいへんなんだなあ、このひとたちも。ラディはぼんやりそう思う。

王子はまだ何かいろいろ喋っている。すでに内容は耳に入っていないというか、聞きたくないので遮断しているというか。

「……ということだな、童よ、寛大な私は滞在を許すぞ。喜ぶがい

い

あれ。何か今言われたような。

「だれぞこの童を寢室へ案内してやるといい。よかつたな、童よ。そなたが見たこともないような豪華じゅうしゃな寢室を使わせてやるぞ」

えーと。なんか言ってる。

「なにをしておる？ 馬から下りぬか。おい、この馬を厩舎へ入れてやれ。うむうむ、安心しろ童、食事も最高のものを用意させるのでな。腹いっぱいにもものを食したことなどないであろう？ 存分に食べるがよい」

ラデイはぼんやりと思った。

なんかおれ、ここに泊まることになってる？

ぐいぐいと王子に引つ張られ、聞き流すのにも疲れてしまっているラデイはストームから引きずりおろされた。

「いや、えと、あの」

「遠慮は要らぬぞ、たつぷり休むがよい」

ラデイが発発する機会とその気力は失われてしまったようだ。

三拍子男の舌、おそるべし。

ラデイが思考を取り戻したのは、豪華な寢室に入っただけでしばらく経ってからだった。

……夜逃げしたるか。

思考を取り戻すなりまずそう考えた。食事の味も覚えていない。

まともな思考状態で味わったのならさぞ美味だったのだろうが、

あの王子と同席で楽しい食事などありえない。

えんえんと自慢話と一方的なノロケを聞かされて、食事ははつきり言っただけだった。

同席していたリラも嫌そうな顔をしていたから、どうやら婚約者といつても仲は良くないらしい。王子のほうが一方向的にリラに惚れているのは嫌でも分かった。あの長話を聞かされては理解するしか

ないからだ。

地位のある女性にありがちな政略結婚というやつなのだろう。

「ちよつと気の毒だなあ……」

性格はともかく綺麗なお姫様だとは思うので、同情は覚えた。好きでもない相手と結婚させられるなんて、自分ならとても嫌だと思う。

リラは我慢しているようだ。わがままなお姫様でも、できないことがあるのだろう。

あきらめていることがあるのだろう。

「まあ、おれには関係ないけど」

今晚ゆっくりと眠って、明日の朝になったらここを発つ。それでもう関係はなくなる。

あの姫も、明日になったらもう無理にラディを引き止めたりしないだろう。ストームも今夜はゆっくり休める。ラディと離れ、馬小屋に入れられているのは不本意だろうが。

室内を見回す。一言で言えば豪華な寝室だ。飾りすぎて目に辛い印象がある。昼間ならなおさら目につるさいだろう。

こんな部屋で休んで疲れが取れるのかと疑問に思ってしまうくらいだ。ごろんとベッドに仰向けに転がった。ふかふかで、お日さまの匂いがする。ちゃんと干してある匂いだ。

それは気持ちがいいのだが、ベッドがちよつとラディには柔らかすぎる。

体が沈み込むようなベッドで眠ったことなどない。

「ま、いいか。寝よ」

さすがに疲れている。体力的にはともかく、精神的に疲れた。意に沿わぬことばかりの一日だったし、なによりもあの王子の話に疲れた。

アレをもう一度聞かされるのなら今すぐに出て行く。

……明日は朝一番に出て行こう。あの王子が起きてくる前に、ぜったい出発する。ラディはそう心に決めて、寝支度を始めた。

剣を枕の脇に置き、バンドナを外して上着を脱ぎ、靴も脱ぐ。ベッドの脇のサイドテーブルにまとめて置いた。剣だけはそばから離さない。

それで寝支度は終了。

ラディは目を閉じて、快い眠りの波が押し寄せてくるのを待った。

2・共に、逃れ・1（後書き）

婚約者登場。チビッコ剣士、為すすべなくお泊り決定。

2・共に、逃れ・2

本当の災難はこれから襲いかかるうとしていたのである。
爆音が、響いた。

「なに？ 何が起きたの！？」

寝着に着替え、侍女たちを下がらせようとしていたリラはあわててそう叫んだ。今の音はなんだろう。どこかが爆発を起こしたような音。だが、今は夜で、ここは城だ。

それなのに爆発するような危険なものを置いてあるのだろうか。ここは自分の城ではないので分からない。エオス王子に火薬で何かするような趣味があれば珍しくも無いことなのだろうが、どうやらそうではないらしい。

階下からざわめきが聞こえてきたからだ。事情を尋ねに侍女の一人が廊下に飛び出していった。

窓の外から切れ切れに声が聞こえてくる。

「……から火が……」

「……爆発……いきなり……」

そんな声。リラはバルコニーに出て眼下に叫んだ。

「何が起きているの！？」

「ああ姫様！ ご心配には及びませぬ、すぐに収まりますゆえ」

年老いた騎士がそう答えて走り去った。

心配するなといわれてもしないわけにはいかない。安心も吹き飛んだ。今日これまでに二回も襲われているのだ。城の中ならと安心していたが、もし刺客がこの城の中に潜り込んでいたら、通じているものだとしたら。

お忍びで移動していたのに、待ち伏せされていたのもそのせいかもしれない。内通者がいたのなら説明できることだからだ。

ありとあらゆる可能性がリラの頭の中を駆け巡った。

その中には『命の恩人』の姿もあった。まさかという思いもあるが、怪しいことは怪しい。

年端も行かない少年だが、剣の腕は騎士を遙かにしのぎ、年齢不相応に聡い。

今までの行動は全て芝居で、もしやラディが刺客を率いていたのではないか？

馬鹿らしいとは思いながらも一旦考え付いてしまつと疑惑は膨らんだ。

いきなり現れ危機を救い、実は刺客の首領だった 伝承歌サーガや物

語でよくある展開だ。

ただ、刺客の首領が十歳の少年だったというのは聞いたことがない。

そこまで考えてから、リラは我に返った。我ながらあほらしい事を考えていると。

考えを改めた。真実がどうであれ、今は目前の出来事に神経を使うべきだ。

そうかと言って今のリラにできることなどない。彼女は護る者ではなく、護られる立場の者なのだ。下手に動くとかえってほかの迷惑になりかねない。

それは今日の襲撃で学んだことだ。じっと待っているほうがいい。リラは箱入りの世間知らずな姫君にしか過ぎないのだから。

たとえ危険が人の形を以って近付こうとしても。

爆音でラディは目が覚めた。

そして著しく機嫌いきどおを損ねた。

眠りの波にさらわれる直前、うつうつとして一番気持がいいときに起こされたのだ。

一体なんなんだ。

ガリガリと頭をかいてラディは起き上がった。分厚いドアの向こうから走り回る足音と困惑した声が聞こえてくる。

ただ事ではない。それが分かったがラディはしばらく行動を起さなかつた。

今、外に出ても混乱に巻き込まれるだけだろうし、出て行って誤解されるようなことになつても嫌だ。

とりあえず、外していたバンダナをまた額に巻いて、上着を着、靴を履いて置いておいた剣を背負つた。いつでも何が起きてても敏速に動けるようにはしておく。荷物の類はストームに背負させたままなので、ラディが持つものは剣だけだ。

ばたばた。ドアの外からはまた誰かが走り回る音。

爆音といい、なにかまずいことが起こっているのは間違いない。

なんだかもう、とんだ一日としかいえない。ため息をつきたい心境だ。

今日は全く災難だらけである。どう考えても人災だが。

やはり貴族、王族に関わるとろくな事が無いと、ラディは学習した。

それでも、見捨てるわけにはいかなかつたのだ。

フージ国の王家の者を。

「……おれってなんて親孝行……」

人知れず少年剣士がそう呟いたとき、再び爆音が城を揺るがした。今度は位置が近い。ラディはほぼ真横辺りかと思当をつける。そして、その爆音にまぎれて叫び声があったのも聞いた。

ドアに駆け寄り、ぴったりと張り付くようにして、わずかに隙間を開ける。

二度三度と銀光が奔るのが見える。その光はまぎれもなく鋭い刃の放つもので、その場でなにが起こっているのか容易に想像できた。城の中にも刺客がいるのだ。

先に紛れ込んでいたのか？ それとも今侵入したのか。

そのどちらかはさすがに分からないが、確実に今、命を奪うこと

を生業なりわいとする者たちが城内に存在している。

ほんつとくに最悪な一日だ……。

しみじみとそう思いつつ、ラディはドアをはね開け、走った。走りながら愛剣を引き抜いている。

廊下にいた黒ずくめの男と一度だけ切り結んだ。一応城の者ではないと視認して、次の一撃で切り倒す。その後ろにいたもう一人がかかってきたが一刀で斬り捨てた。

侮れぬと見て本気でかかってきた三人目も同様に斬って捨てた。

悠長に相手をしているヒマなどないのだ。

間違いない刺客は姫に向かっていているはずだった。

助けに行かねばならない。世間知らずで身を守る術さえ知らないようなりラである。

騎士たちも爆発騒ぎに右往左往している。これが陽動と気がついている者がいるかどうか。刺客がいることすら気がついていないかもしれない。

気がつかぬまま、斬り殺されていく。

騎士ってこんなに弱いもんなのかと走りながらラディは考えたが、すぐに訂正した。

刺客が手練れなのだろう、平和な城仕えに慣れた騎士たちでは相手にもならないほどに。

四人目、五人目の刺客を斬り捨てたときに、更なる衝撃がラディを襲った。

……考えてみたら、姫のいる部屋がわからん……！

六人目と刃を合わせつつ、かなり間抜けだと自分にあきれた。

斬り捨てて考える。姫がいそうな場所。

……見当もつかない。何せ今まで城に入ったことなどないのである。どの辺りに何があつてどうなっているのか、広い城の間取りなどサッパリ分からない。

見当をつけるといというのが無理な話だ。

心底困っていると七人目が襲い掛かってきた。考えに集中できな

い。

意に介さずに斬り捨てた。ラディの実力からすればたいした相手ではないのだが、キリがない。一体何人の刺客が城内に侵入しているのか。

背後から切りかかってきた八人目を振り向く動作で斬った。血の匂いがむせ返るようだ。

できればあまり殺したくはないので急所は外し、戦闘力は奪っている。

早く発見されれば助かるだろうが、見つかる前に自害するかもしれない。

縛り上げて猿轡をするのが一番いいのに縛るヒマもないのでそのまま無視して進む。

「くう！」

うめき声に気がついて走ると見覚えのある姿が見えた。たしか姫の警護にしていた女性、セリアといったか。傷ついた腕をかばいながら刺客の剣を受け止めている。

今にも押し負けそうだ。

「はいそこまでっ」

叫んで刺客をばっさり斬った。

「あ、ありがとう……」

彼女は息を切らしている。ケガ人の身で必死に戦ったのだろう。間に合って運が良かった。

「ちようどいい、ヒメサマは！？」

「私もこれから行くところなの。一緒に来てくれる？」

気丈にもセリアはそう言ったが、ラディは首を振った。

「いくのはいいいけど、おねーさんは休んだほうがいいよ。また血が出てる。ヒメサマのところにはおれがいくからどこかに隠れてる」

言いながら少年は背後から切りかかってこようとした刺客を、振り返りもせずに剣を背後に突き出して斬り倒した。

背後からの物音と気配だけで刺客との距離を測り、正確に撃退し

て見せた。

一体この少年はどれだけ強いのか、セリアには判断もつかない。自分では到底かなわないというのだけは何とか理解できる。

こんなに小さいのに。

「そんでヒメサマは？」

「あ、ええ、この上にいらっしやるはずよ。緑のカーペットが敷いてある廊下を進めば、警護の騎士が二人、扉の前に立っているはずだから分かると思う」

「わかった。ありがとう」

言って駆け出そうとして、少年は振り返った。

「？」

どうしたのだろうと思うセリアに、

「ちゃんと傷の手当して、その辺の部屋に隠れてるよ。おねーさんが死んだらあのヒメサマきつと泣くぞ」

まじめな顔でそう言って、気が済んだのか走っていった。

思わずぼかんと見送って、セリアは苦笑する。

全く……これではどちらが大人か分からない。

爆音が徐々に近付いてきているのをリラは知った。間違いなく自分を狙っているだろうことも、容易に想像がついた。

「逃げたほうがよろしいのでは……」

侍女の一人が進言してきたが、リラは頷かない。

「どこへ逃げるといふの。どこが安全なのかも分からないのに」

部屋の外ではなにが起こっているのかわからない。扉の外で不寝番をする予定だった騎士二人は、突然の騒ぎにうるたえてはいたものの、その場を離れなかった。

この部屋の中には美しい姫がいらっしやる。姫を護らねばならない。

美しい姫を護ることは最高の荣誉だったから、苦とも思わなかつ

た。

苦痛を感じる前に、彼らの時間は終わりを告げた。人影を視認した瞬間に、彼らの命は終わったのである。

どん。

何かが扉にぶつかる音がした。

それが姫を護る騎士たちの亡骸がぶつかった音だと室内の者が知ったのは、扉が勢いよく開かれてからである。

内開きの扉が開かれると同時に室内に倒れこんできた首を裂かれた体に、侍女たちが悲鳴を上げる。

リラは青ざめた顔を侵入者に向けた。

騎士たちの死体を乗り越え、姫の部屋に侵入を果たした無礼者。

見覚えがあった。

「グローネス卿……！」

公爵位を持つ貴族だ。貧相な口ひげを生やし、体は太っているくせに顔だけが細長い。腹が突き出た鼠を連想させるような男だ。

「リラ様にはご機嫌麗しゅう……！」

にんまりといやらしく笑いながら、わざとらしい礼儀を取る。その背後には血にまみれた剣を持つ男たちがいた。

好色に笑うこの公爵が、刺客たちの黒幕だったのだと、この場にいる誰もが知った。

「反逆は死刑の大罪ですわよ。グローネス卿！」

気丈にリラはそう言って見せた。弱みなどこの男には見せたくない。

彼女は誇り高きファージの王女なのだから。

グローネスは笑った。彼女の虚勢を分かっているかのように。

「反逆とは心外ですな。私はファージのためを思っていてやることなのですよ。美しく気高い姫にあのような馬鹿王子を婿とするなど言語道断。それこそこの国を見守る竜聖母ドラゴンセイザーに失礼というもの」

神 『竜聖母』などかけらも信じていないと言う口調でまだ述べる。

「ですから私がこの国を治めようと思ひ、このような行動をとつたのです。忠義といわれるなら本望。されど反逆とは心外でございますな」

わざとらしいまでのいいわけだ。一度目の刺客も二度目の刺客も、リラを殺そうとしていた。少年剣士の活躍によって阻まれたが、それがなければリラは殺されていただろう。

これを反逆以外のなんと言えばよいのか。

グローネスはいやらしい笑みを浮かべたまま、リラに向かって手を差し伸べた。

「さあ姫。御印をお渡しください。あれはこの国の王をしめすもの。私としても美しい姫君に手荒な真似はしたくありません。渡してくださいれば貴女には幸福を差し上げよう。私との婚姻による幸せを」
グローネスが求めているのは『御印』が示す王への権威だけではない。ねっとりとした視線が嫌でもリラに理解を強いた。

ファージの王位と共に、近隣国一の美女を欲しているのだと。

リラは冷水を背に浴びせかけられたような気分になった。

冗談じゃない。ダメ三拍子男とも嫌なのに、スケベ中年との結婚なんて絶望的に嫌だ。

心の底からそう思う。父王と同じくらいの年齢のグローネスだが、好色で名高い。

世間知らずのリラでさえ知っていることだった。合法的にも非合法的にも、あらゆる手を使って美女を集めている、と。

王宮で催し物があるたびに、グローネスにだけは近寄らないようにとリラはあちこちからきつく注意されたものだ。

そんな男と結婚するくらいなら、無能でも無知でもぶさいくでもリラにぞっこんのダメ王子のほうがまだマシに思える。顔の造作では大して変わらなくても。

眉をしかめて嫌悪を表すリラに、グローネスは真顔になり、次いで残酷な笑みを浮かべて言った。

「勘違いをなさっては困りますな、リラ姫。選択権は貴女にはない

のだ
」

その声は勝利感で一杯だった。反逆は完全に成功した。リラ姫さえ手中に収めてしまえば、後はどうとでもなる。グローネスはそう思っていたのである。

2・共に、逃れ・2（後書き）

ピンチ再来と黒幕登場。

2・共に、逃れ・3

だが、その勝利感も短いもので終わった。彼は姫を救った少年剣士のことを完全に無視していたのだ。

名も知れぬ剣士など、城には入れてはもらえまい。まさかりラが変な意地を張り、王子エオスがその剣士を招き入れるなどは考えてもいなかった。

所詮、庶民。そうとしか考えていなかったのである。

刺客を次々と斬り捨て、ラデイがこの階に到着したときグローネスの短い成功は終わりを告げた。

「はあああっ！」

音もなく距離を詰めた少年の裂帛れっぼくの気合と共に、グローネスの背後にいた刺客の首が飛んだ。

「!?!」

グローネスが振り返ったときには、もう一人が切り倒されている。公爵はうるたえ、リラは希望を見出した。ラデイがグローネスを倒してくれたら、とりあえずの危機は去る。

小さな剣士の勝利を今は心から祈った。この剣士が負けてしまえば、リラの未来は真つ暗だ。絶望しかない。

だが、心配する必要はなかった。

この子、本当に……強いわ。

刺客と切り結ぶラデイを見て、リラはしみじみそう思った。

グローネスは十人近くの刺客を連れていた。そのほとんどが一太刀で切り捨てられている。

子供の姿を見て動揺した一瞬の間、その一瞬で少年剣士には充分すぎるのだろう。状況に気がつき、あわてて剣を向けた者も、向けたその瞬間に斬られている。

あつという目にグローネスだけが残された。

勝った。リラは安堵する。これでこの男の花嫁になるという最悪

の未来は回避された。

「……おまえが黒幕みたいだな」

ラデイが剣を突きつける。グローネスの顔は赤から青に変化しつつある。

勝利の紅潮から敗北の蒼白へ。そしてこんな子供にしてやられたというショック。高すぎるプライドをこれでもかといわんばかりに傷つけられたようだ。

ラデイの背丈はグローネスの肩までもない。年頃もグローネスの成人している息子たちよりずっと幼い少年だ。

それほど幼い少年だというのに、恐ろしいほど強い。ありえないくらいに。

声も出せずにグローネスはラデイを睨みつける。少年は意にも介さない。涼しい顔で受け流している。

グローネスから視線は外さず、リラに問いかけた。

「どーする？ 親玉だろ、このおっさん。今斬ったらいろいろマズいよな？」

殺さないまでもどこか斬って戦闘力を奪うべきだろうか、ラデイは迷っていた。

見た感じ、このオジサンはたいして強くない。オジサンの後ろにいた連中のほうがまだ強かっただろうが、そいつらは床に倒れて呻いている。

数人はもう息をしていない。首を飛ばしたのはちよつとやりすぎたかとラデイも反省している。ここにつくまでに何人も殺されているのを見て、腹が立っていたのだ。

武器を持ってもしないようなおばさんまで殺されていた。おそろくは無抵抗に殺さないでと命乞いしただろう相手まで、無残に殺されていたのを見て、いい気分などしない。

まだまだ未熟だなあ、おれも。

たった十歳の子供はそう思いながら、グローネスを見ている。

呪い殺してやるといわんばかりに睨みつけられているが、全然怖

くない。

「ヒメサマ、どーする？ 斬ってほしいならザックリやるけど」

興味なさげに言ってる。反乱の大罪人ならちゃんと捕まえて、これからややこしい取調べとかいろいろあるのだろう。そのくらの予想はできるが、具体的にどうなるのかは知らないし興味がない。この騒動が終わって、夜が明けたらラディは何が何でもここを出て行くつもりでいた。

「……そうねえ……」

リラは少々考えた。

ラディの剣技を見てグローネスはすっかり怯えきっている。自身も帯剣しているが、使う気もなかったのか、連れていた刺客をよほど頼りにしていたのか、その剣は抜かれもしていない。

それでも武器を持たせているのはまずいかもしれない。

いつ逆上して暴れだすか分からないからだ。子供のラディにやられたということにかなりショックを受けているようだし、無理もない。

リラとて最初にラディを見たとき、自分の目を疑ったのだから。

今はもう慣れたが……そう言えば、ラディの言葉遣いがかかなり無礼なものに戻っていた。

さすがに三回も助けられると、すぐに文句も言えない。そういう状況でもないので、文句は後にして考える。

爆発騒ぎが収まれば、誰かがこちらに来るだろう。騎士たちが来たときにすぐ引き渡せるようにグローネスは縛り付けるなり何なりしておいたほうがいい。

「何かない？ 縛るようなもの。拘束しておいたほうがいいと思うわ。反逆の大罪人なのだから」

侍女にそう促す。姫の寝室内にそれらしいものはないので、二人ほどが隣の部屋に探しに行った。

それを見送って、リラは息をつく。視界内にはグローネスがいるが、ラディもいるので安心できた。

「……下はひどいの？」

少年剣士にそう聞いてみる。階下はまだ騒がしい。かなりおおごとになってきているようだ。上階におわす姫君に心配をかけないように、皆駆け回っているのだろう。

「けっこうひどいよ。ここに来るまでに何人も斬られてたし」

ラディの答えにリラは眉を寄せた。

「……セリアはどうしたのかしら」

護衛の女性騎士が心配になった。真っ先に顔を見せてもおかしくないのに彼女はやってこない。怪我をしていたのでなおさら心配だ。「あ、大丈夫。おねーさんなら途中で会った。ケガ人だから無理しないで隠れてるって言ってここに来たんだ」

「無事なのね？」

「うん」

ホツとした。今日一日でどれだけの人が死んだのだろうと思うとイヤになる。リラのせいではないのだろうけれど、彼女を護って死んだのだ。

せめてこれ以上、誰も死なないように。

……そう思う。

ちらりとラディを見た。小さな少年。人を護ることも害することも知っている子供。

リラよりずっと小さいのに。

何の力もない彼女よりずっと強い子供。小さな手に握られている剣は大人の血で濡れている。

こんな子供に護られて、自分は何をしているのだろう。護られているだけ？

待っているだけ？

「……情けない」

呟きが洩れた。

ラディがちらりとこっちを見る。

「おねーさんは来ようとしてたぞ。おれが止めたんだから、しかる

なよ」

「どうやらセリアのことを言っていると感じたらしい。

「ちがうわよ、セリアのことじゃないの。しかったりしないわ」

情けないのは自分だが、ラディには言いたくなかった。

彼はちよつと首をかしげたが、すぐグローネスが暴れださないように視線を戻す。

そうしているうちに侍女たちが隣の部屋からシーツを持ってきた。縄や鎖など、牢でもない普通の部屋には置いていないので、これで充分だろう。

「残念ですわ、グローネス卿。公爵ともあろう方がこんなことをなさるなんて。あなたにはさぞ不本意でしょうが拘束させていただきましたわよ」

リラに告げられ、グローネスは齒軋りした。

上手くいっていたのだ。この上もなく上手くいっていたのに、一人の少年のせいで崩れた。

たった一人の、こんな子供のせいで！

憎悪の炎を瞳に宿し、グローネスは自分に剣を突きつけている少年を睨みつける。

憎々しいことに子供は涼しげな顔をしている。いくら睨みつけても脅えもしないし怯みもしない。

斬って捨ててやるうかとグローネスは思ったが、少年の腕前は先ほど目にしたばかりだ。

瞬く間に手だれと思っていた連中が倒れ付していくあの恐怖。

しかもそれを為したのは十になったかならないかに見えるこの子供。

グローネスがかなう相手ではない。

もしも腰の剣に手をかけようものならその瞬間にこの少年に斬られるのではないか？そんな恐怖が囁くためにグローネスは動けない。脅える公爵に剣を突きつけている小さな剣士にそのつもりは全くなかった。オジサンが剣に手を伸ばしたら蹴飛ばしてやるうとは考

えていたが、斬り殺すつもりはない。

あれだけの人を巻き込み、死なせたのだ。きっちり裁いて償ってもらおう。

侍女たちが公爵を縛ろうと近づくのにあわせて、ラディは少し公爵から離れた。

「オジサン、逃げるなよ？ このくらいの距離なら、おれ一飛びで詰めて斬ることができるからな」

離れたからといって釘を刺すのも忘れない。

「まず先に、剣をお渡しください。グローネス卿」

侍女が言くと、ぎりぎり歯を食いしばりながらグローネスは腰の剣に手をかけた。

引き抜いて侍女を人質に取るべきか。

「オジサン？ 柄握ったらはたくぞ」

察したラディがあきれたように再び釘を刺す。完全に行動を先読みされている。抵抗は許されないと悟り、グローネスは剣を外そうとした。

よし、あきらめたかとラディは内心で息をつき 気配と殺気を感じ取った。

グローネスではない。

どこから、と考える前に体は動いていた。跳躍して公爵から距離を取る。

まさにその一瞬後、グローネスの周囲に円を描くように光が湧いた。

「!？」

ちょうどグローネスの周りで彼を拘束しようとしていた侍女たちがその光にまともに巻き込まれた。彼女たちは当惑の表情を浮かべ、そのまま溶けてゆく。

氷菓子が溶けてゆくようにとろとろと溶けていく。自分たちの身に何が起きているのか理解もできずに床にわだかまる赤い液体になった。

「な、なんなの……これ!？」

リラは目の前の光景にすくんでしまった。グローネス本人も驚愕して固まっている。彼が為したことはないのは明らかだ。

想像もつかないような現象が起こったその場で、とっさに動けたのはラディだけだった。少年剣士はためらわずリラのもとまで駆け寄り、グローネスと扉が一度に視界に収まる位置に移る。

彼にも何が起きたのか分かったわけではないが、とにかくグローネス以外の何か、あるいは誰かがこの現象を起こしたに違いない。その『何か』が廊下を近付いてきているのは気配で分かった。

「……童とは思えぬ行動力よの」
しわがれた声がした。その声を聞いたグローネスが安堵して体から力を抜く。

倒れている人間たちを踏み越えて現れたのは、真っ黒いローブを着た老人だった。グローネスの様子から、配下か仲間なのは理解できる。

「タタラか。遅かったではないか」
うって変わってグローネスの声は明るくなっている。

「愚かな騎士どもを誘導するのに少々時間がかかりましてな、いやはやあやつらの鈍いこと鈍いこと。そもそも火薬と魔道の区別もつかぬとは愚かにも程がある」

ほっほっほつと笑ってから、老人、タタラは姫と少年剣士を見た。
「姫を置いて去れば、命だけは助かるうぞ」

悪意に満ちたような声に、リラは背に氷片が滑り落ちて行くような感覚を覚えた。

グローネスのときに感じた寒気など物の数にも入らないような気がする。

おぞましい。

知らず知らずの内にすがるようにラディの服を掴んでいた。姫君のか細い手は、恐怖と怯えで可哀想なくらいに震えている。ラディにも姫の脅えが伝わってきた。

あの気丈な姫が声も出せないくらいに脅えている。

「ははは！ 形勢逆転だな！ このタタラは魔道の使い手！ いか
に凄腕の剣士だろうと勝つことなどできぬ！！」

すでに勝ち誇ってグローネスは笑っている。タタラも薄笑いを浮かべていた。

ラディは剣を構えたまま、急ぎ思考をめぐらせる。

タタラという老人はすぐにこちらをどうこうするつもりはないよ
うだ。あざ笑いながらこちらの行動を見守っている。どう行動され
てもやり過ぎず絶対的な自信があるのだろう。

たしかに、魔道を操るものならばそれだけの自信があってもおか
しくない。魔道というのは困難で厄介なシロモノで、扱う人物は貴
重で希少な存在だ。

よりにもよってそんな存在が反乱に協力している。厄介この上な
い。

背中にいるお姫様は震えている。目前で溶かされた侍女を見て、
立っているだけ上出来だろう。

「さて、どうするかね？ 小さな剣士どの？ いまだに姫を護ろう
とする姿勢は立派だが」

ラディは剣を下ろさない。考えていた。

タタラという老人に勝てるか？

彼の背中で震えるリラを護りながら、グローネスとタタラを一手
に相手をし、果たして勝てるか？

否。

少なくとも今のままでは、いくらラディでも無理だ。

どちらか片方だけなら何とかなる。

けれど剣士と魔道の使い手を同時に相手にするのは死に向かって
走っているのと同じことだ。

ラディには自殺行為を取るつもりはない。かといってリラを見捨
てる気も、ない。

では、取るべき手はひとつだ。

2・共に、逃れ・3（後書き）

ちびっこ剣士、何か考えているようです。

2・共に、逃れ・4

それと分からぬように重心を移動させ、ラディは素早く行動を起
こした。

腕を伸ばし、姫のベッドのシーツを勢いよく引つpegし、グロー
ネスとタタラに投げつける。

ふわりと広がる布に反逆者たちが視界をふさがれているうちに、
呆然としている姫の手をとりバルコニーに走り出た。同時に指笛を
吹き鳴らす。これを合図にストームが来るはずだ。

「ど、どうするの?」

リラの問いに、返答はひとこと。

「飛び降りる!」

明快な返事にリラは目を丸くした。ここは三階である。

「正気なの!??」

「あいにくとね」

平然と少年は答え姫の手を引いた。

「行くぞ!」

「うそ、ちよつと待つ……………」

ラディは待つてくれなかった。子供とは思えない力でリラを引き
寄せ、迷わず跳ぶ。

「いやあああっ!??」

リラは叫ぶしかない。構わずラディは空中で彼女を抱きかかえる
ように体勢を整えた。

ザザザッ!

耳障りな音がごく近くでして、それが止むとすぐさま衝撃がきた。
……………さほど痛みは感じない。

リラが恐る恐る目を開けると、彼女の体の下でラディがぶすつた
れた声を出した。

「……………どいてくれねーかな、ヒメサマ」

「つきやあ!？」

どう見ても完璧にラデイをお尻の下に敷いている。あわてて飛びのくりラである。

「ケガしてないか？」

立ち上がりながらラデイに聞かれ、反射的にコクコクと頷く。実際にほとんど痛みはなかった。

あの高さから落ちてどうして無事だったのか。

不思議に思い、きよろきよろと周りを見渡して判断がついた。

周りには生い茂る木と、その下にはさつき二人が落ちた植木が生えている。この上に跳んだのだ。

まず上の木で勢いを殺し、さらに下の植木をクッションにしたのだらう。

おまけにラデイが下になったため、リラに怪我は全くない。

「あ、あなたは大丈夫なの？」

リラの下になったのに。

「え、ああ。たいしたことないよ」

ラデイは手を回して自分の背中を軽く叩いていた。やはり下になったので多少のダメージを受けたらしい。

「だ、大丈夫？」

「平気」

短く答えながら彼は周りを見渡す。

「ストーム!」

呼ぶ声に、すぐに相棒が姿を現す。厩舎に入れられていたはずだが、合図の指笛を聞いて強引に出てきたらしい。

ラデイの目がないところでは、ほかの人間に触ることも許さなかつたらしく、背には荷物が積まれたままだ。馬装もそのままで、鞍や手綱がつけっぱなしである。

「さて、どうするか」

ストームの背に乗ってこの場から離れるのはいいが、どこに行くか。

城内に安全な場所はあるのだろうか。

そう考えた瞬間に頭上から怒声が降ってきた。

「姫を捕らえる！ 小僧は殺して構わん！！」

グローネスの声だ。それに応えてそこかしこから気配が近寄ってくる。

「あー……」

どこに逃げてもダメっぽい。ラディは肩を落とす。

どうやらこの城は完全に反乱側に制圧されたようだ。

姫と少年剣士の視界内にも、騎士の死体が転がっている。

「……！！」

リラは息を呑んだ。

彼女に心配ないと叫んだ老騎士だった。すぐに収まると姫を元氣付けた騎士は、物言わぬ体で横たわっている。

「こつち」

声を詰まらせて遺体を見つめる姫の手を引いて、ラディはとりあえず木陰に隠れる。

「ヒメサマ、乗れ」

ストームに乗れと指示する。

「わ、わたし……馬なんて乗ったことない」

首を振って怖がる彼女に、

「おれが手綱引くから大丈夫だ！ 乗れ！ 早く！！」

言いながら茂みを割って襲い掛かってきた刺客を斬る。包囲されようとしているのだ。

「ほら！」

手を引き、腰を押してやってリラをストームの背に押し上げた。

以前はあれだけラディ以外の者に乗せることを拒んでいたストームが、今はおとなしい。まるで状況が分かっているかのようである。

ストームが暴れないのでちょっと安心したリラだが、高さがあるて怖いので首にしがみつくなのがやっつとだ。とても背筋を伸ばせない。

続いてラディが飛び乗ろうとしたとき、人影が現れた。反射的に

剣を向けたラディは、人物を視認して剣先を下ろした。

この城の主、(リラ曰く)三拍子男 エオス王子だったのだ。正直言つて、まだ無事だったのかと思つたラディである。 magari なりに城の主で、リラ姫の婚約者なのだ。真つ先に狙われて殺されそうな立場だろう。

見た感じではぴんぴんしている。どこかに隠れて震えていたのか。愛しい婚約者が狙われているというのに。

「わ、私も連れて行ってくれ。このままじゃ私も殺される」

足元の騎士の死体に、がくがく震えながら王子は懇願してきた。王子ご自慢の腰の剣は抜かれた様子もない。

「いい大人だろ、自分の身ぐらい守れないのか」

ため息混じりにそう言いつつも、この王子にそんな腕前があるとは思っていない。

「馬には乗れるだろ」

短い問いかけに、王子は首を振った。何から何までダメらしい。

「あなた馬持つてるのに乗れないの?!」

リラが声を上げる。以前会ったとき、立派な白馬を持っているので見つかりラディ姫を乗せて、自分の領土を走り、見せてあげますと自慢していたのに、あれは嘘だったらしい。

馬を持っていても乗れないのでは意味がないではないか。

ラディはもう何も言わなかった。この王子に何かを期待しても意味がないと、ためにならない学習をしている。

無言で視線を走らせる。ストームが厩舎から強引に抜け出したとき、つられて逃げてきた馬がいまいかと思つたのだ。

ストームがひよいと首を動かした。まるであつちを見てというように動作だ。

「きゃあ、待つて動かないで」

急に動かれて、しがみついているリラが悲鳴を上げた。

「大丈夫だつて」

姫をなだめてストームがさしたほうを見る。彼の予想は大当たり

していた。

夜闇にまぎれた馬身が見える。

すぐ近くに三頭、馬がいた。

白馬、黒馬、そして栗毛。夜間なので目立たないように黒馬を選んだほうがいい。

ストームと違って、何の馬装もしていない。厩舎にいたのだから当然だろう。

荷物や馬装を解かないストームがおかしいのだ。

今回はそれが幸いし、災いしたが。

「よし、乗れ」

城内の雰囲気やや気が立っている馬をなだめ、連れてきてラディはきつぱり言った。

「む、無理だ！ 鞍すらついていないではないか!？」

鞍どころか手綱もない。ついていても乗れない王子が嫌がるのは無理もないのだから、だからと言って覚悟ができるまで待つてやる暇はない。

「いいから乗れって!」

また向かってきた刺客を斬り捨てて、急いで王子を押し上げる。

「お、落ちる!」

「しがみついてろ!」

優しくしてやる義理もない。一気に襲いかかってきた刺客を同時に三人ほど切り伏せて、ラディはストームの背に飛び乗った。

「死ぬ気でしがみついてるよ!」

叫んで王子の乗った黒馬の尻を蹴り飛ばす。

「うひええええええええ」

情けない悲鳴を残して走り出した黒馬の後を追うようにストームを走らせる。

「~~~~~!」

リラも声にならない悲鳴を上げた。馬車しか乗ったことのない彼女に、このスピードは速すぎる。目も開けられない。

必死で馬の首にしがみつく。背後で小さな体が何度か動いたのは分かった。

キンキンツという何かをはじくような音も。

「な、なにになに？」

「ん、なんでもない」

ラデイはそう答えて背負っている鞆に剣を収めた。弓矢で狙われたのだ。もっともこの闇の中で当たるわけもなく、偶然に当たりそうだったものは切り落とされた。

かなり距離を稼いだので、もう矢は飛ばないだろう。

「あんまりストームの首絞めるなよ、かわいそうだよ」

苦笑が混じった声でそう言う。姫を不安がらせないために。

「だって、こわい！ きゃあっ！」

不安以前に馬の背にすることが怖いらしい。

「おれがおさえてるって。あつちなんて鞍もないからもっと大変だぞ」

併走している黒馬にはエオス王子が死に物狂いでしがみついている。力が入っている顔面が恐ろしいくらいに崩れていて、見るに耐えない。

リラに見る余裕もなかったのは幸いかもしれない。見ていたらその一瞬で婚約解消を決めただろう。

「なんで怖くないのよっ！？ 真っ暗なのに！」

悲鳴を上げられて、ラデイは涼しい顔で答えた。

「月があるだろ。くらくないよ」

それが当然と言うように、彼は言う。

「上見てろよ。きれいだぞ」

下を見ているから怖いのだ。上を見て、月でも見ていると少年は言う。

まるで焦っていない口調だ。

反乱が起きて、城を追われて、今まさに逃げている最中だということ。

「この子は、どうしてこんなにも落ち着いているのだろう。ずっと年上の私と王子がこんなにあわて、恐怖しているというのに。」

リラはそう思ったが、こわごわ目を開けて言われたように上を見た。

細い三日月が見えた。

「月はいんまり動かないから、速いと思わないだろ」

リラは答えずに見上げている。その瞳からぼろりと涙が落ちた。

「なんで……」

声が震えている。見上げたまま、彼女は泣いていた。

「なんで？ ……どうして……？」

こんなことに。咳きは声にならなかった。

城に着いて、もう安心だと思っていた。あの中は安全で、もう襲われることもないだろうと思っていた。だからラディをからかって、嫌がらせをして、困らせてやろうとした。

ただそれだけのつもりだった。

もう全部終わったと思っていたから、安心しきっていたのに。

また人が死んだ。たくさん殺されただろう。ひとつの城を占拠されたのだ。襲ってきたのは生半可な人数ではないだろうし、抵抗しただけでなく殺されたのではないだろうか。

セリアは無事だろうか。ほかの人は？ 置いて逃げてきてしまった。

自分たちだけ、逃げている。

守るべき小さな子供に護られて。

「さいあく……」

小さな剣士は何も言ってこない。ただ、リラの背にそのぬくもりが伝わってくるだけ。

小さな体。今はそれが何よりも頼もしい。

小さな体。それに頼らなければならぬ自分の弱さが悔しい。

リラは目を閉じた。背中ぬくもりが恐怖を取り去っていくのが

分かる。

悔しい。こんなおチビさんにこんなに安心するなんて。

絶対言ってやらない。リラはそう決心した。

いきなり静かになった姫君に、ラデイはちよっと心配になる。泣き出した気配がしたので何か変なことでも言っただのかと不安になった。

姫は何も言っただけでもない。ただ、少しの間泣いたようだ。

いくら世慣れたような子供といっても、まだ十歳。どうしたらいいのか分からない。

とりあえず、何か言われたら返せばいいかなと、今にも落ちそうな横の王子を気遣いながら走る。

困ったことになった。城に着きさえすれば大丈夫だと彼も思っていたのだ。

城ごと落とされるとは夢にも思わなかった。一度目と二度目の襲撃の規模の割に三度目はかなりおおごとである。緻密ちみつに計画を立て、内部事情を調べないと城を落とすなど無理だろう。おそらく手引きしたのもいるはずだ。

それを考えると、一度目と二度目は陽動だったのではないかと気がもしてくる。

三度目の襲撃、城攻めを感じさせないために、わざわざ馬車を襲ったのではないか？

実際、城に入ってだれもが安心していた。もう大丈夫だと考えていた。

もし、リラ姫とエオス王子がラデイを引き止めなかったら、今頃姫は捕らわれの身だ。

魔道を操る老人もいては、城の騎士たちでは太刀打ちできまい。

そして……ファージは乗っ取られただろう。

『御印』を持ちリラ姫を無理やりめとに娶り、諸国に宣言してしまえば、現国王が何を言おうとどうしようもない。

『御印』が持つ影響力はそれだけ絶大なのだ。

遙かな昔に『竜聖母』から与えられたという指輪。たかが指輪とは言えない。

ましてリラ姫の身柄も得てしまえば、確実に次の王だ。

それだけのことをたくらむ連中ならば、現国王の身を害する手口も考えているかもしれない。

ゲンナリしたのは今日何度目だろう。ラディは考えても仕方ないことを考えて、横を見た。

お荷物はわがまま姫だけでなく、もうひとつ、ダメ王子も増えた。

……全く……厄日なのはまちがいないよなあ。

とにかく、この二人を安全なところまで逃がさなくては。

それが、今の自分の役目だ。

こうして、美しい姫君と勇敢な小さい剣士となにをやってもダメな王子は城からの脱出を果たしたのだった。

2・共に、逃れ・4（後書き）

脱出。でもダメ王子も一緒なので苦勞は倍^{どん}

3・共に、過(こ)し・1

昼間進んでいた方向とは逆方向に走り、森の中を危険をおして一刻も走った頃、エオス王子が黒馬から振り落とされた。しがみついていたられなくなったのだ。

併走してストームを駆っていたラデイがあわてて止まる。

そのすきに黒馬は走り去ってしまう。

「あつ」

しまったと思うがもう遅い。重荷がなくなった馬は軽々と森の奥へ走っていった。

止める間もない。ラデイは息をついて、王子を見た。転がり落ちたエオスはうずくまって呻いている。ストームから飛び降りて、

「どっかケガしたのか？」

落ちた拍子に腕でも捻挫したのかと聞くと、王子は涙と鼻水でべしゃべしゃになった顔を向けてきて、右腕を指し示した。

草で切ったのか、わずかに血がにじんでいるのが見て取れる。

ケガと言つにも迷うような、そんな小さな傷だ。

「……そんぐらいで泣くな」

あきれかえつて、それでもラデイは相棒に背負わせた荷物の袋から布を取り出し、小さく裂いて傷口に巻いてやった。

「ちよつと休憩しよう」

そう言つて、リラの手を引いて、ストームから下ろしてやる。

エオスはまだ、ぐずぐず泣いている。子供でも泣かないような傷だろう。

「……それでも大人なの」

きつい言葉と視線を婚約者に投げかけてから、彼女は背を向けて荷物をあさっているラデイに向き直った。なにやら口の中でもごもご咳く。本人としてはお礼を言いたいのだが、なかなか口から出てきてくれないのだ。

少年剣士はそんな姫の様子に一向に気付かず、ストームの背の荷物に手を突っ込んで何かを探している。

何度か深呼吸して、意を決したリラがやっとありがとうと口にしようとしたとき、大きな布が眼前に降ってきた。

思わず受け止めて、それが濃紺のマントだと気がつく。

「それ羽織ってる。寝着じゃカゼひくぞ」

言われて、再び気がついた。薄い寝着をまとったままだ。眠るのに適したゆったりと薄い服。胸元は大きく開いていて、肩から先も出ていて、おまけに薄い生地のため身体のラインがはっきりと分かる。

出るところは出ていて、くびれも見事な、なだらかな曲線が。

「……」

リラはあわててマントを羽織り、前をかき合わせた。頬が熱い。

こんな格好で、今の今までラディとほとんど密着した状態で、ストームに乗っていたことを思い出し、熟れたトマトより赤くなった。

彼はまだ子供だ。どう考えたって十歳だ。子供、子供、子供である。

何度も心に言い聞かせるが恥ずかしさが消えるわけもない。ひよつとすると、下着も透けていたのでは。

「~~~~~!!!」

悶絶しそうになる。どうりでグローネスがいやらしくじろじろ見ていたわけだ。今になって気がついて、ラディへの反応とは真逆にぞつとした。

あの好色中年にまで見られたのは、本気でイヤだ。背筋に悪寒が再来するのを何とか振り切って、ちらり、横目で少年剣士をつかかった。彼にもすっかり見られたはずだ。王子にも見られただろう。もっとも王子のほうは愛しの姫君の身体に見とれるヒマはなかっただろうし、敵と相対していたラディもそれどころではなかったとは思う。

……背中越しの小さな身体。何よりも頼りになる、少年。

リラはぶんぶんと首を振った。何か浮かびそうになったが、そのせいで消えてしまう。

「ストームから荷物下ろさないでいて、正解だったなあ」

ラディは姫の奇行に気がついていないようだった。ストームを撫でてやっている。エオス王子もようやく泣き止もうとしていた。

「こ、これからどうするの？」

思考を逸らそうとリラは話しかける。

「どうって……ヒメサマアンタの城に行くしかないだろ」

重く息をついて、ラディは答える。リラの居城。今から行けば、朝までには到着するだろう。足の遅い馬車ではないのだ。ストームの足なら、来た時間の半分以下で戻れるだろう。

そこで改めて反逆者への対策や罰策を王に訴えることができるはずだ。

もつとも、それはリラが無事に居城にたどり着くことができているその話。

「徹夜でストームに走ってもらうしかない。もちろんおれもあんたも徹夜だよヒメサマ、我慢してくれ」

夜を徹してストームを駆り、一刻も早くとラディは言い、リラも文句を言える状況ではないと理解して頷いた。どうせストームを駆るのはラディだ。リラは乗っているだけ。

嫌がったのはエオスである。

「わ、私はどうなるのだ!？」

先程、黒馬が逃げたため、馬は一頭、ストームだけ。乗れるのはどう考えても二人。

馬を乗りこなせるのはラディだけで、おまけにストームはラディがいないと暴れる。

そして城にはリラを連れて行くことが絶対条件。

必然的に結論は出る。

「だってしかたないだろ」

さすがのエオスにラディは今日何度目か数えるのもイヤになるゲン

ナリ感を経験する。

「置いていくのか!? 私をつ!? わ、私は王子だぞ、カイヤルカの王族なのだぞ、それを……!」

動揺のあまりに声を裏返してまで訴える婚約者を、リラは蹴飛ばしてやりたくなった。

あまりにも見苦しい。命がかかっているとはいえ、リラより十年上で、ラディより十六も年上のくせに、一番うるたえているのがこの王子だった。

狙われているのは彼ではなくリラで、戦うのも彼ではなくラディだ。

馬に乗るところか、わずかな傷で致命傷を負ったかのように泣く成人男性。

……生きて帰れたら、お父様に婚約は取り消してもらおう。

何が何でも婚約は破棄する。リラは硬くそう決心した。この王子よりもラディのほうがよっぽど頼れる。最初から王子に対する愛想などわずかにしかなかったが、今夜でそれも尽きた。

「歩いていけばいい! 途中の街かどこかで馬車を……!」

王子の訴えは続く。

「んな金ない。時間もない。悠長に歩くだけ反逆者のじじいどもに時間をやることになる。口論してる場合でもねーんだよ!」

すっぱり斬り捨てるかのようなラディの言葉。ここまで逃げられたのだから、これからは自分の身ぐらい自分で守って欲しい。刺客が王子を狙うことはまずないだろうし、急がなくてはならないのだ。でさえお荷物である無力な姫を守らなくてはならないのだ。

「ついたらすぐ迎えに来てやるから、その辺の木のうちろにでも入って隠れてまってる!」

隠れているくらいできるだろう。そう言うラディに王子は比喻でなく、すがり付いている。

「夜の森など何が出るか分からないではないか!? 熊や狼や魔物が出たらどうする!?!」

まったくもって見苦しかった。二十六歳の大人が、十歳の子供にすぎりつき、涙ながらに訴えている。自分の命が惜しいのは仕方のないことだが、プライドというものがないのだろうか？

王族で王子で、さらに成人した男性ならば、節度のある態度を取ってもらいたい。

そう思っリラである。婚約者をかばう気はまったくくない。そんな愛想は先ほど捨てた。

「頼む。置いていかないでくれえ！」

大人にだばだば泣かれては、さすがに見捨てることもできない。

「……歩くか……しかたないよな……」

徒歩。どのくらい時間がかかることが。リラはストームの背に乗せられた。一応彼女も歩くといっってはみたが、長距離など歩いたことのないお姫様だ。

ただでさえ徒歩で時間がかかるというのにこれ以上面倒をかけないでくれと疲れきった様子でラディに言われては、おとなしく従うしかない。

不満ではあったが、少年のいうことを聞いた。たしかに長距離を歩く自信はなかったのだ。

森の中を歩いたことすらない。まして夜間だ。

それは三拍子王子も同様で、歩く端から転んでいる。

木の根につまづいたり、石を踏んだり……まるで歩き始めたばかりの幼い子供のようだ。

王子が転ぶたびに『幼い子供』のラディが助け起こしてやっている。少年剣士は慣れているのか転ぶどころかひよいひよい危なげなく進んでいた。

「う」

どたん。またエオスが転んだ。

「下見て歩けよ……」

助け起こすラディが阿呆らしいと言いたげなのも仕方がないだろう。

「うう、暗くて分からぬ……」

べそべそ。はーっと、ラディは息をつく。

よく見て歩けと言ってから、姫が妙に静かなことに気がついた。さっきまで王子の様子にイラついていたのに。

視線を向けて、納得した。

「眠いなら寝ろよ」

リラはストームの首にしがみつくようにして、それでももうとうとしていた。もう真夜中だ。

眠気がまぶたを押さえつけているのだろう。一時的とはいえ、刺客から逃れたので安心したというのもあるようだ。

一気に眠くなったのを、必死に我慢しているのが見て取れた。

「ヒメサマ」

「ね、眠くないわよ」

意地を張るリラである。自分より小さいラディが歩いているのに、眠るのも悪い気がしているのだった。命を狙われているというのに危機感が無いと思われるのもシヤクだわ、と、素直でないことも考えている。

まぶたをこすったとき、見かねたラディがもう一度言ってきた。

「寝とけ」

「眠くないったら！」

ますます意地になる。ラディは肩をすくめた。

このお姫様ときたら……一体何を考えているのか分からない。

王家の姫っていうのは皆こんな風なのか？ だったら金輪際、二度と、ぜったいに王族とは関わらん。少年剣士はそう思う。

大体リラがフアージ国王家の者でなかったら、ここまで面倒は見なかった。

刺客たちから助けた後、頼りない騎士たちにおしつけて、さっさと別れていたはずだ。

「……あーもー……ホントおれって親孝行……」

呟きは小さかったため、半分眠っているリラには届かなかった。

聞こえていたらどういう意味かと問い詰めただろう。

ラディはファージ国王家と何か関係があるのか、と。

けれど耳に聞こえぬものを問えるわけがなく、姫君が剣士の言葉の意味を問うことはなかった。

眠気を我慢しながらも、三人は暗い森の中を進んでいく。

3・共に、過ごし・1（後書き）

大人のほうがお荷物ですね。

3・共に、過(こ)し・2

……どことも知れぬ場所にいる。暗くて、寒い。

リラは小さく身震いした。周りを見渡すがラデイもエオス王子もいない。

今まで乗っていたストームすら、姿がない。ここがどこなのかも分からなかった。

……森の中にいたはずなのに……？

たった一人、ポツンと暗黒の中にいる。その事実不安と恐怖が勝気なはずの姫君の心に緩やかに進入し、勇気を隅へと追いやり始める。意地というものも包み込み消し去ろうとしてくる。

……怖い……けど、あいつら一体どこに行つたのよ？ 私を置いて。

気の強いようなことを考えて、わざと自分を奮い立たせようとする。しかし美しいその顔には不安の色が濃く、隠しようがない。

王子は頼りないので少年剣士をと名を呼ぼうにも、彼の名をうる覚えで、逆に考え込んでしまう始末。

もっともそのおかげで、多少の恐怖は去った。

あ、そうだ。ラデイ・スポットだったわ。ラデイよラデイ。思い出したわ。

その名を口にしようとした時、リラの胸元から優しげで柔らかかな光がすうっと彼女の眼前へと伸びた。

驚いて胸元を見る。スレンダーな身のわりにしっかりと存在している胸の谷間に、『御印^{みしるし}』がある。光はそこから放たれていた。

……な、なにこれ？

ぎよつとして『御印』を細い指でつまみあげる。光は収まらない。やがて。

【……希望を捨てぬよう……困難に負けてはなりません……信じてください……小さな剣士を……】

とても暖かい、優しい声が聞こえてきた。誰、と問いかけようとしたリラに声は告げる。

【危機が迫っています……けれど貴女が彼を信じてくれるのなら回避できる……貴女も、ファージも助かります……信じて……そして御印を彼に……】

徐々に光は薄れていく。

【……御印を預けて……貴女が持ち続けては危険です……】
光と共に声もゆっくりと遠ざかり、やがて消えた。
何のことなのとリラが問うても、答えは返らなかった。

「……なんなのよ、一体……」

と呟きながらリラは目を開け、自分が眠っていたことに気がついた。ストームの首にしがみつきながら寝ていたらしい。器用な寝方だ。下手をすると落馬していたのではと自分であきれた。

「なんだ、もつと寝てりや良かったのに、もう起きたのか」
横を歩いていたレイが気付いてそう言ってきた。実は彼がリラが落馬しないように気を使って安定したところをストームに歩かせていたのだが、そんなことは微塵も口に出さなかったため姫は気がつかなかった。

気がついたのは別のことである。

「もう大分歩いたぞ……休憩しないのか……」
しつこくしつこくエオスが休もうと言い続けている。王子の高価な絹の服は、もうボロボロなのが月明かりでもはっきり分かる。リラが眠っている間にも何度も転んだのだろう。

眠気と疲労でぐったりしている。

「少しでいい……休もうではないか……なあ童……」
「やかましい。なさけねーな、大人のくせに。おれだって眠いし疲れてるのに歩いてんだぞ。黙って歩け」
子供のほうがよほどしっかりしている。

「うっ……なあリラ姫、替わってくれぬか？姫はずっと馬だろう、

不公平ではないか」

そんなことまで言い出した。

ぷちんと何かが頭の中で音を立てたのが分かったリラである。

「何考えてんのよ!? 大人の男のくせに! 子供が歩いているのに私に替わってくれですつて!? 女も歩かせる気なの!? 子供を横に歩かせておいて!!」

もう少しエオスが自分に近いところを歩いていたら、その顔をひっぱたいているところだ。

「普通大人がこらえるものでしょ!? 男ならなおさらよ!!! どうしてラディに馬に乗って少し休めと言えないのよ、この馬鹿王子っ!!」

まったくもつての正論に、エオスの目が潤んだ。いい年の男、しかもお世辞にも容姿端麗とはいえない男の泣きそうな顔 正直に、気持ち悪い。

見ているのもイヤになってリラはぷいと顔をそらした。

びっくりしたのはラディである。ついさっきまで彼のことを礼儀知らずの子供としか思っていなかっただろう姫が、今ラディを気遣うようなことを言ったからだ。

おまけに名前まで口にした。このわがまま姫がただの子供の名前など覚えるわけもないと思っていたのに。

やっぱり命を救われた心境の変化って奴だろうか? と首をひねる。よっぽど驚いたらしい。

一方、リラの方は王子のふがいなさに腹を立てるのはやめて、さっきの夢のことを思いだしていた。

『御印』を引っ張り出す。金の鎖でリラの細い首にかかっている『御印』……指輪。

今見ても異常は何もない。まあ、夢の中の出来事だったのだから当然だ。

しかし、リラはなぜか気になって『御印』をじっと見つめた。

夢の中の声は小さな剣士に御印を預けてと言った。

リラが今持ち続けているのは危険だとも。

……夢の中の話なのに、気になって仕方がない。だからと言って、まだ得たいの知れないラディにほいと預けるわけにもいかない。

信用していい人物かどうか、判断するのにもう少し時間が欲しかった。

リラの心境の八割くらいは、信用してもいいかなと感じているのだが、さすがに国宝を預けるのには勇気がある。

チラツと横目でラディを見た。少年はこちらに気がついていない。また転んだエオスに手を貸して起こしている。

そのエオスが、身を起こして声を上げた。

「森から出られるぞ！」

そうして、走っていく。

その先に、木々が途切れ、確かに野が広がっているのがうつすら見えた。危険な森からやっと出られるのだ。

「……元氣じゃない……」

「まだ走るだけの体力残ってたんだな……」

森から出られるとホツとするよりも先に、リラとラディは揃って呟いた。二人の視線の先、あれだけ疲れた、休もうと騒いでいたエオスが元氣いっぱい走っていく。

森の出口が見えたことで、やはり少し安心したのか、リラは知らず緊張を緩めていた。

甘かった。ラディの言うとおり、さっさとストームを駆り、居城に行つていればよかったのだと、心底から後悔したのは、森から出、周囲を包囲されているのに気がついてからだ。

馬にまたがった男たちの先頭に、黒いローブの老人が闇の中から浮き出るように現れた。おそらくはこの魔道の使い手が、リラたちの行く先を探知し、先回りしたのだろう。何をやってもおかしくない。ファージに限らず、ほかの国にも魔道を扱う者はごく小数だ。

だからこそ余計に恐ろしい。何をするか分からないからだ。人間は未知のものを恐れる。

魔道はその最たるものだ。何の知識もない者は先入観で判断するしかないため、無条件で恐れる。

ましてこのタタラという老人は、邪悪としか表現できない雰囲気
を漂わせている。好意や誠意があるとは思えない。

ラデイはすでに剣を抜き、油断ない視線を向けている。

ホッホッホと奇妙な笑い声で老人は笑った。前歯の数本が欠けた
口が半円形を形どる。

「まったくもって勇氣ある童よのう……だが勇氣は時として無謀を
生む。幼い命を無駄にすることもあるまいに。金が欲しいのならく
れてやるう。地位が欲しいのなら小さな手に乗せてやるうぞ。美し
い姫君を渡してくれるのならな」

視線を向けられた童の返答は明快だった。

「金も地位もいらないね。持ってたつて縛られてきゆうくつなだけ
だろ」

「……それは地位と金の甘美な蜜を知らぬから言えること。世には
これほど甘い蜜は存在せん。他にはな」

互いに表面上は笑みを浮かべている。一見したならば友好的にも
見えた。

けれど交わされる言葉の裏に刃が潜んでいる。相手の言葉の裏を
読み、さらにその裏の意図を掴んで返す。少なくともラデイのほう
はそうしなくてはならなかった。タタラというこの老人の言葉を額
面どおりに受け取るのは馬鹿がやることで、危険この上ない。

「おれ、子供だからじーちゃんにそんなこと言われてもわかんない
な。まだまだかーちゃんのおっぱいが恋しい年頃だしね」

『子供』はにやりと笑った。

「金とか地位とかは年くつてから考えることにしてるんだ。まして
」

そこで彼は笑みを消し、鋭い視線と厳しい表情を老人に向ける。

「反乱なんかおこす無骨なじじーどもに清纯可憐などは言わないがキレーなオヒメサマを渡したとあっちゃドラゴンマスター竜聖母にしかられるからなっ！」

ラディの言葉にリラもかちいんときたが、それ以上にカチンときたのはタタラのほうらしかった。顔から笑みが消え失せ、代わりに現れたのは殺意だ。

「……よからう。では殺してくれる。幼い従順な魂は竜聖母もさぞ喜ぶだろう……竜聖母がいればの話だがな」

包囲している男たちがじりじりと前進してきた。全員が馬に乗っている。地面にいるラディには不利だ。まして彼はまだ子供で、背も低い。地面に立ったまま剣を振り回して、馬の背にいる刺客を斬ることはできないだろう。少年の後ろには姫と王子もいる。二人も守らなくてはならない。

その上、魔道の使い手もいるのだ。不利もいいところである。

せめて男たちが馬から下りてくれれば何とかなる。ラディはそう考えた。いくら多勢で数の暴力でも、まともに戦わず姫と王子を連れて強行突破するくらいなら不可能ではない。

馬を奪い取って、王子を蹴り乗せて走り去ればいいのだ。

しかし、それはあくまでも刺客たちが地上に立っている場合で、今馬上にいる彼らから突破するのは困難だった。

馬から刺客を下ろすしかない。だからと言って相手が素直に降りてくれるわけも無い。

したがってラディの取るべき道は一つ。

内心ごめんと謝りつつ、馬に斬りつけた。つぎつぎと容赦なく馬の前足か、首から胸の辺りを斬っていく。

やむをえないと思いなながらも馬が哀れだ。

反乱なんか起こす人間より、馬のほうがよくほど可愛いのに。

ごめんな。心で詫びながらラディは馬を斬り、刺客を落馬させる。

避けようと馬をさおだたせ、前足を斬られるのを避けようとする者、逆にラディを踏み潰そうとする者もいたが、すくい上げる様な

一撃でその努力は無に帰した。

ラディを斬るか、姫か王子を人質に取るかと刺客たちも愚かではないところを見せたが、ラディの剣技は彼らの予想を遙かに上回るもの。

いずれの企みも小さな剣士の見事な剣技に阻まれた。

次々と落馬し、斬られていく男たちの輪の外で、黒衣の老人はじつとその様子を見ている。これだけの人数で包囲しているにもかかわらず、形勢は不利に見える。

いや、明らかにこの男たちの腕前では童をしとめることはできない。

このままではまず間違いなく逃げられる。

冷静に老人はそう判断していた。しかし、こうも思っていた。

だが、わしが出れば別じゃ……。

老人の目は、情けなく震えて突っ立っている王子の姿を捉えている。かの王子の腰には護身用のきらびやかな剣がある。宝石で飾られていても、その刀身は本物だ。充分武器になるはず。

なのに王子はそれを振るうこともなく、恐怖と脅えで立ち尽くしている。

幼いラディにかばわれて、大人のエオスは動けない。

老人は小馬鹿にした笑みを浮かべた。あまりにも情けない王族がいるものだ。

先ほどの老人との会話も、相手をしたのはあの童。こちらの甘言に乗るどころか、ばつさりと見事に跳ね除けた。

いつそ天晴れと思うような強さを見せる子供と、声も出せずに脅える大人。

「どれ、わしが英雄にしてやろう……姫を反逆者から護った勇敢な王子として死ぬが良い……」

あざけるように呟く。そして老人はフードの下から王子を見た。

しわがれ、ひび割れた声がその口から流れ出し、言葉という音を紡ぐ。それはすぐに呪文という形となった。

呪文は目に見えない鎖となって王子を絡め取る。

それに気がついた者がいたかどうか。情けなく脅えていたエオスの震えが止まった。

木にすぎるように抱きついて腕がだらりとたれる。目の焦点が合っておらず、見ている者がいれば正気をなくしたとすぐ気がついたらう。

老人以外は誰も見てはいなかった。ラディは刺客の相手で手一杯、刺客もラディー一人の相手で手一杯。人数はまるきり違うのに、それでもラディは圧倒しようとしている。

いける。ラディはそう思った。

逃げられる。刺客はそう焦りを感じている。

エオスはぼんやりとしたまま、腰の剣に手を伸ばす。彼の行動にまだ誰も気がつかない。

寶石で飾られた柄を握り、鞘から引き抜いた。両手でしっかりと握り締める。

そこでリラがようやく気がついた。ストームの首にしがみついたまま、視界の端で震えていた婚約者が剣を抜いているのを見た。

武芸の武の字も知らないような王子が、なにをするつもりなのか。「何してるの!? ちょっと、どうする気!？」

ラディと一緒に戦うつもりになったのか。あまりにも多勢に無勢だとリラも思っていた。

だがリラに戦う力はない。武器もない。ストームにしがみつき、邪魔にならないようにするのが精一杯だ。

だから、エオスが戦う気になったのかと思った。

「やめなさい! かえって邪魔になるわ!」

ラディは強い。リラとエオスをかばっても、この数の刺客を押し替えている。そこにエオスが入ったら、かえって危険だとリラは思った。エオスが弱いと知っているからだ。

王子は答えなかった。愛しい姫の声にも何の反応も返さず、三歩ほど、走った。

そのまま、全体重を込めて、剣を突き出した。

その先に小さな剣士の背。

「……！」

姫と王子をたった一人で護っていた少年剣士は、ちょうど落馬した刺客の一人と剣を合わせたところだった。

リラは目を見張る。

避けられない……！

「く……っ！」

衝撃を感じたが、ラディはそのまま眼前の刺客を切り伏せた。

エオスが身を引く。ずるりと剣が引き抜かれていく。

刺される寸前、それでも身をひねって急所を避けたのはさすがといえよう。

しかし、剣は深く突き刺さった。

鮮血が見る間にラディの衣服を赤く染めていく。

「あ、あ……なんてことするのよっ……！」

真っ青になってリラが悲鳴を上げる。エオス王子はぼんやりしたままだ。

ラディは気丈にも倒れない。さらに二人を切り伏せた。

その動きに、先ほどまでの鋭さは欠けている。

さすがに後退して、ストームに寄りかかるように立った。

「だ、大丈夫っ……？」

リラの声に返す余裕はない。

「……ち、くしょ……魔道で操りやがったな……！」

ラディの視線の先には、さっきまで輪の外にいた老人の姿がある。老人は悪意をむき出しにして笑った。

エオスがその笑いに答えるように動く。今度はラディに向かってではない。

王子の剣先は自身の喉に向いていた。

赤い液体が勢いよく吹き上がる。

「……………」

声もなく、リラもラデイも、刺客たちも動きを止めた。重たげな音を立て、王子だったものは倒れる。その音で我に返ったのか、ラデイはタタラを睨みつけた。

彼にはこの老人が何を狙ったのか、分かったのだ。

「……おれを反逆者に仕立て上げる気が……！」

ホッホッホと老人は笑った。その笑いが、少年の考えを肯定している。ラデイが姫と王子を連れて逃げたことにより、この老人はやり方を変えたのだ。『姫をさらい拘束してこの国を乗っ取る』のではなく、『姫を誘拐した犯人を成敗した英雄』となり、名声をも同時に得ようと。

「……ずいぶんあさはかなテを使うじゃねえか。使い古されてて伝承歌や伝説の中だって古いぜ！」

「だが有効な策じゃ。姫をさらった不届き者を王子が成敗しようとし、反対に殺される……これは立派な反逆罪じゃ。皆のもの、この不届き者を殺し、王子殿の敵を討てい！」

姫君が誘拐されたことにして、婚約者の王子が勇敢にもそれを追いつ、犯人と戦い逆に殺される。

タタラや刺客たちは王子の敵を討ち、『犯人』を殺し、姫を取り戻す……。

何もかもを犯人　ラデイにかぶせる気なのだと、リラもようやく気がついた。

「私は本当のことを父様に言うわ……！」

ありもしない罪をラデイに背負わせるものかと、姫君は叫んだが、タタラは気にもしていない。

「魔道は偉大なるもの……人の心を操るもたやすい……今の王子を見て、お分かりになれなんだか姫様……？」

ゾクリとする声音。他者に対する好意など一片も感じさせない。

リラは声を失った。話を通じる相手ではないのだ。

まずい、と思ったのはどちらだったか。

どちらも同時にそう思ったかもしれない。

リラはこのままではまずいと思った。

タタラは動いたのを見てまずいと思った。

刺客たちもしまったと思った。

まさかそんな体力など残っていないだろうと思われていたラデイが、ストームの背に飛び乗り、手綱を取ったのだ。

「殺せ！！」

タタラの指示より、少年の行動は早かった。前方を阻む刺客二人を斬り飛ばし、ストームを走らせたのである。

疾風のように遠ざかる姿を、刺客たちがあわてて追おうとしたが、タタラがそれを制した。

あの傷で遠くまで……それこそ姫の居城まではもたぬと判断したのだ。出血もひどかった。朝日を見るまでには間違いなくあの子供は死ぬだろう。

それに、あの方向には念のためグローネスが兵を率いて先回りしている。

姫一人に、逃れる術はない。ゆっくりと、追い詰めていけばいい……。

3・共に、過ごし・2(後書き)

危機です。大ピンチ。

……リラの羽織るマントにじつとりと液体がしみこむ感覚。それが彼女に伝わってくるといふことは、マントだけでなく寝着にまでラデイの血がしみこんできているということだ。

だが、リラの後ろで手綱を取っている少年はストームを止めようとしない。

かなり前に、彼自身が言っていた言葉がリラの頭をよぎる。

『ケガ人はだめだろ。のんびり行くならともかく、急いで馬を飛ばしたら』

死んじやうぞ、と、あの時彼は言っていた、セリアのケガでさえそう止めたのに、今のラデイのケガはセリアの比ではない。

「ねえ！ 止めて！」

リラはゾツとしながら叫んだ。死んでしまふ。それだけは止めなければ。

「死んじやうわよあなた！！」

やめて止めてとリラは何度も叫んだが、ラデイは聞き入れない。月だけがある草原を猛烈な勢いでストームを走らせる。

この上は一刻を争う。もう一度刺客に襲われたら、次はない。いくらラデイといえども、この傷で対抗できはしないのだ。

ラデイは殺され、リラは連れて行かれるだろう。そして美しい姫には死より辛い現実が待ち受けているのだ。その現実をリラが幸せに感じることは確実でない。

だが、あの老人はその意思さえも変えてしまふ。

あとは空虚な生活が続くばかり。あのグローネスの傍らで、フアージの姫は屈辱も感じる事ができぬまま、美しい人形と化するだ。

……それこそ竜聖母リリスがおこるよな……。

貧血気味の頭でそう考え、やはりこのわがまま姫を見捨てられな

いとラディは思う。

どこまで保つか分からないが、休まずストームを走らせ、リラの居城か彼女の父王がいる場所まで少しでも近付かなくては。

止血のしていない体は刻一刻と死に近づいている。目眩がしてきた。痛みはあまりなく、代わりに傷口はじんわりと熱い。

「止めてったら！！ 手当てしないと死んじゃうわ！！」

いくら腕の立つ剣士とはいえまだ子供、体力は大人より劣るはず。リラはもはや気が気でない。出血は治まっていないというのは容易に予想できた。

生意気で礼儀知らずの少年でも、彼女を守り、戦って負傷した。まして、死ぬかもしれない重傷なのだ。ほうっておくわけには行かない。

「お願い！ 止めて！ 本当に死んじゃう！！」

何故か涙が出てきた。ぎゅうぎゅうと胸が締め付けられる。

それは、失うという不安と、恐怖。姫君が自覚することはまだ、ない。

「ラディッ！」

「……死なねーよ、大丈夫だから、そんな声出さなくて……」

名を呼ぶと、少年はようやく返してきたが、その声は力なくかすれている。さつきまでの威勢良い声とはまったく違う。かえってリラの不安をあおった。

「いやっ、だめっ！！ 止めて、お願いだから！！」

あの気の強い姫が泣いている。こんな状況だがラディは少し驚いた。この短い時間の間にずいぶん距離が縮まったらしい。それは少年も自覚していないことだったが。

「大丈夫だって……」

我ながら説得力がないと感じているが、ストームを止めるわけにはいかない。

一度止めてしまえば、二度と走らせることができないと分かっている。もう一度駆る体力は残されていない。できる限り走らせなく

ては。

ストームは止まりたがっている。主がどういふ状況か理解しているからだ。それが分かるから、なおさら止められない。

「うっ……うっ」

姫が呻いている。止まってくれと叫ぶのはあきらめたようだ。

ラデイはそう思い、ちょっとホツとしたのだが、リラの心境は違う。

止まってはくれない。いくら言ってもラデイは止まらない。ならば。

「えいっ！！」

自分で止める！

ストームにしがみついていた手を思い切って離し、手綱を掴んでカ一杯引いた。

「ばっ、バカ……っ」

待つてましたとばかりにストームがいないで、足を止めてしまった。

「何考えて……どーすんだよっ……おれ、もう体力ほとんど……」

ラデイの呼吸は浅く速い。気を抜けば意識を失いそうになる。彼の顔色は蒼白を越えて白くなりつつあった。

リラは何も言わずにマントを脱いだ。それをぐるぐるラデイに巻きつけようとする。

止血の仕方など知らないが、なんとかしようと思いつきながら傷口を押さえている。白い手が血で濡れようと構わずに。

しょうがないなとラデイは思った。リラの泣き顔を見て、突っぱねる気にはなれない。

表情を緩めて、彼女の手をとる。こちらを見返す彼女に苦笑してやっつて、

「止血になってねーよ……自分でやる。手伝ってくれりゃいいから……」

ストームが足を折って座る。地面が近くなったので、リラも自分

で馬の背から下りられた。

ラデイも下り、地面に座り込んだ。リラのマントを腹に巻きつけ、とりあえず傷口を押さえている。

「荷物の中から布出して。てきとうなのでいいからさ」

言われてリラはあわてながらもストームの背の布袋から大きな布を引っ張り出した。

「で、短剣も入ってるから、それで布裂いてくれ」

「うん」

どの程度に切ればいいのか良く分からないが、包帯のようにすれぱいいかとできる限り細く長く切る。刃物など扱ったことがないリラには難しい作業だったが、それでも彼女は文句一つ言わずに続ける。

切れたはしからラデイに渡していき、それで彼は自分の止血をした。応急手当も手慣れたものだった。リラが布を切るよりよっぽどテキパキしている。さほどかからず、彼は手当てを終え、息をついた。

「他になにかすることない？」

懸命にリラが言つと。ラデイはちよつと笑った。

「そーだなあ……とりあえず顔と手、余った布でふいて、荷物からなんか服出して着替える」

「あ」

言われてひどい格好をしていると気がついた。顔は涙で、手は血で濡れていて、寝着もラデイの血で赤く染まっている。

……こんなに血が出ていたんだ……今更ながらそう分かって、背筋が冷えた。止めてよかった。本当に死んでいたかもしれない。

止めて良かった……。力が抜けてへたりこみそうになる。

「？ でした？」

「……なんでもない」

無茶をする。それがリラのためと分かっているから、責められない。

また涙が出そうになった。見られたくなくて、ごまかすように布で手を拭き顔を拭う。

ついでに働き者のストームの背も拭いてやった。それから布袋に手をつっ込んで……ラディに振り返る。

「服って……ラディの？ 私、着れないんじゃない？」

子供のラディはリラの肩ぐらいまでの背丈。どう考えても彼の服ではサイズが合わない。着るといふよりは羽織るのがやっとだろう。「いーから。どっちにしてもそのままじゃカゼひくし、目の毒だろおれ、いちおー男の子だから」

と、ラディは笑っている。赤くなつてリラは顔を逸らした。

こんな状況なのに、子供のくせに、何を言うのよバカ。

そう思いながらもラディが笑っているのでかなり安心したリラである。冗談が言えるのなら、たぶん大丈夫とも感じた。そう考えると現金なもので、彼には見えないように背を向けて、ちよつと笑つてしまった。

嬉しい気持ちのまま荷物をあさつて、たぶんこれは服だろうと感じたものを引きずり出す。

ずるずると出てきたそれは、まぎれもない服だった。

女物の、ドレス。絹とまではいかないがそこそこの物だ。

「……………」

ドレスを手にしたまま、リラは硬直した。あまりにも用意が良すぎる。どう見てもラディが着るようなものではなく、大人の女性が着る品だ。

そういえばさっきまでリラがまもっていたマントもラディが使うには大きすぎるし、止血に使った布も都合が良すぎる。

マントや布までは用意周到と言えは言える。だが女物のドレスとなると……そうは言えない。まるで何が起こるかわかっていたように物資があるなど、妙にも過ぎる。

まさか、と思った。でも、と思考が答える。そんなことあるわけがないわ、と心で声がする。わからないわよ？ とどこかが返す。

もし、もしラデイがあいつらの仲間だったら？ 今までのことが全部お芝居だったら。

違う、怪我してる。本当に大怪我してるもの。そう？ 魔道でごまかしてはいない？ 魔道使いがいたじゃない。

心の中で疑惑が囁く。信じたい気持ちが反論する。

素性も知れない子だわ。子供なのにあんなに強いのも変よ。

助けてくれたわ。命を懸けて護ってくれている。

芝居かもしれない……でも、でも！

「……？ どーしたんだ？ 早く着替えるよ。おれ、むこう向いてるからさ」

ラデイの声ではっと我に返った。くるっと向き直り、詰め寄るように問う。

「ね、ねえ！ なんでドレスなんか持ってるの！？ マントだってあなたが使うには大きかったし！ 布だって……！」

「あ……えーっと……」

ラデイは言葉に詰まった。どう言えばいいかめぐるしく考える。『本当のこと』を言いたくはない。言う気もなかったし、信じてもらえらると思えない。

しかし貧血の頭でうまい言い訳を考えられず、また、その気力も今はない。

仕方なく、正直に述べた。

「……なんでも出てくる魔法の布袋なんだよ、それ」

「……うそ」

案の定、リラは疑いのまなざしになった。無理もないとラデイも思う。

そうだよな、おれだってそう言われたら疑うよ……頭おかしいんじゃないかって思うだろうし。でも本当なんだよな……。

「……うそつく体力も気力もねーよ……」

軽いため息を混せてそう言ってやる。

「じゃ、じゃあどこでこんな……魔法の布袋なんて……」

「拾った。旅の途中で。おれあちこち旅してるし、結構あるぞ？魔道関係の品物。おれは魔道にはあんまり詳しくないから、ほかのものは手放したけど、その布袋は便利だから使ってる」

これは嘘だ。本当のことを言うわけにはいかない。

……少なくとも、今はまだ言いたくない。

「そうなの……こんなものがあるんだ……不思議ね」

「便利だろ」

「うん」

リラは納得したようだった。所詮は世間知らずのお姫様、本当にこんな便利なものがぼろつと落ちてると信じたらしい。

気が付かれないようにラディは息を吐いた。

……まあ、どうせ本当のことを言っただって信じないだろーしな。

あの言い訳で信じたんならいいか。

隠していることはある。けれど言っても彼女は信じはしないだろう。余計な混乱は避けたいし、変に騒がれるのもごめんなのでラディは言わなかった。

ファージ国の姫は彼の背後で着替えている。

ラディが何者なのか、彼女も少しは考えているようだった。だが、その思考が真実を探り当てることはまずないだろう。ラディにはその確信がある。リラに限らず、他の者でも少年が何者なのか分かるものはおそらく、いない。

……ま、その点では安心できるか……。

素性がばれるのは何よりイヤだった。冗談にもならない状況になるのは目に見えている。

それだけのごめんだ。何が何でも避けたい。

目眩がおさまらない頭でそう考える。絶対にそれだけは避ける、そう決めて思考を切り替える。

何よりも逃げるのが先だ。グローネスとタタラが追いついてくる前に、なんと少しでも姫を安全な場所に連れて行かねばならない。しかし、今のラディでは足手まといにしかない。いっそのこ

と、姫一人をストームに乗せて送り出すか……首にしっかりとつかまらせておけば落馬することは無いと思う。

刺客にさえ襲われなければストームはちゃんと送り届けるだろう。不安があるとすれば刺客のことだけだ。

襲撃さえなければ……なんとかなる。問題は襲撃が確実にあるということだ。無力な姫君にどうやって回避させるか。

しゃらん。

難しい顔をしているラディの目前に、軽やかな音を立てて『御印』がぶらさがった。

驚いて顔を上げると、見下ろしているリラと目が合う。着替え終わってこちらに来たのだろう。いくら思考に沈んでいたとはいえ、気がつかなかったのはまずいと、ラディは自身の疲れと負傷の重さに眉を寄せた。

「預かっておいてくれる？」

その態度をいぶかしげに取られたと見たのか、リラは小首をかしげながらそう訊いてきた。

「え」

ひょいとしゃがみこみ、彼女はラディと目線の高さを合わせてくる。

そうして彼女は彼の手を白く細い手で引き寄せ、『御印』を握らせた。

「着替えているときに思い出したの。さっき……ちょっと眠っていたときに夢を見て……夢の中で御印をあなたに預けてって言われたわ……ただの夢かもしれないけど」

小さな剣士の手に自分の手を合わせたまま、リラはじっとラディの目を見つめる。

彼は逸らさなかった。決してリラから目を逸らさなかった。まっすぐに彼女の目を見ている。

それで、リラには充分だった。

……彼を、信じよう。これから先、なにがあっても。

「あなたのこと、信じるわ」

真剣な目だった 互いに。

「……わかった。預かる」

うなずいてラディは『御印』をズボンのポケットにしまいこんだ。
見届けて……リラはもう一つ彼に言っておきたいことがあると思
い出した。

「それから、ひとつ約束してほしいの」

さつきと違って視線を逸らす。目を合わせてはとても言えない。
頬が赤くなっている。

「……なにを？」

少年剣士の問いかけに、少し躊躇してから、麗しの姫君はぼそり
と呟くようにおっしゃった。

「……死なないでね」

本心から、そう願う。本人ですらまだ気がついていない微妙な想
いも含まれて。

もっともいかに強い剣士といえどもラディもまだ子供。

姫君のそんな想いにも気がつかず、けれど彼女に笑いかけ、

「だいじょうぶだよ」

応える声は優しい。

3・共に、過ごし・3（後書き）

瀕死のチビッコにはいろいろな秘密がある様子。何も知らない姫君と、ちよびっという雰囲気。

3・共に、過(こ)し・4

月夜の草原をそよ風が渡ってゆく。

つかの間の休息、静かな時間が過ぎてゆく。のんびりしているわけにはいかないのだけれど、張り詰めた心と、負傷した身体には休息が必要だった。

ラデイの隣に腰を下ろして、リラは呟いた。

「……疲れちゃった……」

短い間にいろいろなことがありすぎた。ひどく疲れている。護られていたリラでさえ、かなりの疲労を感じているのだ。ずっと戦い通しのラデイの疲労は比ではないだろう。

その上、怪我もしている。

「眠くない？ ラデイ」

「いや、別に。おれは平気。ヒメサマこそ寝とけよ、疲れてんだろ」
剣を抱えるようにして、ラデイは座っている。あたりを警戒しているのだろう。そんな身体で、それでもリラを護ろうとしている。真っ白な顔色なのに、どこにそんな気力が残っているのだろう？

顔を向けてじっとラデイを見つめた。リラを護る、小さな剣士。

何故か急に胸が苦しくなった。不快な苦しさではないのだけれど、経験したことがないので戸惑う。

ラデイを見ていると、その苦しさは強くなるような気がした。

「……何かしら、これ……？」

正確に考えると、それは苦しみとは違うような気がした。リラが今まで感じたことのない感情、想いだ。

リラがいくら自分の思考の中に答えを見出そうとしてもできるわけがない。経験したことがないからだ。彼女が王族の姫君だからだ。『恋』や『愛』など、王族の女性にはほとんどが縁のないもの。現にリラも好きでもない王子と婚約させられていた。

伝承歌サーガや物語、劇中にある恋物語に憧れはしていても、自分がそ

んな想いを抱くことなどないと自覚している。

だから、今のこの想いがなんなのか、リラには分からなかったのである。

あまりにもまじまじとラディを見つめたまま、彼女が考え事に沈んでいるので、さすがにラディも眉を寄せる。

「……どした？」

「え？ うん、ちょっと……」

あいまいな答えが返ってくる。

「？ おれの顔、なんかついてんのか？ じろじろ見てさ」

「そついうのじゃないんだけど……」

とリラは首をかしげる。彼女がするととても可愛らしいしくさだ。並の男ならごろごろ転がっただろう。

「んじやなんだよ？」

お子様ラディは転がらない。

「んー……何かしら……」

自分にもよく分からないことをラディに聞くわけにいかず、リラは無自覚のまま延々と考え込んでいる。ラディはしばらく不審げな顔で彼女を見ていたが、そのうちあきらめた。

肩をすくめて星空を見上げる。月と星。変わらないものが彼を見下ろしている。今までのことが嘘のように静かだった。追われていることを忘れてこのまま眠りたいと、少しだけ思った

ほんの、一瞬だけ。

そろそろ出発しないとまずいと、すぐに気持ちを切り替えた。

「……もうそろそろ行かねーとまずいぞ、ほら、ヒメサマ」

促され、リラは立ち上がった。ラディは立たない。

「？ どうしたの？ 行くんでしょ？」

「おれは行けない。一人で行ってくれ。ストームに乗って行っていいから」

「どうして！？ 一人でなんていやよ！ 私、馬に乗れないし……」
何よりも彼をここに一人で置いていくなんでできない。

「仕方ないだろ、ストームを駆るだけの体力が残ってない。満足に戦えそうにもないし、足手まといだからおれは残る。大丈夫だよ、ストームはアンタを振り落としたりしない」

ストームはリラの横にいる。いつの間にか寄り添うように立っていた。馬の優しい目がラデイを見ている。傷ついた主を心配しているようだった。

「早く行け。ストーム、ヒメサマをたのむな」

相棒は納得しているようだった。反発したのは、護られるべき姫君である。

「だめ！ だめよ！ けが人を置いていくなんてできないっ！」

「できなくてもやってくれないと困る」

「困れば!？」

「……おい……」

「ぜったい!! ラデイを置いていくなんていやだからね、私!!」
頑固にリラは言い張った。一応心配してくれているのはラデイにも伝わるので、責められない。

しかし……どうしろと？ 困り果てるラデイである。

彼と一緒に行くだけの体力は残っていない。休息は取ったが微々たるもので、体力回復には至らなかった。こんな状態でストームを駆つたら、安全な場所に着く前にまず間違はなく力尽きる。この様子では彼が行かなければリラも行かないだろう。

かと言って正直に、このまま馬に乗るとおれ死ぬぞと告げれば、彼女はもっと休むと言い出しかねない。それでは意味がない。

……どうしよう……。

テはある。馬に乗らず、ラデイも死なず、安全な場所に行く方法はひとつだけある。けれどそれはラデイの素性を暴く行為にほかならない。

彼は迷った。それだけは避けたい。死んでも避けたい。その迷いが、命運を分けてしまう。

リラがいきなり膝をついた。倒れこんでくる。

「おい!？」

「あ……なんで……? 急に、眠く……」

彼女の新緑の瞳は半ば閉じられている。リラは必死に抵抗したが、すぐに眠気に取り込まれてしまった。とっさに伸ばしたラディの腕に抱かれるように眠りに落ちる。

片腕でリラを支え、もう一方の手で剣を抜き、ラディはあたりに視線をやる。

迂闊だった。四方に気配がある。今の今まで気配を隠してのだから。すぐ近くまで来ている。畜生と、内心歯噛みした。いつもならいくら相手が気配を消しても分かった。それくらいラディの感覚は鋭い。なのに気付けなかった。

やはり負傷と疲労のピークが感覚を鈍らせているのだ。

……あのじじーも来てるな……。リラが急に眠りに落ちたことでその予想もついた。先程のように逃げられないように、まずリラの行動を封じた。これでは自分が道を切り開いて姫を逃がすという手は使えない。

絶体絶命だった。そこかしこに影が現れる。完全に周囲を囲まれている。

ゆつくりと近づいてくる騎影があった。乗っている男には見覚えがある。反乱の主犯格、グローネス公爵。

笑っている。揺るがない勝利を確信している笑みだった。それは同時にラディの敗北と、リラの絶望の未来を意味している。

「小僧、姫を渡してもらおうか。お前のような下賤の者が神聖なるリラ姫に触れるなど許されぬこと。姫の御身けがが穢れるではないか」「穢そうとしているのはどっちだとラディは思った。グローネスは見るからに好色そうな中年男だ。地位、金、権力がなければ女性には見向きもされまい。外見だけではない。反乱を起こすような男だ、内面も歪んでいる。」

悪政を強いる王に罰を下し、自分が善政を　　という反乱ではない。善政を行う王に成り代わり、私欲の政を行うための反乱だ。精

神の芯から腐っているのだろう。哀れと言えば哀れと言えるかもしれないが、そう思っただけでやる義理などない。

「さあ、姫を渡せ、小僧」

グローネスの声で刺客たちがじりじりと包囲を縮めてくる。怪我を負った体で、眠ったりリラをかばいながら突破するのは不可能だ。

今のままでは。

まだテはある。厄介なことになりかねないテだが。

ラデイが一番嫌う事態になりかねない最後の手段。

だがそれは眠ったりリラを放り投げてできる手ではない。せめて彼女が起きていれば、その手を使って逃れられた。ジレンマに陥ってしまう。剣を構え、刺客たちを睨みつけているが進退窮まった。向こうもこちらの強さは分かっているためそう簡単に仕掛けてこない。膠着状態だ。

「ええい！ タタラ、なんとかしろ！」

業を煮やしたグローネスが傍らに控えている老人に怒鳴った。

「本当に童とは思えぬわ。そこらの騎士よりよほど使える」

老人はそう言って笑った。グローネスがハツとする。もし、この子供をこちら側に引き抜けば、配下にすることができたならば。欲の深い公爵はそう考えた。

「だがのう……この童、幼すぎて欲というものを知らぬ。金も地位もいらぬと言いおった。真、惜しい話よ」

タタラは呪文を唱え始める。

「殺すのか？」

と、グローネス。老人は応えず呪文を続ける。阻みたくてもラデイの周りには刺客が輪を作っている。貧血の収まっていない体ではリラを支えているのも辛かった。彼女を放り投げて最後の手段を使うこともできない。投げられる武器もない。睨みつけることしかできなかつた。

「……姫をその童から離せ。童はもう抵抗できぬ」

その声にラデイは自分の動きが封じられたことを悟る。いくら力

を入れようが、指先一つすら自由にならない。かろうじて声を絞り出す。

「……じじいつ……てめえ！」

「動けぬじやろう？ 所詮剣は魔道には勝てぬ」

老人は刺客たちを押しつけ、少年の間近に来た。ロープの内側から、曲がりくねった形の短剣を取り出す。

「悔しかろう、憎かろう。わしを恨め、わしを憎め。だがお前が助かることはあるまい。竜聖母のもとで眠るがよい。いるかどうかもわからぬ神のもとでな」

刺客の一人がリラを抱えた。タタラはそれを見て思いついたように指を鳴らした。

途端リラは目覚め……驚いて暴れる。

「何よ、誰、あなた！？ ラディツ、ラディは！？」

必死で暴れるが、屈強な男にかなうわけもなく、たやすく押さえ込まれてしまう。

「ホツホ、元気な姫様じゃ。見なされ、姫。そなたを護ろうとした童の末路を」

「殺すのか？」

再度のグローネスの問いに、振り向かず老人は答える。

「生かしておけぬ。欲を持たぬ真実を知る者じゃ、御することは不可能。あきらめなされ、グローネス公」

言われてグローネスはそれもそうかとあきらめた。欲望のままに生きている人間にとって、欲を持たない人間は邪魔でしかない。たとえ配下においても安心できぬ。

「わかった。おぬしに任せる」

「やめてっ！ ラディに何かしたら許さないわよっ！」

悲鳴のようなリラの声に、タタラは薄い笑みを浮かべただけだった。とても邪悪で醜怪なものだ。

「ずいぶん邪魔をしてくれたからのう……そう簡単には楽にしてやらぬよ」

身体の動かないラディに、タタラはゆっくりと短剣を向ける。動けないものをいたぶるのが、老人にとって最上の快樂のようだった。最低の人種だ。

「心臓がよいかのう」

鋭い短剣が、少年の胸に当てられる。ちょうど、心臓の真上だ。

「やめてっ!!」

リラの悲鳴すら、老人には心地よいようだった。それが悲痛であればあるほど、強ければ強いほどに。

ラディは目の前の醜怪な老人を睨みつける。歪んだ意思を跳ね除けるような強い視線だ。

自身に迫る危機などものもしないその強い力。老人とは対極にあるもの。

「気に食わぬ……!!」

この期に及んでもラディは命乞いなどしなかった。純真に、まっすぐに、タタラを睨みつけている。老人は嫌悪した。対極にあるものだからこそ、嫌悪も強い。

ねじ込むように短剣が突き刺された。老人の嫌悪を表すかのように、つば近くまで埋め込まれている。短剣とはいえ、刃の先は心臓に達しているだろう。

「……っ!!」

ラディが崩れ落ちるように倒れる。

「……!! いやああああああっ!!」

信じられない思いで、リラは悲鳴を上げた。

「すぐには死なぬ。その剣には呪いがかけてあるのでな。後三刻は苦しもうぞ。たっぷり苦しんで死んでゆくがよい……」

ホッホッホとタタラは笑った。その声が渦を巻き、泣き叫ぶリラを包み込む。

自分が泣いていることにすらリラは気付いていなかった。ラディの名を呼びながら、狂ったように暴れたことも。

タタラの呪文によって、再び眠らされるまで、彼女はひたすらラ

デイの名を呼び、泣き続けた……。

抜けてゆく力。引いていく熱。急激に血が引いていく感覚。来襲する寒さ。呪いの力は死をはねつける。開放を許さない。意識を失うことすらも許さない。

ラデイは苦しきあまりに地面に爪をたてた。

呼吸もできない。ただ、苦しい。少しでも逃れようと仰向けになる。

イタイイタイ、苦シイ？ 突き刺さった短剣から、楽しそうな声がする。

死ンデシマエ。モットモット苦シンデカラダケドネ。

視界が真紅に染まっている。赤、紅、鮮やかな血の色。

死の輪舞のように、赤がくるくる回る。

オイデヨ、一緒二踊ロウ？

「……ふ、ざけんな……っ！」

まだ死ぬ気なんかない。渾身の力で短剣を引き抜こうとする。

呪いはそれを許さない。ストームが柄をくわえ、主の身から引き離そうとしても、嬉々として呪いの力は抵抗する。

悲痛な想いが、生きようとする執念が、ますます呪いを喜ばせる。

モットモット、モット抗エ。絶望ヲ味ワワセテアゲルヨ？

どうせ助からないのだから、足掻き^{あが}続けて絶望しろと。

貪欲に生きようとすればするほど、絶望は深く大量になる。

ラデイは短剣から手を離れた。伝わってきたものがある。

……それは彼のポケットから。

力ない腕を広げて、目を閉じた。

アキラメルノ？ ツマラナイ。呪いは彼があきらめたのだと判断した。だからと言って開放はしない。

いいや。ラデイは抗う。死ぬ気なんかない。あきらめない。

おれは、ぜったいにあきらめない。

待っているだけ。このままでは死ぬ。呪いという刃は引き抜けない。自分では。

「……かあさん」

かすれた弱い声に、応えるものがあつた。

優しく、ときに厳しく、暖かく大きな強い意思。

なぜ!? ソンナ馬鹿ナ! イナイハズ……存在シナイハズダア!

呪いが耳障りな声を上げて消滅する。

母性というもの。汚れを恐れず、包み込み癒し、そしてまた送り出すもの。

優しく見守り、温かく迎える。

誰もが求める還る場所。命を育み、生み出す偉大な場所。

母という存在……。

【……もう大丈夫……】

戦おうとする子供たちを、決して見捨てたりはしない。抗う強さを持つものを、無碍に扱ったりはしない。

「……おれ、行かないと……」

ラディはぼんやりと呟く。まだ身体は上手く動かない。それでも、行かなくては。

だつてきつと、彼女は待っている。

【いまはおやすみなさい。まだ、時間はある……】

何よりも信頼できるその【声】を、子守歌のようにしてラディは眠りに落ちる。

眠りに落ちるその寸前に、頭をよぎつたのはあのお姫様の泣き声。

必ず、助けてやるから……。

泣くなよ、と。

3・共に、過ごし・4（後書き）

何が起こっているのか。チビツコ剣士はさらわれた姫君を助け出すことができるのか？

4・共に、戦い・1

「御印みしるしがないだと!？」

貧相な口ひげの、さえない中年男が声を荒げる。その眼前には、脅えた表情の侍女たちが膝をついていた。

「まことなのか!? よく調べたのだろうな!」

「は、はい。間違いありません。御体のどこをお探ししても御印らしきものはございませんでした」

恐る恐る報告した侍女を、男は蹴りつけた。腰の装飾華美な剣を引き抜きつきつける。

「嘘はためにならぬ。命が惜しくはないのか」

青ざめ、震えながらも侍女は答える。

「わ、わたしは嘘をついてはおりません。御印はほんとうにどこにもお持ちではありませんでした」

男は無言で剣をその侍女の喉に押し込んだ。目を見開いたまま、侍女はごぼりと血を吐き、倒れる。血にぬれた剣を、ほかの侍女に突きつけ、男はなおも言った。

「このようになりたいか」

目の前で倒れ、絶命している女を踏みつける。

「死体になりたいものは嘘をつき通せ。私が欲しいのは御印があったという報告だけだ」

侍女たちは震える声で申し立てた。自分たちは嘘などついておりません、御印は本当になかったのです、と。十人近くの侍女の申し立てだ。目の前で一人殺されているのを見て、なお嘘をつくとも思えない。

「……よかろう、あくまでも嘘をつくというのなら、この場で皆斬り捨ててくれる!」

男は信じない。激情に駆られ剣を振り上げたその時、

「……嘘はついておらぬようだ」

部屋の隅で影が動いた。漆黒のローブをまとった老人がそこにいる。

少しも動かず、呼吸すらしていないと思わせるくらいにじっとしていたため、影とも見間違えるような老人。

「落ち着きなされ……御印があるかどうか、姫君自身に問えば良いこと」

一滴の好意すら感じさせない声だ。

「……だが、姫はまだ術の中におるのだらう」

男は傲慢な態度を少し改め、そう聞き返す。ホッホッホ、老人は奇妙な笑い声を上げ、

「術などわしの指先一つ、一声でどうにでもなるもの。魔道というものには困難に見えて簡易なもの。用意に見えて至難なもの。公が気になさることはありますまい」

「そ、そうか」

男は明らかに老人を恐れていた。それを悟られぬようにわざとらしく咳払いをして、剣を納める。

「では、姫のご機嫌を伺いにゆくとするか」

ギクシヤクと歩き出したその後、老人が続く。

重い音を立てて扉が閉まると、侍女たちは泣き崩れた。

「ああ……姫様……お可哀想に……」

「なんてこと……公爵様がこんなことをなさるなんて……」

静かな泣き声はやがて祈りへと変わった。

「竜聖母様……どうか姫様をお護りください……」

竜の大陸、竜の国、ファージと呼ばれる大きな国で、反乱が起ったのはつい昨日。

『竜聖母』の加護を受けるといわれるこの国を、汚そうとする私欲の者。

反乱の首謀者は、公爵位を持つ貴族、グローネス公。好色で名高

く、前々から美しい姫を手に入れたいと思っていた貧相な口ひげを生やした中年男。

だが、この男だけでは反乱は成功しなかっただろう。何度もの襲撃をもとせず、姫を守り抜いた剣士がいたからだ。

邪魔で仕方なかったその剣士を排除したのは老人タタラ。得体の知れぬ不気味な老人は数少ない魔道使いであった。強力な力を人を救うためにでなく、己が欲を満たすために動くグローネスに貸し与え、老人は剣士を害した。邪魔はもうない。

反乱者たちはまんまと近隣一といわれる美姫であり、次代の王に与える証を持つ姫君を手中におさめたのである。

あとは王の証となる『竜聖母の御印』といわれる指輪を姫から奪うのみ。

栗形の青く美しい貴石のはまった指輪。王となるものを自ら選ぶと言い伝えのある指輪。

だが、そんな言い伝えなど反逆者たちは信じていない。指輪は指輪、持ち主の指を飾るのみ。選ぶことなどできはしない。

『竜聖母』など存在しない、と。

捕らえられた姫の名は、リラ・ファージ・フォルシア。

亜麻色の髪、新緑の瞳の美しい姫君は悲しみの中にいる。

彼女を護ってくれていた剣士は、彼女の目の前で害されたのだ。

動きを封じられ、胸に短剣が突き刺さるのを、姫は見ている。やめと叫び、彼の名を呼び、泣きながら。

無力な姫には何もできず、ただ、泣きわめき　そうして彼女はタタラの呪文に捕らわれ、眠りの鎖に繋がれていた。

……暗い。何も見えず、何も聞こえない。誰もいない。たった一人、闇の中にいる。

怖いとは思わなかった。暗闇の中、リラはただ泣いている。

ごめんね、ごめんなさい。私、お礼も言えなかった。

護ってくれた剣士。強くて勇ましく、自分の命も顧みずに彼女を助けてくれていたのにありがとうの一言さえ言えなかった。

深々と突き刺さった刃。広がる赤。

あの傷ではもう……二度と逢えない。そのことが悲しい。死んでしまった。だから苦しい。

どこの者なのか、素性も分からない相手にこんな想いを抱くとはもう一度逢いたい。どうして？ 殺されたのに。

それでも、もう一度と願ってしまう。

会ってどうする？ 分からない。ただ会いたい……。

繰り返し繰り返し思う。願う。祈る。

生きてさえいてくれれば。

絶望が囁く。あの傷では助からない。希望が励ます。大丈夫、きっと生きている。

御印が、竜聖母が守ってくれる。

彼に預けた御印が、きつと彼を守ってくれる……今はそのことを祈り、願うことしかできないけれど。

ああどうか。お護りください竜聖母。彼を、彼の命を、その小さな剣士を。

どうか どうか、助けてあげてください……。

【 1 】

遠く、誰かの声がした。大丈夫と聞こえた気がする。

大丈夫、だからあなたも負けないで、と。

とても優しく聞こえたその声が、リラの心から絶望と悲しみを拭き去る。

そうよ、負けてはいられない。私も戦わなくては。

私にできることを、しなければ。

彼が帰ってくることを信じよう。待っているから、必ず帰ってきてくれる。

信じると決めた。彼のまっすぐな金色の瞳を見つめたときにそう決めた。

【……決してあきらめないで……】
声は、リラの想いに微笑んでいるような気がした。徐々に遠ざかっていく。

いや、遠ざかっているのはリラのほうだ。

……目覚めようとしている。眠りの鎖が戒めを解こうとしている。目を開ければあの反逆者たちがいるのだろう。リラの目の前で、卑怯な手を使って彼を刺した、絶対に許すわけには行かない相手。優しい声は負けないでと言った。リラには負ける気なんてない。戦って戦って、その卑怯者たちに思い知らせてやる。

世間知らずの姫だって、噛み付いたり引っかいたりするくらいできるんだから！

いくらだつて抵抗してやる。わがままで世間知らずでも、それくらいはできる。

分不相応な罪を犯したと思ひ知らせてやる。

それができなくても、隙があつたら逃げる。力を得て、彼を刺したことを後悔させてやる。

覚悟を決めて、彼女は眠りから覚め　視認するなり、ひっぱたいた。

「近寄らせないでいただきたいですわね、その汚らしい顔を」

叩かれたグローネスはしばし呆然とし、次いで真っ赤になった。

威圧的に接しようとしていたところに先手を打たれたのである。脅えているか弱気になるかしているだろうと予想していた姫は、変わらず強気だった。

ほう、とタタラが声を上げた。

「まこと、気の強い姫君じゃ。美しいのう。生氣溢れたその美貌、魔道に使えばさぞ喜ぶ魔物があるじゃろう。だがイケニエにするわけにはいかぬ。グローネス公の妻となる姫じゃからのう」

にたりと邪悪な笑みを浮かべて老人は残念そうに言う。この老人

にとってリラは違う意味で魅力的なようだ。

背にじわじわと這い上がってくる恐怖に必死で耐え、表には出さないようにしてリラは視線を鋭くした。

「美しさを認めるだけの美観はあるのですね。歪んだものでもあるようですが。グローネス卿、この様な者と手を組むとは卿は心も歪んでいるようですわね。外見と同じように」

最大限の侮蔑を込めて、厳しい視線を向けてやる。グローネスはたじろいだ。娘のような年齢の姫君に迫力負けしている。反逆者としての勝者が、囚われの身の敗者に負けているのだ。所詮その程度の男である。

本当に恐ろしいといえるのは、ローブの老人だろう。魔道の使い手のみならず、邪悪な意思を持つもの。

老人に視線を向けられるだけでリラは恐怖感を抱く。存在自体が悪に思えた。

まるで悪意の塊。吟遊詩人ならこう例えるだろう。

『古に滅んだ魔王のかけら』。存在することすら許されないはずのもの。

「……あなたは、人間ですか」

視線を向ける。グローネスと違って老人はひるまない。ひるむどころかまるで意に介さない。

「わしが人間以外に見えるのですかな、姫様？ 魔物は知恵がない。魔族は遙か昔に滅び去り、神もこの地には存在しない……」

そう言つてホツホツホと笑った。

「……そんなことはどうでもよい。姫、御印はどこですか。私にはあれが必要なのだ。ファージを守るために、私が王となるために」
我に返ったグローネスが言ってくる。リラは怒りを覚えた。

「守る、ですって？」

愚劣な反逆者が、神聖なるファージを守る、と。

何を守るのだ。殺し、奪い、そして手にした王国を？

……いいや、誰が認めるものか！

「あなたは王にはなれないわ」

リラは毅然と言い放つ。渡すわけにはいかない。

『御印』を、この国を。

汚させるわけにはいかない。

ファージに暮らす国民を、この国に生きる人たちの幸せを。

民の幸せを壊すような真似を、ファージの王女がしてはいけない。

『下の者を守ることも考える』

彼はそう言っていた。自分も今はそう思う。

間違ったことはできない。たくさんの人を不幸にしないために。

『御印』を彼に預けてよかった。心底からそう思う。

目の前のこの男に渡ることはない。今姫の手の中に『御印』は無いのだから。

「竜聖母の加護を忘れた愚かなあなたを、御印が選ぶわけがありません」

渡さない。この男には、絶対に！

決意を込めた新緑の瞳は揺らぐずにグローネスを見据えている。

強い反発を、グローネスは感じ取った。姫は決して公のものにはならないと全身で意思表示している。

若く美しい姫、決して手にはいられないと思っていた王女。

愚鈍なカイヤルカの王子を廃して、ようやく己のものになったと思っていたのに。

リラは知らない。人は手に入らぬものほど欲するのだと。

それが人の欲望。消えることのないもの。愚か極まりないが、それがなくなれば人は人でなくなるのだろう。

そして、欲も度を越えるとそれもまた人ではなくなる。

グローネスの欲はすでに暴走を始めている。一度暴走し始めたものは止まることを知らない。

「御印が王を選ぶというのは絵空事。ただのまやかしだ。竜聖母など存在しない。姫、いやリラ、どうしても御印を渡さぬというのなら結構。どう足掻いてもそなたは逃げられぬ。婚礼を挙げたあとで

ゆっくりと御印をいただくでしょう」

それが狂気と呼ばれるようになるまで、さほど時間はかからない。「婚礼は正午に始める。それまで祈るといい、竜聖母の加護とやらを」

公爵は姫を見る。美しい。この姫君がもうすぐ自分のものになる。「そうそう、最高のドレスを用意してある。美しい花嫁を見てさぞ竜聖母は喜ぶであろう。できれば現王にも見ていただきたかったが、それは無理だろうな」

グローネスは笑った。勝利と欲望にどっぷりと浸かった醜い顔で。浅ましいものだった。リラは嫌悪に駆られる。

人はこれほどまでに醜くなるのかと思った。

こんな男の花嫁になるのは死んでもいやだ。

けれど彼女は死ぬわけにはいかない。負けるのは死ぬよりもいやだし、何よりも待つと誓った。

小さな剣士の帰りを。

グローネスとタタラは勝ち誇りながら出て行った。扉にはしつかりと鍵がかけられている。

窓も同様だった。例え割ったとしても、ここはどうやら塔のてっぺんで飛び降りるわけにもいかない。

一応覗いてみたが、下に衝撃を和らげるようなものは何もない。

以前城から脱出したときのように飛び降りても、まず死ぬ。ここから脱出は不可能だろう。

リラは戻ってベッドに座った。手を合わせて誓う。

負けない。負けるもんですか、あんな男に！

花嫁になんたりたくない。あんな男より、花嫁になるなら。

……姫君の頭に浮かんだのは、少年の顔。

「え、なんで!？」

リラは一瞬で赤くなった。動揺して固まっている。

ななな、なんでラディが? どうして!?

自分の考えに一人でうろたえている。

どういうこと!? 私なんでラディを思い浮かべるの! 彼はまだ子供じゃない!

あわて、うるたえ、でもリラは幸せだった。

ラディのことを思い浮かべ、考えるだけで不安と恐怖が吹き飛んでいるのだが、本人はそのことに気がついておらず、また、気も廻らない。ひたすらあわてて赤くなっている。恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

なんで? なんで!? どうしてラディがつ!?

うるたえているのに、不快感はない。三拍子王子やグローネスに比べるのも悪いくらいに、どきどき胸高鳴るくらいに幸せだ。

自分の考えに驚いているだけで、拒否してはいない。恋愛の経験など皆無なりらに、どうしてラディが思い浮かんだのか理解できてもないのだが。

両頬に手を当て、ひたすら赤面するだけ。

危機感は、なくなっている。不思議と安心していた。

ラディのことを考え、信じている。それだけで。

約束した。死なないでねと彼女が言ったとき、彼は大丈夫だよと答えてくれた。

だから。

絶望はしない。悲しみも忘れよう。彼は帰ってくる。生きて帰ってくる。

それだけを信じよう。

待っているから。帰ってきて。私のところへ!

そうよ、とりらは顔を上げる。待っている、信じている。小さな勇者、彼のことだけ。

帰ってくるわ……必ず!

強く、深くラディの存在はリラの胸に焼きついている。

それを感じたとき、姫の心にストンと結論が転げ落ちてきた。

……私、ラディのこと『好き』なんだ……。

なあんだそうかあと納得してから、リラは耳まで真っ赤になった。

『好き』!? 『好き』ってどういうこと!? ちょっと待って、だって逢ってからまだ……!」

一日たっていない。恋愛に時間の意味など皆無なのだが、初めての想いに戸惑う姫君は当然知らないことだ。

十歳よ十歳!? 六つ下! まだ子供! そりゃ王子は十歳上だったけど……六つ下くらい……なんてことない……? いえ、でもどこの生まれとかまつたく知らないし! そもそも私とどうこうなるような身分じゃない……のかしら……?

しばらく、ぐるぐるそんなことを考え込んでしまう。

結論は、かなり経ってから出た。

「好きなよ、しょうがないじゃない。好きになっちゃったんだもの! あんなに得体の知れない子供でも好きになったの!! もーっ、私のバカ!」

リラは一人室内でわめいた。

開き直りに近いが、こうと結論ができれば度胸もつくものだ。

「……何があつたって怖くないわよ。ドーンと来ればいいわ。なにがあつたって負けないから!」

呟きに、おずおずとノックの音がした。視線をやると、侍女たちが顔を覗かせる。

いつのまにか正午が近くなっているのだ。式の支度をするために着たのだろう。

「姫様……」

申し訳なさそうに、侍女たちは姫君の身支度をする。

「……申し訳ありません……逆らえば、私たちの家族まで殺すと……」

泣きながら。

「かまわないわ。謝らなくてもいい。大切な人を守るためなのでしよう? ね?」

責めることはできない。彼女たちもまたこの状況では無力だ。

「いいのよ。お願いだから誰も死なないで。これ以上人が死ぬのは

……いやよ

姫の優しい言葉に、侍女たちは泣くことしかできなかった。

4・共に、戦い・1（後書き）

自覚。そりゃあもう、惚れるでしょ（笑）婚約者がダメ王子だったのですものねー。

4・共に、戦い・2

やがて美しい姫が純白のドレスに飾られたころ、運命の時を知らせる鐘が鳴る。

鐘の音が示すのは絶望か、それとも一筋の光明か　それは竜聖母ドラゴンマザーにしか分からない……。

『竜聖母』を奉る礼拝堂。どこの城、街、村にも必ずある。人々はここで生まれ、ここで結ばれ、ここで死ぬ。子が生まれれば祝福を受け、好きな人ができればここで式を上げ、誰かが死ねばここで見送る。

さまざまな思いの集う場所。

だが、今この城の礼拝堂は婚礼の準備の真っ只中だというのに、暗く濼んだ雰囲気に支配されていた。

城の主のエオス王子はもはや亡く、王子の婚約者だったリラ姫を娶るのは、反逆者のグローネス公爵。

声を殺して泣く女達。屈辱にこぶしを握り締めることしかできない男達。

その中には、リラ姫の護衛のセリアもいた。彼女も捕まり、ケガのせいで命を奪われはしないまでも、武器を奪われて強引にこの場に出席させられた。

ああ、と彼女は歯を食いしばる。少年が殺されたという話は聞かされた。あれほどの腕前の剣士でも、魔道にはかなわず……姫の目の前で、最期まで姫を護り、殺された、と。

巻き込まなければ良かった。まだ十歳の子供だったのに。

ついてきてくれと誘ったばかりに、殺されてしまった。何の関係もない少年だったのに。

すまない、そう思う。未来ある少年だったろう。夢のある、将来あ

る……子供だった。

姫はどれだけショックだったろう。目の前で、子供が殺されたのを見て、穏やかでいられるほど冷酷ではない。ましてそれが、自分を護ってのことならば……なおさら傷ついたらだろう。

おいたわしや。

彼女たちの目の前を、純白のドレスに身を包んだ、敬愛する姫がゆっくりと歩いていく。

本来なら、もっと華々しく、そして幸せをお祈りするはずの姫の結婚式。

敬愛する姫君が、卑しき反逆者の妻となるべく身を進める。

「……姫様……！！！」

悔しかった。なにもできない。武器もなく、礼拝堂の中も外も、グローネスの兵が固めている。どこかに魔道使いもいるのだろう。抵抗もできない。

「姫様……」

悲しみと嘆きの声。怒り、絶望。

何故こんなことがまかり通るのか！

ああ、あの美しい姫君が、神聖なるファージの王女が、汚らわしい男の妻となるとは！

竜聖母、竜聖母、どうかこの汚らわしい男を罰してください。美しい姫君をお助けください。

祈りと願い。だが応えるものもなく、ただ嗚咽が響く。

反逆者、グローネスは祭壇の前にいる。式にふさわしい、きちつとした礼服も、どこか滑稽だった。どうみても純白のドレスの王女に似合う男ではない。

美女と野獣 いや、美女とドブネズミといったところか。

清く、神々しいまでの美女、リラを手に入れる喜びで、グローネスは醜い顔をさらに醜く好色に歪んだ笑みを浮かべている。

リラは目を逸らさない。薄いベールの下から、まっすぐにグローネスを睨みつけている。

従うものですか、お前などに！

彼女の心に脅えはない。負けるものかという想いと、あとは、ラデイのことだけ。

祭祀を務める司祭が、グローネスの兵に押され、屈辱に満ちた表情で儀式を始める。

誰も、何も言わない……言えない。残された人数で、武器もなしに姫を奪還することなどできはしない。

泣きながら人々は祈り、願う。

竜聖母よ、どうか、姫をお救い下さい！

式は止まらない。司祭が言う。

「姫様、御印を夫となるべきグローネス公に……」

目は渡さないでくださいと言っている。しかし口は式を進める。

「……お渡し下さい……」

リラは黙っていた。『御印』はない。ラデイに預けたままだ。あつたとしても渡す気など毛頭無い。

しばらくそうしているとグローネスがイラついた声を上げた。

「それは後でいい！ 進めろ！」

司祭は少しホツとして式を進めた。あとはただ、終わらせるだけだ。リラも少なからず安堵した。誓いの接吻くちづけというものは、王族の式にはない。

だがグローネスはそれを許さなかった。リラを慕う人々の前で、リラに接吻し、美しい姫を手に入れたことを思い知らせたかったのだ。

「司祭、御印の受け渡しの替わりに、誓いの接吻を交わすことにしようではないか」

「！」

ざわめきが起こった。司祭も驚き、せめてそれだけはと必死で抵抗を試みる。

「しかし、王族の式に接吻の儀式はありません」

「御印がないのだ。リラ姫の唇は御印にも勝ろうぞ。婚姻の証には

ふさわしい」

にやりと笑うグローネス。リラの背に鳥肌が立った。

「冗談ではない。この男と接吻するならこの場で自害したほうがマシだ。」

ラディを待つのに死ぬわけにはいかないから自害はしないが、とにかく接吻なんて死んでもイヤだ。

思わずブーケをグローネスの顔面めがけて投げつけた。

「あなたとそんなことするくらいならまだ死んだほうがマシよッ！」

ついでに蹴り上げた。不意打ちだったのだろう、グローネスはまともにくらって転がる。

兵たちがうるたえ、リラを押さえつけようか迷ったとき、ふいに笑い声が礼拝堂に響く。

「おみごと。さすがだヒメサマ」

その声に、リラは勢い良く振り返った。セリアも耳を疑いながら視線を向ける。

礼拝堂の扉がいつの間にか大きく開いていて、そこに小さな人影がある。

何かを考える前に、走り出していた。ベールが取れたのにも気がつかないくらいに必死に。

できる限り早く、走って。

「ラディッ！！」

抱きついた。いや、しがみついたといったほうが正しい。二度と離れないと言わんばかりにしがみついた。

さすがに驚いたのか、ラディも硬直している。

「……………あのー……………ヒメサマ？」

恐る恐る声をかけたりしている。珍しい、とセリアは思った。あの物怖じしない少年にしがみついて泣いている姫も、わがままな姫

にしがみつかれて動揺している少年も。

ぎつちりしがみつかれ、その上でわんわん泣かれて、ラディ・ス
ポット十歳、すさまじく眉をひそめている。

並みの騎士など遙かに上回る腕前の剣士で、何者にも物怖じしな
いと思われた少年は、女心には年相応に疎かった。

おまけに、泣かれると弱い。相手が女、子供、老人ならなおさら
で、リラ姫は女性だ。

「……ヒメサマー？ ……おーい」
ほとほと困り果てている。

そこでやつとリラは我に返った。少し赤くなってあわてて離れる。
「泣くことねーだろ。どしたんだよ、そんなに怖かったのか？ だ
いじょうぶだよ、おれがきたから」

女心に疎い少年はちよつと笑ってそんなことを言っている。リラ
が泣いたのは、彼が戻ってきてくれて嬉しかったための、うれし泣
きなのだが、少し恥ずかしくて言い出せない。

だからリラは頷いて花開くような笑顔を返した。

ラディがいる。生きている。帰ってきた！ だからもうだいじょ
うぶ。本当に何も怖くない。

強がってはいたが、やはりどこかで怖かった。でも今はラディが
いる。不思議なほどに怖くなくなった。

逆に怖くなつたのはグローネスのほうである。ラディが刺される
ところを見ていた彼は少年が生きていることに恐怖した。

短剣は鏢まで刺さっていた。どう考えても助かる傷ではない。一
晩で治る傷でもない。

それなのに少年は目の前に立っている。怪我など少しも負ってい
ないかのようにピンピンして！

4・共に、戦い・2（後書き）

お約束。やはり結婚式に奪い取りに来なくては！！

4・共に、戦い・3

「な、何故生きている!? 化け物が貴様!」

「しつれーな、誰が化け物だネズミじじい。てめーのほうがよっぽど化け物みてーな顔してるくせに」

けるりとしてラディはそう返した。明るい物言いに少し笑いかけ、リラはあわてた。

ラディが負った怪我のことを思い出したのだ。

「ら、ラディ! ケガ……ケガは!？」

「治った」

いつもながらの明快な返事である。

「な、治ったって……」

彼が刺されるところはリラも見ている。死に至るような重症だったと感じた。生きてピンピンしているのは嬉しいが、半日で治る傷でもなかったように思う。

それとも意外と浅かったのかしら? と首をかしげる。

グローネスと違ってリラは剣など扱ったことがないので、負傷の具合もよく分からないのだ。

治ったっていうなら治ったのよね、良かった……。素直に納得し、安心した。何者であったって構わない。

ラディがいてくれればいい。『好き』と自覚した今は、信じるだけだ。

ラディを、彼の勝利を。

小さな剣士は美しい姫を背にかばい、剣を抜いた。不敵に笑って宣言する。

「さあ、反乱はもう終わりだ。これ以上好き勝手はさせてやらん。
竜聖母ドラゴンサマにサマしかられるゼネズミじじい。あきらめる。お前を待ってんのはオヒメサマとの新婚生活じゃなくて牢獄だ」

グローネスの兵が剣を抜いた。その数にもラディは動じない。

「命捨てるつもりならかかって来い。言つとくがおれは最っ高にキゲン悪いぞ。なんたって昨日刺されて死にかけたんだからな。今日は一切手加減しない。かかってくるなら確実に死ぬと思え」

驚いたのはグローネスだけではない。リラやセリアも驚いた。彼女たちはラデイの強さを知っている。あれで手加減していたのかと驚いたのだ。

十人単位の刺客を一人で突破する 手加減して！

グローネスの恐怖はますます深くなった。もはや自分は助からない。そんな予感ばかりが頭をかすめてゆく。

反乱は死刑の重罪。どうあがいても助からない。

「か、かれ！ あの小僧を殺すのだ！！」

少年を殺すしか、生きる道はない。裏返った声でグローネスは叫んだ。

「往生際が悪いぞネズミ！ あきらめるんだな！ 犯した罪の重さは変わらない！！」

ギンツと耳障りな音をたて、刃がひらめき、打ち合う。

「やめてください！！ ここは聖堂なんです！！」

司祭が悲鳴を上げた。ここは神聖な礼拝堂。血で汚されるようなことがあつてはならない。

ラデイもそれに気付いた。

「……斬るのはマズいな」

眩くなり、切り結んでいた兵を蹴り飛ばして距離を取る。

周りを囲む兵たちを見回し、

「おとなしく降参する気ないか？」

子供にそう言われて、従う者はまずいない。兵たちも激昂した。

彼等はラデイがなんなのか、知らない。そして、ラデイにも、もう自身の素性を隠すつもりはなくなっていた。

ざすっ！ 何を思ったか少年は突然剣を床に突き刺した。

武器を手放したようなその動作に、兵たちは笑い、リラは驚き、グローネスは喜んだ。

「ふ……参ったというわけか？　ならば手をつけて私に助けてくださいと言ってみる！」

降参の意を示したかと思っただのだ。グローネスだけでなく、見ていた誰もが、そう思った。

が。

「参った？　冗談。参ったって言うのはそっちだぜ」

不敵に笑ったまま、ラデイは突き刺した剣の柄を握る。

礼拝堂にいた者は音を聞いた。キィィィイというカン高い音。

その音はラデイの剣から発せられている。

なにか起こるのか、人々は目が離せない。魅入られたように。

そして、見る。少年の身体を、四肢を、額を、風が渦を巻いて覆おうとしているのを。

「手エついてあやまる準備しとけよ、ネズミじじい！」

少年の声が風を伴って走り抜ける。リラはその激しさに思わず目を閉じた。その瞬間、音も途絶える。何事が起きたのかと、目を開けた姫君の視界には、

「ラ……ラ……ラ……」

神々しく輝く鎧を身にまとった少年がいる。胸元には竜の紋章。

それはまるで伝説の中の存在のような神々しさ。

勇敢なる騎士^{ナイト}。

伝承歌に唄われし竜の騎士^{サーガ}

竜騎士！^{ドラゴナイト}

「ま、まさか……！」

セリアが声を上げる。

「本当に竜騎士だったの……！？」

小さな剣士の自己紹介をあの時笑って聞き流した。冗談だと思っ
ていたからだ。

けれど、それは真実だったのだ。驚きながらも納得があった。竜
騎士ならあの強さも納得がいく。

伝承によると竜騎士は一人で千の兵に匹敵するほど、強いのだ。歓声が上がった。

伝説の中の産物だと思われていた竜騎士がいる！

姫を護り、卑しき反逆者に立ち向かう勇者が！

その事實は、人々に勇気を与え、グローネスには恐怖を与えた。

「そ、そんな馬鹿な！ 存在するわけがない！ ど、竜騎士など伝説の中の産物なのだっ！ こここ、殺してしまえっ！」

兵もさすがに怖気づいている。ラディは構わず剣を引き抜き、振るった。風が唸る。

キキーン！ 音を立てて彼と姫を取り囲んでいた兵たちの武器が折れた。刃が届く距離ではないのに人体には傷もつけずに、少年竜騎士は武器を叩き斬ったのだ。

「な……！？」

誰もが息を呑んだ。何が起きたのか、分かっているのはラディだけだろう。

兵士たちは動けない、圧倒的な力の差を感じ取っている。後ろでグローネスがなおもあかくように叫んだ。

「よ、よく見てみる！ 竜騎士なら竜ドラゴンを連れているはず！ その小僧は竜など連れていないではないか！」

「呼んでやろうか」

兵士たちの敵意が霧散したのを感じ、ラディは剣先をグローネスに向ける。公爵の希望を断ち切るようにさっくりと言いつつ切った。

「すぐ外にいるぞ？ おれ相棒に乗ってここまで飛んできたんだからな」

その言葉が決定的なものになった。グローネスの兵たちが一斉に武器の切れ端を捨てて両手を上げたのだ。

勝てるわけがない。竜騎士は竜聖母が認めし勇者だ、ただの兵士が対抗できる相手ではない。

「……さあて、と、どうするネズミじじい。手えついて謝るか？」

グローネスは酸欠に陥ったかのように言葉もない。腰が抜けたの

か床にしりもちをついてずりずり後ずさる。薄っぺらい勝者の自身と余裕は吹き飛んだ。周りに味方は誰一人いない。視界内には。そこで気付いた。あの老魔道使い、タタラがいないことに。

「た、タタラ！ どこにおる！？ 助けてくれっ！」

「あ……そう言えはいないわ……どこにいったのかしら」

少し不安げな表情になり、リラは呟く。何せ昨晚ラディを刺したのはあの老人だ。魔道の力の前では、いかに竜騎士であろうと無力になるのではと思われた。

「タタラッ！ 私を見捨てるのか！？」

瞬間、ラディがあらぬ方向に剣を振るう。突然現れた大きな火の玉が真つ二つになり、竜巻に巻き込まれて炸裂する間もなく消滅した。

「ふいうちはおれには効かないぞ、じーちゃん」

ラディはあわててもいない。平然と、視線を部屋の間に向けた。

そこには今湧き出たかのように、黒いローブ姿がある。

「ふむ、風を使うか……面白い」

タタラはラディが何をしたのか理解したようだ。魔道に通じるものがあるのかもしれない。

力は通じていても使う人間が内包しているものは相反している。

ラディは歪みなく、まっすぐで、タタラには歪みしかない。

「だが、わたしには劣る」

タタラはそう断言した。ラディがやったことを見て、自分には劣る、と。老人の自信満々の言葉に、グローネスは己が再び優位に立ったと思った。

リラは一気に不安そのものの表情になり、ラディの肩に手を置いた。いまは鎧に包まれた小さな肩。かすかにその手は震えている。

また、失うようなことになったら。その恐怖が襲い掛かってくる。彼がやられてしまったら、その場で舌を噛み切ろう。リラはそう決意する。ラディが死ねば希望は絶たれる。生きていたいという思いも消える。

そのくらい大切な人に、いつの間になつていた。

姫君の想いを知ってか知らずか、ラディは肩に置かれた細い手に自分の手を重ね、言う。

「おれを信じる」

迷いない声。脅えも恐怖も畏怖もない。絶大な自身が彼の声にはある。

強い 強い光。天空にある太陽のように。

大丈夫、そうリラは感じた。ラディは必ず、勝つ。頷いて、少し離れた。

セリアが駆け寄り、姫を護るように寄り添う。

あとはただ、信じて祈るのみ。

人々の祈りの声が礼拝堂に響く。

竜聖母よ、勇敢なあなたの騎士に、勝利という名のご加護を！

「くだらぬ」

老人は言い捨てる。

「神などいない。竜聖母など存在せぬ。何故それが分からぬのだ」
それを聞いてラディは思い切り眉をしかめた。剣を担ぐようにして老人を見る。

「んじゃおれはなんだ。いちおー竜騎士つてもんなんだけどな、じーちゃん」

「名乗るはたやすい。偽るのもまた然り。魔道ならずも手品でよいのだ。愚かな人間の信用を得るのは子供でもできること……そうではないか。童？」

「人を小馬鹿にするのが趣味らしいな、じーちゃんは」

うんざりだ、と表情で告げているラディ。この老人は竜聖母を信じていない。存在しないと。だから竜騎士も存在しない、と。

「じーちゃんの言うとおりなら、おれは天才的な詐欺師で手品師だらうな」

目の前にして、それでも、ないと言う。盲目的に自分の考えを通そうとしている。

「毒にしかならない芝居はたくさんだ。化かしあいもな。さっさと決着つけようぜ、魔道におぼれた愚か者！」

少年の声に老人の表情から笑みが消えた。黒いフードの下から生氣のない目がじろりと少年竜騎士を睨む。

「……たかが竜騎士ごときが……わしを愚か者と言うか。魔道の力を知らぬ者が……わしを愚か者と！」

熱に浮かされたようにぶつぶつと呟く。その様子が周囲に理解を強いた。

狂っている。魔道という異なる力を得た故か。

人のためでなく、自分の欲のためにもっと強い力を求め、欲して狂った。

力を得るたびに欲も強くなる。もっと、もっと、もっと強い力を

麻薬のように。

拳句自分の欲に取り込まれた愚か者。待っているのは破滅なのだと、果たして気付いているのだろうか。

手に入った力を試したくて使いたくてグローネスに力を貸したのだ。平和な世界で、強力な魔道など必要ないなら、必要になる状況を作り出すのみ、と。

「……殺してやる」

狂気に浸った魔道使いは、否定されることを許さない。

「殺してやるぞ竜騎士……！」

真冬の吹雪のように冷たく激しい怒りの声だった。リラは己の身を抱きしめるようにしてその声に耐える。彼女の視線の先には小さな竜騎士の背。

知らず手を合わせて祈っていた。強い想いを込めて。

お願い、勝って……死なないで！

【……………】

誰かが、大丈夫と言った。間違いなくリラに、信じて、祈っていて

と。

その声はラデイにも届いていた。ああそうか、と彼も思う。
……来てくれている。

少年竜騎士の口元には、小さな笑みが浮かぶ。

これはなんとしても、負けるわけにはいかないな。

頭上に魔力が収束するのを感じる。今のラデイには感じ取れる。

鎧をまとった彼に力の制限はない。全力で戦える。

一瞬後、彼に向かって巨大な火球が振り落ちた。

「効かねえって……言っただろ！」

剣を振るいもしなかった。ラデイの声とその意思だけで、風が巻き起こる。

彼の力の源、その具現。

豪風が火球を押し包み、縮ませていく。消え失せるまで待つこともない。

ガッツ！ ラデイは床を蹴る。

剣は魔道には勝てないと、勝ち誇っていた老人がすぐ目の前に近づいた。

阻むものもかばう者もない。誰も老人の周りにはいない。

「くあああつ！ 炭となれいっ！」

目前に炎が吹き上がる。魔道におぼれた老人の、最後の抵抗だ。ラデイはよけなかった。

そもそもかわす必要も最初から彼にはない。防いだのは、ほかの人間を巻き込まないように気を使っただけの話だ。

老人は気がついていない。

自分が『誰を相手にしている』のか。

「ラディッ！」

リラが悲鳴を上げた。かわしきれず、まともに当たると見えるの
だろう。

炎の柱に少年竜騎士はためらわず突っ込んだ。

「いやあああああ！」

姫の絶叫が響く。

4・共に、戦い・3（後書き）

狂った魔導使いVSチビツ子竜騎士。

4・共に、戦い・4

タタラは勝ったと思った。この炎で、竜騎士を名乗る小僧は炭になる。

「……残念」

火柱をボツと突っ切って、ラディは笑みを浮かべていた。髪の毛一本も焦げていない。

「!?!」

硬直するタタラに、少年は歩み寄る。

「魔道使いのくせに学習が足らん、今のおれには魔道なんて通じねーんだよ」

「た、たとえ竜騎士だとしても、魔道が効かないなど……そんなわけが!」

あるはずがない! タタラの目の前に、老人にとって得体の知れない存在となったラディが立つ。

「ふつーの竜騎士ドラゴナイトなら効いただろうな。でも、おれは別なんですね」

その言葉が指す意味。思い当たってタタラは愕然とする。それが事実ならば、自分の目の前に立つこの少年は、この少年を敵に回した自分たちは!

「ま、まさか!」

「そう、そのまさかだよ。残念だったな。ふつーの竜騎士が相手だったら勝ててたのにな」

ラディは剣を振り上げた。動揺している老人に向けて、そのまま振り下ろし、剣の平で脳天を殴る。

「ごいん。いい音がした。」

ばたりと倒れた老人を見下ろして、次にグローネスを見て、ラディは意地悪く笑ってみせる。

「手、ついてみるか？ 竜聖母に お前の信じていない実在している神に」

剣を突きつけ、立ち上がるように指示する。
「外へ出る。竜聖母が待っている」

礼拝堂の外には竜がいた。薄い緑色の竜が一頭。包囲していた兵たちを威嚇して近寄らせないようにしていたらしい。出てきたグローネスをもすごい勢いで威嚇する。 竜の咆哮にグローネスは腰を抜かした。

「あー、ストーム。もういいぞ、ごころーさん」

ラデイが寄っていくと、うって変わって機嫌よく、くるるうと鳴いた。甘えるように彼に鼻先を摺り寄せる。額にある紋様が、寶石のようで美しい。中心に翠玉色、その左右に羽のような形をした真珠色の紋様がある。よしよしと撫でてやるラデイに、リラは呆然と問いかける。

彼はこの竜をストームと呼んだ。それは彼の愛馬の名ではなかったか？

「ら、ラデイ？ ……ストームって……」

「ああ。ストームだよ。ほとんどの姿はこっちなんだ」
相棒のストームは実は竜だったというわけだ。

「だって、だって馬だったんじゃないの!？」

「あー、知らないのか…… 伝承とかで聞いたことねえ？ 『祝福』
を受けた竜騎士の竜は自由に姿を変えられるって」

こともなげにラデイは爆弾発言を続ける。いともあっさりと言ったのけて、別にたいしたことではないと言いたげだ。

リラは固まった。

ラデイが竜騎士だというだけでびっくりだったのに、よりによって『祝福』まで受けた竜騎士だとは。

伝承の中でも少ない。赤子に与える祝福とは度合いが違う。多大

な力を与えられる『祝福』で、もちろん歪んだ人物に与えられるものではない。相応の強さだけでなく、ふさわしい心を持つ、勇者の中の勇者に与えられるものだ。

遙かな過去、魔王を滅ぼしたのもたしか『祝福』を受けた竜騎士だと伝承には伝わっている。

それならタタラの魔道が通用しないのも分かる。

『祝福』を受けた竜騎士　五千年に一人出るか出ないかといわれるような人物だ。

それが、目の前の少年。

ファージ国王でさえ、頭を下げねばならない人物だろう。

……叩いたこともあるし、お礼すら言っていないわ私……。

知らなかったとはいえ、ラデイに対してもものすごい態度を取っていたことにリラは冷や汗を感じる。

ラデイ本人は一向に気にしていないのだが、聞いた周りの者も硬直していた。

「ストーム、ちっちゃくなつとけ。みんなびびってる」

周りの硬直をそう誤解して、竜騎士は愛竜にそう促す。主に一声答えてストームは変化を開始した。

と言つてもストームの周囲に風が渦を巻き、姿を隠してしまったため、なにが起こっているのかはわからない。

風が収まったあとには、三十センチほどに縮んだストームがちょこんと座っていた。可愛らしい大きさになった竜は、ぱたぱたと主の頭に乗っかる。

「さて、と」

「ごそごそとポケットをあさってラデイは『御印』を取り出した。

「あ!？」

グローネスとセリアが同時に声を上げる。リラが持っているばかり思っていた国宝が、無造作に少年のズボンのポケットから出てきた。

「姫様……預けてらしたのですか」

「え、ええ……」

「姫様は彼が竜騎士だったということをご存知だったのですね」

それで信頼して預けたのだろう、その判断はご立派だとセリアは考えたが、リラは返答できない。そんな意図は全くなかったからだ。「かあさん」

言葉も行動も周囲を爆破し続けている竜騎士は、何も気にせず『御印』に呼びかけた。

途端『御印』がやわらかい光を発する。その光は金色に輝き、一頭の巨大な竜の姿を宙に映し出した。

うつすら透ける金色の竜。ストームとは大きさが五倍は違った。

「ほれ、ネズミじじい、感想はどうか？ 竜聖母ドラゴンセイターに会ったご感想を」

と少年竜騎士は金色の竜を振り仰ぐ。

「どどどど、竜聖母!？」

あわてふためき、逃げようとするグローネスだが、完全に腰が抜けているため果たせない。

金色の竜、『竜聖母』は優しい青玉サファイアのような瞳でグローネスを見下ろしている。

とても悲しげに。哀れんでいるように。

やがて、静かな『声』がした。

【……ラディ、貴方ならどうしますか】

小さな竜騎士はキツパリと言いつ切る。

「人が決めた法があるよ。それにしたがって裁くといい。おれや、かあさんが悩む問題じゃないと思う。裁く権利があるのは……まあ、ヒメサマだろーな。一番迷惑しただろうし」

自身も重傷を負ったことなど忘れたかのようにケロリとしている。【貴方のことに関してなら、私にも裁く権利はありますよ。可愛い貴方を害されそうになったのですからね】

「いや、あれはその……おれが油断しただけで……ごめんなさい」
しどろもどろに言っつてラディは結局謝った。死に掛けたのは確か

に悪いと思っっている。とつとと実力を発揮していればあんな怪我を負うこともなかったのだ。素性が知れるのがイヤで判断を誤った。

【間に合ったのだから良しとしますが……あまり心配させないでね】
「……はい」

ぐったりとうなだれるラディに、『竜聖母』は笑ったようだ。『声』が優しく笑っている。

まるで親子みたい、とリラは感じた。とても仲の良い親子のようだ。

そういえばラディは『竜聖母』のことをかあさんと呼んでいた。気にはなったがどういう意味と問うヒマはなかった。

『竜聖母』がリラのほうを見たからだ。

『御印』の青い寶石のような瞳がリラを見ている。恐れは感じない。まず先に感じるのは、ぬくもりだ。とても優しい瞳の上、どこかで見たような紋様。

ストームと同じように『竜聖母』にも額に紋様があった。それはファージの王家が使用している紋様と同じ配置だ。

中心に青玉サファイア、左右に翠玉、根元に紅玉ルビー、そしてそれらに沿うような真珠色の紋様。

神々しく、また、美しい。見とれてしまう。

ぼんやりと見とれていると、優しい『声』がした。

【……がんばりましたね、リラ姫。この子を……ラディを信じてくれてありがとう】

「え、あ！ お、お礼を言われるようなことは何も……」

あわててそう答えて、どこかで聞いたような声だと今更に気がつく。

夢の中、自分を励まし続けてくれたあの優しい声。

「も、もしかして……！」

『竜聖母』は頷いた。

【ええ、私です。夢を使って貴女に話しかけたのは】

リラは再び固まった。無礼なことを言わなかっただろうか？

……ど、どうしよう……。ラデイのこともそうだが、彼女の常識を打ち壊すことだらけだ。穴があったら入りたい。

「なんだ、そんなことしてたのか。だったらおれにも話しかけてくれりゃ良かったのに」

と、ラデイは珍しくすねているようである。そうしたら、素性を隠さず暴れたのに、などと呟いている。

【厄日でしたね、ラデイ。でも良いこともあったでしょう？】
「……………いーこと？」

『竜聖母』の言葉に心当たりはないらしく、ラデイは本気で悩み始めた。

冷や汗を忘れてリラはむっとする。

……私と逢ったことはいいことじゃないわけ！？

彼女のほうはラデイと出逢ったことを人生で最良だと思えるのに、彼のほうはそうではないのだろうか。むくれるリラを見て、ラデイはぼんと手を叩く。

「あー……………いやでも災厄のもとは……………」

と、ぼそり。これにはリラもまともにかちいんときた。

「なによ！ 私と会ったことはいいことじゃないわけ！？ そりゃ狙われたのは私で、巻き込んだのも私だけどー！！」

それでも、いいことって言ってほしい。

「あ、治った治った」

ラデイは言って笑う。

「え」

「いや、だってなんかおとなしいから。どーしたのかなと思って。

強い強いヒメサマらしくねーなあってさ」

ラデイなりに心配してわざと言っていたらしい。少年の心配りに気がついて、リラは少し嬉しくなった。

「なによそれ、私がおとなしいと変なわけ？ 気の強い姫で悪かったわねーっだ！」

つい可愛くないことを言ってしまう。

「うん、確かに」

まじめな顔で頷かれてしまった。一気に不安になるリラである。

「……ほんとに？」

「いや、うそ」

少年は笑った。本気でないのは明らかだ。

「本気にするなよ、冗談だから。気の強いほうがおれは好きだな」

「なあんだ、おどかさないでよ」

あっさりそう言われあっさりそう返し　あまりにもあっさりだ
つたため、気がつくのが数瞬、遅れた。

……いま、『好き』って言わなかった？　言ったわよね？　……

えっと、深い意味はないのよ、きつと！　……多分！　……ない……

……のかしら……？

問い返すこともできず、今度はリラが考え込んでしまう。他愛ない言葉で一喜一憂している姿はすっかり恋する乙女だ。

そんな彼女を見る『竜聖母』の視線は優しい。姫君の想いに気がついていいるのだろう。まるで母親のようなまなざしで、小さな竜騎士に恋する姫君を見守っている。

その間にラディはグローネスを縛り上げるように兵たちに指示していた。

『祝福』の竜騎士、その竜、拳句に『竜聖母』ときて、グローネスはすっかり逆らう気力を失くしたらしい。

ぐったりとうなだれて、もうされるがままだった。

「あとは、このジーちゃんだな」

気絶しているタタラを見下ろす。今は気絶しているし、目覚めてもラディがいるが、これだけ危険な思考の魔道使いを、何の手立てもないまま拘束しても意味がない。

魔道が使える以上、普通の拘束手段では意味がないのだ。

そこにラディの頭から離れてストームが荷袋をくわえてきた。

「お？　使ってもいいのか、かあさん？」

【魔道使いなら仕方ないでしょう】

『竜聖母』に許可をもらい、ラディは『何でも出てくる魔法の布袋』に手を突っ込んだ。

何が出てくるかと思ったら、丸い玉をつかみ出す。

「？なにをするのです？」

すっかり敬語になっっているセリアに苦笑しながら、その玉をタタラにかざした。

透明だった玉が、見る間に灰色に変わる。

「じーちゃんの魔力をここに封じ込めるんだ。魔道の道具はあんまり使いたくないんだけどね……無駄遣いって怒られるから」

【それは売ったりしようとした場合の話ですよ】

「わかつてるよ。おれはそんなことしません」

どうやら『魔法の布袋』は『竜聖母』がラディに与えたものらしく、ある程度の制限をかけているようだった。たしかに意思の弱い人間がこんなもの持っていたら、悪用のし放題だろう。

……玉がすっかり灰色に変わるのを確かめて、封印は完了したらしい。

「よし終わり！　じーちゃん縛って良いよ」

これでタタラはただの老人だ。魔道さえ使わせなければ、非力な老人でしかない。

あんなに怖かった老人は、いまただの人だ。

「これで……終わり？」

「うん、終わり」

リラに頷いて　竜騎士は頭上を見上げる。『竜聖母』は小さな騎士を見下ろしている。

「かあさん、ありがとう。これでしばらくこんなアホなこと考える奴はいなくなると思う」

実在する『竜聖母』とその竜騎士。存在が知れたのならファージで無体な真似をする輩は減るだろう。

それを狙ってラディは『竜聖母』を呼び、『竜聖母』もまた答えた。

神が何かする必要はない。

その存在を示すだけでいい。戦うのは竜騎士　ラディの役目だから。

『竜聖母』の姿が薄れていく。

【ご苦労様でした、ラディ。私の可愛い子。私はいつでもあなたの幸せを願っています】

「うん、わかってる。ありがとう、かあさん。また、いつか」

どこか寂しそうに、別れの言葉が交わされる。

そして、彼らの前から金色の竜　神の姿は消えた。

こうして、竜の国で起こった反乱は、若干十歳の幼い竜騎士ドラゴナイトによってたつた一日で終結を迎えた。

その日の夜、あわてて駆けつけた現ファージ国王、ラズ・ファージ・フォレストは姫であり、愛娘であるリラ・ファージ・フォルシアを護った小さな竜騎士、ラディ・スポットに厚く感謝し、盛大な宴を開いた。

4・共に、戦い・4（後書き）

ちよつとらぶ。次回完結です。

エピローグ・これからを、ずっと

宴もたけなわになり、酔っ払いが何をしているのか分からなくなってきたのを見計らってラデイはストームを頭に乘せたまま、広間を抜け出した。

中庭に面した廊下を歩きながら呟く。

「……疲れた……」

ああいう場所は苦手なのだ。宴会や騒ぐのが嫌いなのではない。ラデイ様、竜騎士様ドラゴンナイトと言われ、英雄扱いされ、騒がれるのが嫌なのだ。素性がばれたらそうなることが目に見えていたので、なんとか隠そうとしていたのである。

「……逃げるか？ ストーム」

半ば以上を本気で頭上のストームに言う。忠義な竜ドラゴンは主の気性もよく分かっているため、反対はしない。くるる、と同意するように鳴いた。ストームもラデイと同じくまだ幼竜こどものため、人語を話せないが、主には通じる。

「やっぱ逃げるか、それしかないな」

このままここに居続ければ、王族お抱えにと願われるのは目に見えている。一番嫌な事態だ。

自由気ままに旅をしていた。誰にも指示されず、どこにも留まらず、何にも縛られない。

そんな風にずっと過ごしていきたくと、思っている。世界に縛られない人生を。

ふと、リラの顔が浮かんだ。それも、よりによって泣きそうな顔。

「う」

ファージ国の美しい姫君。気が強くてわがままで、世間知らずでも優しいところもあって涙もろいところもあって、心配性で。

……昼間、犠牲者を弔ったとき、姫も出席していた。埋葬される

人々に泣きながら謝っていた。彼女も被害者なのに。

いつからか彼女も、当たり前前に護られるのではなく、誰かを護れるのではないかと思っただけで行動していたようだ。

今回の一件で少しだけ、変わったのだろう。

ただ護られるだけじゃなくて、何かを護れるように。

「ラデイ」

「うわあっ!!」

不意に後ろから声をかけられ、ラデイは思わず声を上げた。

「ど、どしたの？」

声をかけたリラのほうも驚いた。刺客の気配を敏感に察知するラデイが気付かなかったからだ。

「す、すげーおどろいた」

「気付かなかったの？」

「いや、ちよつと考えごととして……って何でこんなところにいるんだヒメサマ」

「こつちのセリフよ。宴の主演が宴を抜け出してどうするの？」

首をかしげてそういつてくる姫君に、返事に詰まる少年竜騎士。

その宴のあとが嫌でこれから脱走するなんて言えない。

「ちよつと風にも当たろうかと思って」

「ごまかしに走る。この場さえしのげばと思っていたのだが、

「ふーん……逃げようと思ったわけじゃないのね？」

鋭い指摘にぎくりとする。内心なんで分かったんだと動揺しながら、なんとか顔には出さないようにしてしらばくれる。

「何だよそれ。おれがどーして逃げるんだ？」

「だってラデイ、王族とか嫌いなんでしょ」

う。かなり鋭い返答に、心で呻く。

「最初助けてくれたとき、声かけたら凄く！ 嫌そうな顔してたわ」

うう。さらに呻く。確かに嫌だったのだから仕方がない。『竜聖

母』の加護を受けるフェアージ国王家の者で、さらに女でなかったら放っておいたかもしれないくらい、王族貴族に関わるのはイヤだっ

た。

「いやちよつと前にいろいろあつて……」

過去に何かあつたらしい。

「……何があつたの？」

「聞くな。言いたくないし思い出したくもないんだ」

よほどのことがあつたらしい。それもそれで気にはなつたが、リラにはもつと気になることがある。

「……そんなに、嫌なの？ 王族とか……」

かすかな不安を滲ませている声にラディは気がついているのかどうか。

どうあがいてもリラは王族で姫君だ。

王族が嫌いなら、ラディには好いてももらえないかもという不安がある。

「うー……まあ嫌いって言えば嫌いだけだな……」

ラディの返答も珍しく歯切れが悪い。

「そう……」

どう返していいか分からず、とりあえずそう返して……沈黙。会話が途切れる。居心地の悪い空気が流れ、しばらく。

「あつ！」

ラディが声をあげ、ズボンのポケットに手を入れた。

取り出したのは『御印』^{みしるし}。あの後いろいろとゴタゴタしていたので、返すのを忘れていた。

「忘れてた、返すよ」

これを持つべき者はリラである。婚約者の王子が亡くなったため、また次の相手が見つかるまで、これは彼女が大事に持つべき品物だ。手渡され、リラはそのままラディに渡したくなった。持っていて欲しい。そう思ったが、さっきのラディの言葉を思い出し、受け取った。

王族は嫌いって……言っていたものね。寂しくそう思いながら、話題を変えようとする。

「ねえ、訊いていい？」

「ん？ なにを」

「どうして竜聖母をかあさんって呼んでいたの？」

少年は『竜聖母』をまるで母親のように呼んでいた。『竜聖母』も少年をわが子のように言っていた。それは何故なのか？

「おれのかあさんだからだよ」

返事は明快。どういう意味が分からずに、リラが眉を寄せると、彼は苦笑した。

「おれ、奈落アビスに捨てられててさ、竜聖母に育てられたから」

「！？」

リラは胸を突かれたような感覚に陥った。奈落とは何もない荒野で、人の住めぬ場所でもある。真昼から魔物が闊歩するような場所だ。

そんなところに捨てたということとはラディの両親（あるいは片親）は初めから彼を死なせるつもりで捨てたのだ。

誰かに拾われるようにとの希望すらない場所、それが奈落。

人の想像すら受け付けない地獄、死と恐怖の広がる荒野だ。

そんなところに彼を捨てた。

リラの瞳からポロポロと涙が落ちる。悔しかった。

「！？ ど、どーしたんだよ！？」

ぎょっとしたのはラディのほうだ。

「何で泣く！？」

「だって……ひどいわ！ 奈落に捨てるなんて……ひどいじゃない！！」

「そんなことで泣くなよ……おどろいただろ」

「そんなことなんかじゃないわ！」

本気でリラは怒っている。悲しくて、何より悔しい。

ラディを 奈落 なんか捨てるなんて！！

「祝福の竜騎士にまでなったラディを、奈落アビスに捨てるなんて！ ひどいー！」

「違う、逆だつて」

ラデイは笑っている。

「おれは奈落に捨てられたから、竜騎士になれたんだ。奈落に捨てられなかったら、竜聖母には会えなかった」

「? どうしてよ」

「かあさんは奈落にいるんだ。そこで吹き出る瘴気から世界を護つてる」

だから『竜聖母』は 奈落 から動けない。だから 奈落 に捨てられたラデイは『竜聖母』に拾われた。

大切に大事に育ててもらつて、『祝福』を受けられるくらいに強くなれた。

奈落 で死ぬこともなく、外に出て、今自由に生きている。

「だから別に気にしてない。両親を探す気もないし。かあさんは探してみたらつて言つてくれてるけど、おれはあんまり気にしてないんだよなあ。おれのかあさんはもういるから。それに、かあさんを奈落 から開放してあげたいしさ」

ラデイに影はない。明るく彼は言う。

「すごいだろ? 竜聖母がかあさんなんて、世界におれ一人だけだぜ?」

とても明るくそういつてくれたから、リラも笑えた。

「そうね、そうだね、その通りよ」

「だろー?」

そうして二人は笑いあつた。月の照らす廊下を、二人きりで。

何も考えずに、ただこの時間が続けばいいと。

「 姫様ー! ラデイ様ー! 何処いどころにおいでですかー?」

ひとときが途切れてしまったのは、姫君と竜騎士を呼ぶセリアの声が聞こえてきてから。

どうやら姿をくりました宴の主役たちを探しに来たらしい。

そうそう脱走しっぱなしというわけにはいかないようだ。

くるるる。頭の上でストームが鳴いた。

「……しよーがねーな……戻るか……」

どうも今夜の脱走は難しいようだ。

リラにも見つかったし、機会を待とうと考えを切り替えた。

ラディの心の根本にある想いがどうなのかは、まだ分からない。

「行こーぜヒメサマ」

呼びかけると、姫君はなにやら眉をしかめている。何か機嫌を損ねるようなことを言っただろうかときよんとするラディに、

「リラ」

「へ？」

「ヒメサマじゃないわ、私にはリラって言う名前があるの」

そう言って背筋を伸ばす。強気を装っているが、表情には緊張があった。

ようは、名前で呼べ、と。

「……そんなわけにいかねーだろ。オヒメサマなんだから」

「じゃ、私これからラディのこと竜騎士様って呼ぶ」

「うげ」

しんそこ嫌そうにラディは顔をゆがめる。やめてくれと言いたげだ。

リラはやめなかった。

「それともラディ様とか勇者様のほうがいい？」

「やめろってたのむから」

「だってそう呼ばれたっておかしくないのよ。ラディが私のことヒメサマって呼ぶほうが変だもの。祝福をうけた竜騎士で、そのうえ竜聖母の子供なんだから」

反論ができないほどの正論だ。リラの父王すら頭を下げるような相手であるラディが、リラをヒメサマと呼ぶほうがおかしい。

にっこりわらってリラは言う。

「じゃ、行きましょ、ラディ様」

「……やめてくれ……」

何度も見た彼のゲンナリした表情。リラは負けなかった。

「じゃ、リラって呼んでくれる？」

「……うー……」

ここで負けたら女がすたる。

「勇者様」

「……」

「竜騎士様」

がくりとラディは頭を垂れた。乗っていたストームが落ちそうになり、あわてて羽ばたく。

あと一押し。

「ラディ様」

「……わかった！ リラだなりラ！ だからそー呼ぶのはやめてくれー！」

ラディの返答はやけくそである。完璧に、彼の負けだ。

「はい！ ラディ、行こ」

いきなり上機嫌になったリラは踊りだしそうな足取りで駆け出し、すぐ止まる。

ちよつとモジモジして、振り返った。一転して、不安げな表情だ。

「王族……もつと嫌いになっちゃった……？」

わがままを言ったと感じているらしい。

ラディは数回瞬いた。それから、リラから視線を逸らす。

可愛い、とか思ってしまったのがばれないように取り繕って返答する。

「……もともと王族は嫌いだけど……ま、ヒメサマはそーでもない……」

照れくさそうに言う彼に、リラは大輪の花を思わせるくらいに綺麗に嬉しそうに笑顔を浮かべた。

それから、気付いて笑顔のまま指摘する。

「私はリラよ、ラディ様っ」

「だーっ、やめろそれはっ」

叫ぶラディに、リラはいたずらっぽく舌を出す。嫌われてはいな

いよつだから、もう少しだけわがままを言いたい。

「ちゃんとリラって呼んでくれないと、ずっと様付けするからねっ」
なによりも、離れて行って欲しくない。

「勝手に城から出て行っても、ラディ様って書いた人相書きばらまくからねっ」

行かないで、そばにいて、なんて素直に口には出せないから。

「……なんちゅーことを言うんだ……」

思わず想像してしまい、ぞっとするラディである。怖すぎる想像だ。

賞金首と変わらないではないか。

「勝手に出て行っちゃダメよ。本当にやるからね、私」

彼女の目に本気を感じ取り、ラディは呻くしかない。

「……わかった、わかりましたよ。身にしてみて分かった」

本当にやりかねない姫だということが。

「しよーがねーなあ、もう」

呟いてすたすたと歩き出す。脱走はどうやら不可能らしい。根性悪の姫に捕まったのが運のツキだ。

でも、それほど不快ではないのは何故だろう？

……ま、いいか。ラディは考えるのは後にまわすことにした。とりあえずは、このままでいてもいい。

『とりあえず』は、この気の強く、わがままで世間知らずな姫のところにもいい。

退屈はしないですみそーだな。しみじみそう思った。

不運とか不幸とかハズレとかいう単語がちらつとよぎったが忘却する。

リラが、少年竜騎士がついてきていないことに気がついて振り返った。

また不安げな顔をしている。わがままを言い過ぎたかと思っっているのだろう。

ラディは軽く笑った。

可愛いところもあるんだよな。ちらりと思う。

「ほら、なにやってたよ、行くぞ、リラ」

呼ぶと、心の底から嬉しそうに笑ってわがまま姫は頷き、小さな竜騎士に追いついて、共に歩み始めた。

竜の大陸、竜の国。

『ドラゴンナイト竜聖母』の加護を受けし所。

ファージと呼ばれる国。

その国で、伝承歌サーガが生まれるのは遙か後。

リラ・ファージ・フォルシアと、ラディ・スポット。

わがまままで美しい姫と、勇ましい小さなドラゴンナイト竜騎士の物語を、後の人々はこう呼んだ。

ドラゴンナイト・サーガ、と。

エピソード・これからを、ずっと（後書き）

ちよつとラブから、だいぶんラブ？ これにてドラゴンナイト・サ
ーガは完結です。お付き合いありがとうございました。

後日談・ある晴れた日、市場での出来事

きゃあきゃあとはしゃいでいるのは、とんでもない美少女だった。彼女の横にいるのは十歳くらいの少年で、頭には大きな鳥がとまっている。

少女は楽しそうに店を覗いていた。少年のほうは軽くため息をついて彼女について回っている。少年の背には不釣り合いな剣が背負われており、一応ボディガードをきどっているようだ。

姉弟にはちよつと見えない。が、他人というには親しげだ。もしやまさか恋人……そんなわけはないだろう、きっと親戚か何かだと目撃者達は苦笑した。

「ねえねえ、ラディ！ これは何？」

「え？ ああ、これはティウスの葉っぱで、煎じて飲むとハライタにきく」

「大きいのね、扇子みたい！ 初めて見たわ！ こっちは？ この丸い……木の实？」

「それはタウタウ。煮てたべるとうまい。でも多分リラの口にはあわないと思うぞ」

「ええー？ どうして？ ラディは食べたんでしょ？ 美味しくないの？」

「いや、おいしいけど……リラが普段食べているような料理とはちがうぞ」

「食べてみたいわ！ 買って帰りましょ！ 料理してもらおうから！ おじさま、三ついただける？」

「……とめたほうがいいと思うか？ ストーム」
「ぴい」

「……そーか？ これも経験って……うーん」

少年は考え込み、ふと、顔を上げた。

「……ストーム」

「ぴいちち」

「リラの傍にいる」

「ちちち」

鳥が羽ばたいて少女の肩にふわりと乗った。鋭い足の爪で少女を傷つけないようにやんわりと優しく。

「あら、ストーム……どうしたの？ あ、この実、ストームも食べたいの？ じゃあ、あなたの分も買いましょうね」

美しく微笑む少女に苦笑して、少年は素早くその場を離れた。

「絶対イイとこの娘だぜ、ありゃ」

「さらって身代金を……いや、どこかに高く売り飛ばしたほうが

」

市場の片隅での悪巧みに、少年は肩をすくめた。視線を感じて来てみたら、思ったとおりの展開で、あきれた。確かにあんなにオノオノさん丸出しで歩いていたら、世間知らずのお嬢様と見られて当然だとも思う。

だが、彼女にちよっかいを出されたら困るのだ。いろいろな意味で。

「あー、王様も大変だ。あんなに善政敷いてるのに、こんな連中つてボクメツされないもんだな」

子供の声に、男達は硬直する。

「あ、このガキ、あの娘と一緒に居たガキだ！」

「とっ捕まえる！ 一緒に売り飛ばす！」

男達が構えたのを、少年は乾いた笑みで迎えた。

「……あー、ラディ、どこ行つてたの？」

「ん。のどかわいたから飲み物買ってきた。リラも飲むだろ？」

「うん！ ありがとう。あ、ねえねえストームがわたしの肩に乗っ

てきたの！ タウタウの実が好きなのかしらと思って、ストームの分も買ったわ」

少女の腕には紙袋。それをみて、少年は苦笑い。鳥は再び少年の頭に乗る、小さく鳴いた。

「ほら、ジュース」

「ありがとう。これはなんていう飲み物？」

「普通のジュースだよ。リンゴすってしぼったやつ」

「あ、美味しい」

「だろ？」

笑って、少年はさりげなく少女の手から袋を受け取った。

のほほんと市場を見て回っている二人を、商人達がほのぼのと同じく送って、しばし。

市場のかたすみで、この限界でも悪名高い連中が、荒縄でぐるぐる巻きになって倒れているのが見つかった。

『ひとさら反省中。猛修行中なのでさわらないでください』

と、書かれた張り紙が貼られていたので、しばらく誰も（警備隊ですら）そのままほったらかしにしていたのは余談である。

子供のような字だったというのも、また、余談である。

「ねえラディ」

「ん？」

「今度はもっと遠くに行きましょう。城下よりもっと遠く！」

「えー？ セリアのおねーさんに怒られるぞ」

「大丈夫よ。ストームなら飛べるし、隣の国くらいすぐでしょ？」

「……となりの国まで行く気かよ！？」

「大丈夫！ ラディと一緒にだよ！」

「いやまあ……一緒なら大丈夫っちゃー大丈夫だろうけど……」

ワガママ姫の無邪気な申し出に、史上最強最年少の竜騎士は大きなため息をついた。

今度抜け出すときは事前に姫の周囲に少し説明しておこう。

そうでなくては護衛の騎士達が気の毒だ。今回はすぐに戻るつもりだったので軽い気持ちで乗ったが、本来なら気軽に外出できる身分ではない。

気晴らしがしたいのだと言われて情に流されたのもまずかった。

姫は確実に味をしめたようだから。

……自分も楽しかった、というのは、とりあえず、心の中にしまっておいた。

後日談・ある晴れた日、市場での出来事（後書き）

後日、姫と竜騎士は、こんな感じで自覚なくイチヤイチャしています
（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6585f/>

ドラゴンナイト・サーガ

2010年10月8日13時21分発行